星師

基

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星師

【Ｎコード】
Ｎ７７５３Ｕ

【作者名】
基

【あらすじ】
都内の高校に通う蒼路（そうろ）には、右手の甲に星型のあざがある。それは、彼が普通の人間ではなく、「星師」であることを示す印だった。

星師とは、すなわち闇に生きるさだめを背負って生まれた者。
世にはびこる「魔」を祓うことを使命とし、そのために不思議な異能を持つ者たちのこと。

遠い昔、泣きじゃくる幼馴染を守るために星師になると誓った蒼路は、過酷な運命と真正面から向かい合い生きていく。
その中で再会する幼馴染・深紅（みこう）や、双子の星師・ハルとアンなどとの出会いを経て、彼は次第に成長してゆく。

大切なものを失わないために――もしも失ったとしたら、もう二度と同じことを繰り返さないために。
大事な者を守るために強くなりたいと願う、不思議な星を持って生まれた者たちの物語。

登場人物

高村（たかむら）　蒼路（そうろ）

十五歳の少年。高校生。
一見ふつうの高校生だが、右手の甲に五芒星の形をした特殊なアザを持つ「星導師（せいどうし）」である。
妖怪や悪霊等を視認することができ、彼らと戦うことが役目。
母と妹との三人暮らし。
特技は家事。苦手な事は勉強。
口は悪いが素直で心優しい性格。正統派美人が好み。

五辻（いつつじ）　深紅（みこう）

十六歳の少女。蒼路の幼なじみ。
若手の中では最強と言われるほどの腕利きの星導師。
魔物に対しては容赦がなく、冷酷とも言えるほどの戦いぶりを見せる。
相当な美人。どこかの旧家のご令嬢。
気丈で硬派な性格。
学校以外ではだいたい着物を着ており、着物が好きらしい。

伊勢（いせ）　遙（はるか）

十七歳の少年。蒼路の高校の先輩。
眉目秀麗で頭脳明晰、人柄も良い生徒会長。ややうさんくさい。
イギリス人とのハーフで眼が緑色。
他校に通っている双子の妹がいるらしい。
通称はハル。
好きなものはビスケット。

伊勢（いせ）　阿南（あんな）

十七歳の少女。遙の双子の妹。
通称アン。ハルとは違う高校に通っている。
さばさばして姉御肌な性格。特技は運動。
眼が緑色なのは兄と同じ。
好きなものは焼き立てのパン。
兄とはとても仲が良い。

筧（かけい）　喜代（きよ）

蒼路の師匠で星師。八十八歳。
蒼路にはババアと呼ばれている。
巨大な屋敷に一人で住んでいるが、その屋敷は妖怪たちの吹き溜まりになっている。
年老いてはいるが相当な術者らしい。
若手の星師の指導に力を入れている教育者。

青藍（せいらん）

深紅の召喚獣。
彼女に絶対の忠誠を誓っているが、おしゃべりが過ぎて時々怒られている。
彼女からはランと呼ばれる。
元々は沖縄出身のケラマジカ。

緋醒（ひざめ）

人を喰らい、妖怪となった黒妖犬（こくようけん）。
漆黒の毛並みにしろがねの爪、緋色の瞳を持つ。
強大な力を持つ大妖である。
元々は山を守る鎮守神（ちんじゅがみ）の狼であった。
二匹の銀狼、ギンとオリを眷族として従えている。

花緒（はなお）

蒼路の友達の猫又（ねこまた）。
百年以上を生きる猫で二本に分かれた尾を持つ。
人が好きな善き妖怪で、街をパトロールして回っている。
純白の毛並みに左右色違いの瞳を持つ。
体の大きさを自在に変えられる。

レディ・オーア

ハルの召喚獣。グリフィン。
甘茶色の体躯に黄色い眼をしており、蒼路からは「獅子鳥」と呼ばれる。

プライドが非常に高い。
略称オー。

プロローグ

――星導師（せいどうし）、という。

体のどこかに星を持ち、何がしかの異能を持つ者たちのことを。
彼らは遠い昔に神々たちと契約を交わし、その役目と力を授けられた。
すなわち、この世のありとあらゆるものに宿るとされる八百万の神、彼らを守るという役割と、そのために必要な異能力を。

世には様々な闇が潜む。
そしてそれらの殆どは、人の心から生じたものだ。
憎しみに悲しみ、狂気、嫉妬、差別意識。
人の弱い心がそういった感情に乱れた時、本来ならば相容れない存在である「悪」や「魔」が取り憑いて、真の「闇」として成長してしまうのだ。

神々は闇を厭（いと）う。
光が喰われてしまうからだ。
ゆえに、星導師たちをこの世に送り、闇を祓って光を取り戻すようにと命じられた。

彼らは決して歴史の表に顕れる存在ではない。
ひそやかに、だが着実に、その「星」の力と役割を後世へと伝えてきた。
どんな名声も得られなくとも、彼らがこれまでに救ってきた命は数かぞえきれない。
その存在は、光の無い闇夜でも人々を照らし、導く、まさしく星そのものだ。

そしていつからか、彼らを知る者は、その在り様をこう呼ぶようになった。

星を持って闇を祓い、世に光を導く者たち、つまり――

――星の導師、と。

蒼路

強くなりたい、と思っている。
俺は、彼女を守りたい。
気丈で、いつも前だけを見ているあいつが、本当は大きな悲しみを抱えているということを知ってしまったから。
だから助けたい。
誰よりも、その近くで。

――蒼路（そうろ）。

六年前、親父さんが亡くなった時、あいつは泣いた。

――怖いよ、蒼路……！

雨に打たれながら、血まみれの遺体に取りすがるあいつに、俺は何も言えなかった。
違う、その時だけじゃない、ずっとだ。
いつも俺は、あいつの背中を見ているばかりで。
あいつの強さに憧れるばかりで。
悔しいけれど何もしてはこなかった。

だから俺はあの時誓った。
強くなると。
誰よりも、あいつよりも強くなって、あいつを守ると。

――そしていつのまにか、六年の歳月が経った。

＊＊＊

朝からクソ暑い日だった。
できるなら家でじっとしてたいのに、こういう日に限って、屋敷からは呼び出しがかかる。
しかも、暑っ苦しいことこの上ない、着物着用というドレスコード付きで。
……あのクソババアめ、絶対狙ってやってやがる。
苛々と汗を拭きながら門の前に立つ。じゃりっと草鞋がコンクリートの地面に擦れた。
街を見下ろす高台に建てられた、この筧（かけい）家の巨大な屋敷。
辺りには一面竹が植えられ、先ほどまではうるさいほどだった蝉の声も、ここまで来るとほとんど聴こえなくなる。
大きな両開きの門は開け放たれていた。
だがまだ修行中の身である俺が、そう簡単に通してもらえるはずはない。
どうせあのババアの事だ、また罠をしかけているに決まっている。
俺はふっと息を吐き出すと、着物の合わせに手を突っ込んでくないを一本取り出した。
そのまま手首をしならせ門めがけて放り投げる。
すると――くないは門を通過することなく、宙のある一点で捕らわれて砕け散ったのだった。

「……めんどくせぇ」

ち、と舌打ちをした俺だったが、既に走り始めていた。
くないは止まっただけではなく、砕け散ったのだから、仕掛けられた罠は決まっていた。
門番がいるのだ。

開け放たれた門の中央、先程くないが捕らわれた辺りの空間が、じわりとわずかに光って歪んだ、と思ったら。
一頭の妖弧が現れた。
俺はすばやく右手を掲げる。
甲に刻まれた痣に左手を沿わせ、そこから何かを取りだすような仕草をする。
かすかに痛みが走り、左手が『何か』を掴む。
俺はその『何か』を引っ張りあげると、そのまま全力で妖弧の方へと突っ込んだ。

『ちょ……真正面からっ！？』

妖弧はあわてふためいたが、俺は全く気にしなかった。
手足をばたつかせて逃げようとする白い狐めがけて、両手に握ったものを思い切り振り下ろす。

『いっ、いやーーっ！！』

狐は、額に俺の刀がぶち当たる寸前に、そんな悲鳴を上げて遁走した。
白い姿があっという間に空中にドロンし、結果として、俺の刀は門の敷居にふかぶかと突き刺さる羽目になる。
俺はため息をついてそれを引き抜くと、再び右手の痣の中に納めて、大股で門をまたいだ。
ろくでもない門番だ。まあ、どうせババアが臨時に雇った妖怪なんだろうが。
それにしても、屋敷の中に入るだけでもこの面倒臭さ。
ざくざくと玉砂利の敷かれた車道を歩いて行きながら俺は呪詛の言葉を吐いた。

「だぁから嫌なんだよ、あのクソババアがっ！」
「――誰がクソババアじゃと？」

ひぇっ！
俺は跳び退った。
いつの間に現れたのか、背後に、他でもない『クソババア』が立っていたのだ。
白い髪にしわくちゃの顔、小さい体を着物に包んで、背中の後ろで両手を組んでいる。
俺は慌てて弁解を試みた。

「い、いやっ、何でもねえよ！！」
「ん～？　何やら私に対してイラついているように見えたんだがのう。違うのか？」
「違います違います」

思い切り首を振って見せる。
はっきり言ってババアの怒りだけは買いたくなかった。
この老婆、見た目はただの歳寄りだが、じつは恐ろしい奴なのだ。
何しろ、齢八十八才にして現役の星師（ほしし）、しかも、その名門中の名門、筧家の当主を務める器。

「……フン。まあ良いわ。それよりもお前には話があって呼んだのじゃ。ぐずぐずしてないで早く中に入らんかい」

ババアはまだ胡散臭そうに俺の顔を覗き込んでいたが、やがてふいと背中を向けて、屋敷の方へと歩き出した。
俺は心底ほーっとしながらその後を追う。
玄関から廊下を使って中庭へと回り、やがて池のある裏庭へと辿りつくと、今まで入ったことのない間の前で待たされた。

「ここでしばし待つが良い。勝手にふすまを開けるんじゃないぞ」
「開けねぇよ。っつか、ここどこ？」

いつもは屋敷に呼び出されると、必ずと言っていい程修行道場の方に通されていた俺は辺りをきょろきょろしながら聞いた。
ババアは口をへの字にしたまま答える。

「すぐにわかる。とにかくしばし待て」
「いいけど。また妖怪差し向けてくんじゃねーだろうな」

ババアのいつものやり口を知っているので、完全に筧家不信に陥っている俺は言ったが、ババアは黙ってこう答えただけだった。

「……そのようなことはせん」

そして廊下をすたすた歩いて行ってしまう。
俺は首を傾げたが、取り合えず待てと言われたので、待つ事にする。
着物の裾を払ってあぐらを掻くと、廊下に座り込んだ。

＊＊＊

『また星持ちが居ますな』
『うむ。いつもの姫様とは違うようじゃのう』
『しかし星持ちはうまそうな匂いがしますな』
『うむ。はらわたを喰うと人間になれると聞いたが本当かのう』

……池の鯉たちがそんな風に会話している。
しばらく時間が経っていた。

大した時間じゃなかったが、俺は屋敷の清浄な空気と、さらさら笹の葉が風に揺れる音に聞き入って、すっかりぼうっとしていた。
池の水面が夏の太陽にきらめいて揺れている。
ゆったりと泳ぐ鯉の影は綺麗だが、彼らはたぶん本当の魚じゃない。
さっき話をしていたのから考えて、妖怪の一種だろう。
ふいに、向こう側からきゃらきゃらと笑う子供の声が聴こえたので顔を上げると、おかっぱ頭の女の子が手に毬を持って、渡り廊下を走って行く所だった。

『星持ちが来たよ』
『みんな、星持ちがいるよ、あそこに』
『お姫様に会いに来たんだ！』

楽しそうな笑い声に、俺はまたかと肘をついて、その子が走って行く様子を眺めた。
筧家にはあの年頃の子供はいない。
――あの子も妖怪なのだ。座敷わらし。
俺はため息をついて苦笑した。
相変わらずこの家は、妖怪の吹き溜まりになっているらしい。

「待たせたな、蒼路（そうろ）」

名前を呼ばれて、俺ははっと顔を上げた。
ババアがそこに立っていた。
またしても、気配を全く感じなかったので俺はビビりながら立ち上がる。
……だから怖えんだよ、こいつ。

「ああ、待たされた。何だってんだ、一体」

「相変わらずの減らず口じゃの。仮にも星師の卵、もう少し品格を持て」

ババアは眉を跳ね上げながら俺をにらんだが、俺は意に介さなかった。

肩をすくめて両手を広げて見せる。

「おあいにく様。生まれが悪いもんで、これ以上にはなれねえよ！」

「……まあよいわ。入れ」

やがてババアが襖を開けた。

小柄なうしろ姿に続いて、俺も入る。

四面張りの小さな部屋で、奥にはまた襖があった。多分、さらに部屋が続いているんだろう。

よく滑る畳を足で踏みしめ、促されるままそこに坐す。

ババアも少し距離を置いて俺の前に座った。

沈黙が流れ、どこかで風鈴がちりんと鳴った。

「……で？」

やがて俺から口を開いた。

このババアとあんまり長時間一緒にいたくないのだ。なんつーか、居心地が悪すぎて。

するとババアはすっと眼を上げて俺を見た。

「高村蒼路」

まともに名を呼ばれ、俺はビビる。

老いた顔の中でそこだけ一点、火のように輝く瞳。

「……な、なんだよ」

しどろもどろに俺は答えた。

ババアは一瞬たりとも俺から眼を逸らさないで、さらに続けた。

「お前、星師の修行を始めて何年になる？」

「……六年だけど。それが何？」

「今でも星師になりたいか？」

「――は？」

俺は思い切り眉をしかめていた。

何故ならババアの質問が、俺にとってかなり失礼な質問だったからだ。

前述した通り、俺は九歳の時から星師――星導師――になるための修行を始め、昼も夜もこの筧家にて猛特訓を重ねてきたのだ。

筧家は由緒正しい星師の一族であるが故、星師を絶やさぬために若手の育成にはかなり力を入れている。

そして筧の当主はこのババア、他でもない筧喜代だ。

ババアによる猛特訓というのが、興味本位で続けられるほど簡単でもラクでもないことは、想像すれば誰にだってわかるはずだ。

俺は息を吸うとババアを遠慮なく睨みつけた。

そして言った。

「あんた、俺を馬鹿にしてんのかよ？　俺はもう六年間も、あんたの元で命がけの修行をこなしてきた！　星師になりたいから、そのためだけに、俺は今まで生きてきたって言っても過言じゃねえんだ」

「そう怒るでない。相変わらず短気じゃのう」

ババアは嫌味ったらしく長いためいきを吐きだした。おまけに肩まですくめている。

ますます腹が立つことこの上ない。
……畜生、絶対馬鹿にされてる！
「短気とはなんだ短気とは！！　どっちが言いだしたことなんだよっ」
「うるさいのう、だからそうキレるでないと言っておるのじゃ。私は何もお前を馬鹿にしているわけではない――馬鹿だとは思っているが」
「んだとおぉおっ！？」
俺は激昂して立ちあがった。言わせておけばぬけぬけと！
懐からくないを取りだし、ババアの頭めがけて振り下ろす。
するとババアは当然のようにそれを左手の指一本で受け止めて、弾き返した。
……ちっ。
相変わらず隙がない野郎だ。
俺が舌打ちをして腕を下ろすと、ババアは何故か微かに笑った。
「――フム。少なくとも、すぐに星に頼るわけではなくなったようじゃな」
俺は面喰った。
ババアの笑った顔など、勿論始めて見るものだったのだ。
「……は？」
「昔はお前は、星の力を過信してすーぐに剣を取りだしたり、炎を出したり、無駄な力を使っていたもんじゃが。ちっとは成長したようじゃな」
「は？　え？　もしかして、試したのかっ？」
「人聞きの悪いことを言うな。それもこれも貴様自身のためなのじ

ゃからな」
「だから、さっきから一体何なんだよっ！」
俺の苛々は頂点に達した。
回りくどいことは大っきらいなのだ。
「言いたい事があるならさっさと言いやがれ！」
「あー、わかった、わかった。本心としてはまだ、お前に任せて良いものか悩むところじゃが……」
「いい加減ぶっ殺すぞ、ババア」
再びくないに手を伸ばして脅すと、今度こそババアはため息を吐いて、俺にこう言ったのだった。
「――蒼路。実は、お前に頼みたいことがある」
驚きのあまり時間が止まった。
……気がした。

「頼みたいこと……？」

俺は思わず座り込んでしまった。

ババアはうむ、とやけに神妙な顔で頷く。

腕組みをすると実はな、と切り出した。

俺もつい頷いてしまう。

「――ある者の護衛を頼みたいのじゃ」

「護衛？　俺に？」

言われたことが意外過ぎて、俺は自分で自分を指差すという古風なリアクションをしてみせていた。

ババアは眉を吊り上げて「他に誰がおる！」と言った。

気づけばしわくちゃの顔が俺の目前に近づいていた。仰け反る。

「うわっ！」

「お前も修行を始めて六年。そろそろ一人前の星導師として認めてやっても良いころじゃ」

「――マジで！？」

「だぁが！！」

一瞬歓喜した俺を押さえるように、ババアは顔をさらに近づけた。

俺は逃げ場がなくてうえぇ、と思った。だって、背中の後ろはまたふすまなんだよ。

ババアは続けた。

「だがな、わしから言わせればお前はまっだまだ弱いし、無鉄砲だ

し、馬鹿だし阿呆だしまぬけだし、一人前には程遠い！」
「言い過ぎだろ！」
「事実じゃろうが。そういうわけで、お前の他にももう一人護衛がつく」
「……もう一人？」
「そうじゃ」

ババアはそこでようやく離れた。
居住いを正すと自分の背後のふすまをちらとふり返って、

「入れ」

と命じた。俺は眼を瞬く。
ふすまの向こう側から淡々とした声が返ってきた。

「――失礼を」

そしてすうっと開かれたふすま。
華奢な指先が――あでやかな紅い着物が、その上に波を打って流れ落ちる漆黒の髪が。
何よりも、長いまつげに覆われた眼差しが。
次々と現れて俺を釘づけにした。
俺は、動く事ができなかった。
息すらできない。

「――深紅（みこう）……？」

信じられなかった。
彼女が目の前に存在して居ることが。
六年前、雨の中で号泣していた、あの幼い少女と、まさか。

――まさかこんなに早く再会することになるなんて。

「ええ。久しぶりね、蒼路」

「おやお前達、面識があったのかい？」

落ち着いた様子の深紅に対し、ひたすら驚愕するばかりの俺を見て、ババアが首を傾げていた。

無理もない。

だって深紅は、俺とは住む世界が違う人間なのだ。

この筧家よりもっとずっと高貴な家柄の娘で、しかもそこを継ぐべき次期当主。

俺はこいつと縁あって幼少時代を同じ里で過ごした幼馴染だが――六年前に別れて以来、もう会う事はないだろうと思っていた。

いや、ちがう。

正確に言うと、俺は深紅に会いたかった。

いつか正々堂々と会いに行って驚かせたかった。

そのために、星師になろうと修行していたのだ。

――だから、まさかその日がこんなに早く訪れようとは。

（……聞いてねぇんだよ）

驚きは次第にその性質を変化して、俺は不機嫌になってきた。

深紅がババアにこう説明しているのを、やたらふてくされた気分で聞いた。

「キヨ様はご存じではありませんでしたかしら。私と蒼路は同郷の出身なのですわ。子供の頃、彼の御両親には色々とよくして頂きました。もちろん、蒼路自身にも」

「ああ、そうであったな。そういえば蒼路の父親、将星（しょうせい）殿はそなた

の――」
「――やめろ」
とっさに遮っていた。
親父の話は聞きたくなかった。
取り澄ましたような深紅の声も。
ババアが怪訝そうな顔でこちらを見たが、俺はぜんぜん構わない。話題を変えてやる。
「余計な話してんじゃねぇよ。それより、もう一度ちゃんと説明しろ。何で俺が……」
その名を呼ぶのを一瞬ためらったが、名字を呼ぶのはもっとためらわれた。
俺は声を低めて言った。
「……深紅と組まなきゃなんねぇんだ？」
「決まっておろうが」
ババアは深紅の肩に軽く手を触れると説明を始めた。
「この深紅は若手の中では群を抜いて優秀な星導師。くわえてお前と歳も近く、今回の任務を遂行するにはうってつけの人材なのだ」
「それじゃ答えになってねえよ」
俺は声を荒げた。
自分でも何故かはわからんが、激しく苛々する。
すっと立ち上がるとババアを睨みつけていた。
「なんで深紅じゃなきゃいけなかったのかって聞いたんだ。若手な

ら他にも腐るほどいるだろうが！」

そこで初めてババアは俺が機嫌を損ねていることに気がついたらしい。

まっ白い眉を跳ね上げ、俺を見つめた。

「お前、何を怒っておる？」

「うるせえな！　別に怒ってなんかいねーよ！」

「怒っておるではないか。別にお前にとって悪い話ではないじゃろう。それとも何だ、怖気づいたか？」

ババアが鼻で笑う。

俺ははっとした。

思わず俯き、拳をきつく握りしめてしまう。

喉の奥がなぜか割れそうに痛んだ。絞るようにして声を出す。

「……違う。」

「違わないわい。本当に子供じゃのう、お前は。つまりは同年代で女の深紅と組んで、実力の差を見せつけられるのがいやなんじゃろ」

「ちがう！」

「いい加減にしろ！　つまらん意地を張るくらいなら、星なんて捨ててしまえ！」

「――だから、違うって言ってんだろうが！！」

俺はついに絶叫していた。

感情が爆発したせいで、右手の痣――つまりは俺の星――から紅い焔が迸り出る。

俺は怒りに我を忘れていた。

まっすぐにババア目がけ、焔を突進させる。

だが――素早く飛び出してきた深紅が、それを真正面から受け止

めた。
息を呑む。

「……やめるのよ、蒼路」

彼女は全身に水煙(すいえん)を纏っていた。
蒼い霞(かすみ)の立つ指先で俺の焔を押さえ、留めている。
その漆黒の瞳の中に、焔の燐光がちらちらと躍った。

「止めるの。お前はこんなに愚かな人間ではないはずだわ」

底の知れない瞳だった。

「……フン」

俺はやがて焔を納めた
左手で右手の星を押さえて『消火』する。
すると深紅も水煙を納めた。
――彼女の星は、白い顔の上にある。

「キヨ様。少し蒼路と、話をしたく存じます」

やがて深紅がババアに向き直った。
俺は面喰った。え?

「構わぬが。こんなガキと組みたくなければ、遠慮なくそう言ってくれて良いのだぞ、深紅」

ババアが厭味ったらしい口を利いたので、俺はまた怒髪天を突きそうになったが、深紅に片手一本で制されてしまった。

「蒼路」
「んだよ、深紅っ！」
「さっきも言ったでしょう。――大人しくして頂戴」

厳しい声でたしなめられて、思わず従ってしまった。
なぜだか顔がかーっと熱くなる。
ババアがそんな俺を見て眼をまるくした。
なんだよ、と俺は思った。
……なんか、やりにくいぞ！

「キヨ様。道場を使わせて頂いて構いませんか」

深紅がふたたびババアに尋ねた。
ババアは頷きながらも不思議そうに彼女を見た。

「構わぬが。どうするつもりじゃ？」
「ですから、蒼路と話をするだけですわ。」

深紅は笑った。
その顔は、きれいだが、何と言うか得体の知れない怖さに満ちていたので、思わず背筋が凍りついた。
深紅はいま一度、ついと首を曲げて俺を見ると、さらに艶やかな笑みを浮かべた。

「幼馴染同士、積り積もった話を……ね」

――この瞬間、俺は本気で死を覚悟した。

幼馴染

深紅が言った道場とは、もちろん星師の修行に使う道場のことだ。
前述した通り筧家は、若手の育成に力を入れているので、星師の訓練所としての役割も負っていた。
だから道場も二つある。白いのと黒いのと。
ちなみにこのモノトーンが区別するところは白が武術用、黒が呪術用の道場だ。
深紅が俺を連れてきたのは黒道場の方だった。

「……話って何だよ」

俺は言った。
道場の中は真っ暗だった。
背後で音を立てて入口の扉が閉まる。

「なんだよ、ですって？」

闇を切り裂くように深紅の凛々しい声が響いた。
俺はその声にああ、と眼を閉じる。
昔っからこうだった、この人は。
いつも、痛々しい程に、全てに立ち向かってゆく。

「わからないの？」

闇の中でも深紅がどこに居るかはわかった。
星師は互いを気配で読める。
それは逆に言えば深紅にも俺の居場所がわかっているということだ。

俺は右手を持ち上げると、ゆっくりと、星の中から刀を取りだした。

ゆらり。

紅い焔が闇を焼く。

「……わからないから聞いている。俺は、まどろっこしいのは大嫌いだ」

「そう。なら、言いましょうか」

俺の焔に照らされて、深紅の姿が離れた場所に浮かび上がった。

闇の中にあってなお白い手が、同じく白い額に触れて――そこから魔方円を創り出す。

「――不愉快なのよ」

俺の中で、最後の記憶の彼女は十歳。

その頃にはもう既に、深紅は星師として恐ろしい程の才覚を現していた。

戦師、治療師、陰陽師（おんみょうし）、召喚師、空間師（くうかんし）。

大まかに五つに分類される星師の才能、その全てを。

――そう、全てを、彼女は持って生まれたのだ。

彼女の基色（きしょく）である紅が、闇に五芒星（ごぼうせい）を描いてゆく。

俺たち星師のシンボルであるセーマン・ドーマン。

まずは円を。

そして、その中に、流れるような一筆書きで五芒の星を描き入れ、彼女はその魔方円越しに俺をきっと睨みつけた。

「――あたしと組まなきゃいけない、なんて言い方をしたこと。謝ってもらうわ」

「え……」

久しぶりの深紅の術に見惚れていた俺は、彼女の声に反応するのが遅れた。

――まずい。

遅れを取ったと悟ったが、もう遅かった。

「絶対に、謝ってもらうわ！」

深紅が叫んだと同時に魔方陣が膨張し、そして一瞬後に消滅した。

彼女の姿が見えなくなる。

そして――

「――っ！！」

――俺は足もとから吹き飛ばされていた。

道場の壁にしたたか背中をぶつけて崩れ落ちる。

握りしめた手が緩み、刀が音を立てて床に落ちた。

「足もとが御留守。反応が遅い。昔とぜんぜん、変わらないのね」

「……ん、だと……っ」

深紅の声に顔を上げると、彼女が恐ろしく冷たい顔をしてこちらを見下ろしていた。

その紅い姿の傍らには一頭の鹿が従っている。

青味がかかった灰色の毛並みに、こぶのある角。

深紅の細い指先がその顎先をすくって撫でると、『彼』は嬉しそうに眼を細めた。

「……青藍（せいらん）、てめえ……本気でぶっ飛ばしただろ……！」

俺が立ち上がろうとしながら声を震わすと、鹿――青藍――は愉快そうに前足を踏みならした。

『もちろん本気さ！　久しぶりの蒼路との勝負で、けっこうテンション上がってるんだぜ。楽しませてくれよな』

「本当よね、青藍。期待を裏切るようなことだけはしないでほしいものだわ」

「……バカにすんじゃ……」

俺は刀を手に取った。

「――ねぇっ！！」

闇を払う一閃（いっせん）は、深紅でなく、深紅の前に飛び出してきた青藍の角で受け止められた。

ぎりぎりと押し返してくる力を受け流し、俺は一度身を退いた。

とたんに青藍が突進してくる。

軽く助走をつけて高く飛んだ俺は、彼ではなく深紅の方へと刀を振り下ろした。

「あら」

深紅はひらりと一撃を交わす。

結構な力を込めたっていうのに、相変わらず恐ろしい女だ。

俺は舌打ちをしながらもう一度刀を振るった。

今度のそれは水煙を持って受け流された。

手ごたえのない感触が空しく俺の手を伝う。

「何考えてんだ深紅っ！　俺は、お前と戦う気なんてねえ！」

繰り返しくりかえし、剣を振るう。
しかしその全てを深紅はやすやすと交わした。
背後から青藍が突っ込んできた。
跳んで交わした拍子、鋭くとがった角が俺の脇腹を切り裂く。
着物の分厚い生地が幸いして大したことはなかったが、それでも焼けるような痛みが脇腹に走った。
俺は舌打ちした。
二対一では明らかにこちらが不利だ――だが、俺は召喚術は使えない。

「戦う気もないけれど、手を組む気もないのでしょう？」

深紅の声が間際で響いたと思ったら、眼前に彼女の顔があった。
ぎょっと跳び退る俺の喉元に、つめたい糸のような感覚が走る。
……水糸（みずいと）だ！
深紅の性質である水を糸に変えて、相手の動きを束縛する技。

「が……はっ」

ぎりぎりと力を込められて俺は喘いだ。
左手から刀が落ちる。
首を締め付けるものを引きはがそうと手を伸ばすが、もちろん水に触る事なんてできない。
俺の指先は俺の皮膚を引っ掻くだけだった。
次第に足が宙に浮いた。

「どうしたの？　もう終わり？　お前、星師を目指して修行していたのではなかったの？」

深紅は笑顔すら浮かべて足掻く俺を見上げた。
本気だ、と俺は仰け反りながら意識の端で考える。
――こいつ、本気で俺を殺す気だ……！

「……ふざけんじゃ……」

俺は、両の手をなんとかして、宙に掲げた。
息が苦しい。頭が熱い。
左の指先で星に触れる。
唱えるは――焔の術。

「……ねぇっ！」

両手に焔を持って、俺は喉元を焼いた。
じゅう、っと嫌な音を立てて水糸が蒸発し、束縛が解けた。
俺は再び床に転がる。
息が苦しいのと、火傷の痛みで喉を押さえた。……やっぱり少し焼けちまった。

「な――お前、馬鹿……！？」

深紅が驚愕に眼を見開く。
俺はぜいぜいしながら彼女を見上げて――言った。

「どちらがだ……？」
「え？」
『深紅、よけろっ！』

茫然とした様子の深紅に青藍が声を掛ける。
だが少しばかり遅かった。

深紅が気がついた時には俺はもう、刀を再び手にしていたのだ。

「――俺と、幼馴染を殺そうとするお前と、どっちがバカかって聞いてんだよっ！！」

「――！！」

深紅は完全に間を奪われていた。

俺が自分の額めがけて刀を振り下ろすのを、ただ見つめている。

青藍が走ったのがわかった――だが彼は、間に合わなかった。

彼の角が俺に届くより前に、俺の刀は深紅に届いていたのだった。

『深紅――！！』

青藍の咆哮を最後に、道場の中はぴたりと静かになった。

＊＊＊

俺の刀は深々と突き刺さっていた。

……深紅ではなく、深紅を背後から襲おうとしていた、一頭の白狐（びゃっこ）に。

「……なっ」

深紅はやはり気が付いていなかったようで、俺の視線を追ってから驚きの声を上げていた。

青藍が駆け寄ってきて彼女に頬を擦りつける。

『こいつ、見た事あるよ。普段はこの家の門番やってるけど、悪狐（あっこ）だからちょくちょく人を襲っては楽しんでた』

「ああ、さっきのへっぽこ白狐か。どうりで弱ぇ」

俺は納得しながら狐から刀を引き抜いた。
途端に狐はその身を焔に包まれて消滅する。
……門番殺しちまって良かったんだろうか？
首を傾げる俺を、深紅が理解できないという顔で見ていた。

「お前、私を助けたの……？」
「まあそーだ」

俺は星の中に刀を戻した。
驚いている深紅が愉快でたまらず、思わず笑ってしまう。

「感謝しろよー、おまえ、人の事言えねえよ。この白狐が現れた時かんっぜんに足もとが御留守だったもんな。俺が気づかなければあぶなかったんだぜ」
「そういうことを聞いているんじゃないの！」

やにわに彼女は叫んでいた。
俺は眼を瞬く。

「え？」
「え、じゃないでしょう。私は――私はおまえを傷つけたのよ？」
「ああ、これ？　別に大したことないし」

さっき青藍にやられた傷を見ながら俺は言った。
ざっくりと裂けた着物の生地を持ち上げて見れば、非常にきれいな切り口。
この分だと縫合もそう面倒ではないだろう。

「これぐらいなら化膿もしねーだろ。さすがは深紅の召喚獣（しょうかんじゅう）だな」

「だから、そういうことじゃないって……！」
「――なあ。お前、ただ戦ってみたかっただけなんだろ？」

彼女の言葉を遮って、俺は深紅の眼を覗き込んでいた。
今気がついたけど、ずいぶん身長差がついたもんだ。
あの頃はこいつの方が背が高くて、俺はいつも見下ろされていたもんだけど。

「……なんで、お前は……」

わずかに下がった視線の先で、深紅が唇を噛んだ。
青藍が鼻を鳴らす。
俺は彼女が泣いたのと思ったが、そうじゃなかった。

「お前は、いつもそうなのかしら」
「……深紅？」

俺は驚いた。
深紅は――笑っていたのだ。
口許に手を寄せて、ほほ笑みながら俺を見た。

「――変わらないのね。本当に」

白い手が俺の喉元に伸びた。
ぎょっとして、それから紅くなってしまう。

「み、みみみ深紅っ？」
「バカ正直で、素直で――何があろうと人を責めない。本当にあの頃とおなじ」
「あ……」

ふいに俺は喉元がここちよく温まるのを感じた。
そういえば、さっき自分で自分を焼いた時の火傷があったんだった。忘れていた。

『――我が星を持って、汝(なんじ)の闇を祓(はら)う』

深紅は静かに呪を唱えて、俺の傷を癒した。
紅い光が淡く輝き、それから静かに消えて行った。
静まり返る道場。

「覚えている？」

深紅はひっそりと言った。やわらかな声だった。
俺は首をかしげた。

「何をだ？」
「あたし達が小さい頃、こんな風に星を使って、毎日ケンカをしてた。……よく怒られたわね。あなたのお父様や、私の父に」
「ああ……そういや、そうだったな」
「なつかしいわ」

ふふ、と深紅はまたほほ笑んだ。

「本当に、なつかしい」

彼女は青藍に戻っていい、と命じた。
大人しく青鹿は彼女の星のなかに帰り――そして、俺達は二人きりになった。
……げっ。

俺は辺りを見回して動揺する。
こ、こういう時ってどうすりゃいいんだっ！？

「――蒼路？」
「な、なんだよッ？」

いきなり呼びかけられて声が思いっきり裏返った。
……うわあ、格好ワリー。
けれど深紅は真面目な顔で俺を見ていた。

「お前の考えが正しいわ」
「何だって？」
「私は、ただお前と戦ってみたかった。どれだけお互いが成長したのか、どれだけ変わってしまったのか、確かめたくて」
「……やり方が悪すぎんだよ。途中、マジで死にそうになったじゃねーか」

俺が毒づくと、彼女はけろりとこう答えた。

「だって本気だったもの」
「なぬ！？」
「戦ってみたかったのも本当だけれど、お前のあの一言に腹が立ったのも本当なのよ。私と組まなきゃいけない、だなんて。無礼にも程がある。何様のつもり？」

そしてじろりと向けられた目線は、なるほど確かに怒っていた。
俺はここに来てようやっと自分が彼女を侮辱したということに思い当たった。
頭を掻きながらしどろもどろに言葉を探す。

「……えーと、あれはだな、そういう意味じゃなくて……」
「ではどういう意味なのかしら？　聞かせてもらいたいものだわ」

詰め寄られ、俺はますます弱ってしまった。
だって、言えるわけねえだろう。
『早すぎた』なんて。
俺はまだお前を守るほど十分には強くない。
まだ、早い。
だから――突然の再会に驚き、不機嫌になってしまった、などと。
本人の前でどうして言える？

「えーと、だからその……」
「その？」
「……えーっと……」

弱った。ほんとうに弱った。
全身が熱くなり、腋から汗が噴き出してくる。
ちらと眼を上げれば深紅はあいかわらず俺を睨みつけていた。
勘弁してくれ。

「……悪かった」

俺はやがて根負けした。
ぱんと両手を打ち合わせ、深紅に向って頭を下げる。

「頼むから勘弁してくれ。あれは俺が悪かった！　このとーりだ！」

深々と下げた頭のむこうで、深紅は黙っていた。
いつまでも黙っていた。
俺が許してはもらえないのかと冷や汗を掻くほど長い間黙ってい

たが――やがて、いきなり噴き出した。

「ふっ」

「へ？」

俺は思わず顔を上げた。

たちまち、お腹を抱えて笑っている深紅の姿が目に飛び込んで来る。

長い間お辞儀していたせいですこしくらくらする頭を押さえ、俺は眼を白黒させる。

「おい、深紅……？」

「ふふふ、あははっ！　もう、蒼路って本当にバカ正直」

「お前、もしかして」

「そう。カマかけたのよ。――でも、その一言がもらえたから満足」

切れ長の目じりに浮かんだ涙を指先で拭い、深紅はそうほほ笑んだ。

その笑顔に出かけた俺の怒りも引っ込んでしまう。

やがて深紅は言ったのだった。

「蒼路」

まだ少し笑みの残る、晴れやかな声で。

「私、お前との任務を受けることにするわ」

その任務というものがどれだけ大変で、かつ面倒なものか――

俺と深紅が知るのは、それからずいぶん後のことだった。

一日の始まり

翌日は月曜日で学校だった。当たり前だけど。

「……痛ぇ。」

「どーしたの、お兄ちゃん？」

玄関でスニーカーを履いた拍子、深紅にやられた傷が痛んだ。

思わずうめくと妹の藍（あい）が寄ってきて俺の背中に抱きつく。

俺は笑いながらそのつややかな頭を撫でた。

藍は六歳。

親父が死んだ年に出来た子供で、俺も母さんも死ぬほど可愛がっている。

「どこかいたいの？　また悪い奴らと戦ったの？」

「いや、大丈夫だよ。ありがとな、藍」

「藍もお兄ちゃんと一緒にいきたい～」

「お前は小学校あるだろお～」

やわらかいほっぺたを引っ張って遊んでいると、今度は母さんが家の奥から出てきた。

手にハンカチでくるんだ弁当を持っている。

俺は眼を丸くする。しまった、弁当忘れてた。

「蒼路、忘れ物よー。お弁当」

「……ありがと。母さん」

母は高村優子、口外は厳禁だが四十五歳。

親父を亡くして以来、女手一つで俺達きょうだいを育ててくれた。

俺は弁当を受け取ると鞄に押し込み、立ちあがった。

「じゃあ、行ってきます。」
「いってらっしゃーい」
「行ってらっしゃい。気をつけて」

にこやかな藍と母さんに見送られ、玄関のドアを開く。
出て行こうと家の敷居をまたいだ瞬間、母さんの声が俺を呼びとめた。

「あ、蒼路」
「なに？」

ふり返る。
すると母は、笑いながらこう言った。

「深紅ちゃんによろしくね？」

＊＊＊

……そうなのだ。
深紅が、転校してくることになったのだ。
一学期も終了間近というこの中途半端な時期に、俺と同じ高校の二年生として。

「ったく、ありえねぇよな、あのババア……」

マンションから学校へと歩きながら俺は一人ごちた。
なぜ深紅が転校してくるのかといえば、他でもない、俺達が護衛するべき人間が俺達の高校に居るからなのだ。

が。
しかし！
……だからと言って転校までさせるか、ふつう？
「あーあ、ほーんと、めちゃくちゃなババアだよなあ！」
叫んで思い切り伸びをした俺だったが、次の瞬間耳に届いた声に、驚き跳びあがってしまっていた。
『――悪かったな』
「うぉっ！？」
俺はたいそう驚いた。そりゃそうだ。
だって、歩道の脇のガードレール、その上に停まっていた鳩がいきなり口を利いたのだ。
誰だって跳びあがりたくもなるものだろう。
「な、なんだよババアか～。ビビらせんなよ！」
よく見ると鳩の肩のあたりに星印（せいいん）があった。
それはババアの星と同じ位置で、つまりこの鳩がババアの式神であると証明する印でもある。
俺は周囲の眼を気にしながら鳩を手の上に載せると、そのまま人気の少ない小道に入りこんだ。
物陰に身を潜めるとしゃがみこみ、
「……で？」
と鳩を睨みつけた。

「こんなとこまで何の用だ、ババア。」

愛らしい鳩は、しかし、ババアそのものの声で答えた。

『決まっておるじゃろ、深紅のことじゃ』

「深紅？　ああ、てめぇが俺の高校にきょう無理やり転校させてくる深紅のことだな。あいつがどーした」

『かー、減らず口だけは本当に五つ星ものじゃの！！』

鳩は俺の手から飛び上がってぱたぱたと翼を上下に動かした。

どうやら怒っているらしいが、俺には構っている余裕がなかった。

早くしないと遅刻しちまう。

「で、深紅がどうしたってんだよ。俺もう行かなきゃなんねえんだけど」

『お前、深紅の幼馴染なのじゃろう？』

「あー。それがどうした」

ほんとうに時間がやばくなってきて俺は腕時計を見た。

七時四五分。

バスが出るのは四十八分なのだ。

『――ではあの子の体の事も、知っておるのだろうな？』

踏み出しかけた足が、止まった。

俺は鳩をふり返る。

それはただの式神であって、ババアではないのに。

「……知ってるけど。それがどうした」

『ならば多くは言うまい。良いか、お前たちは二人一組のパーティ

だが、それはつまりお互いをお互いに守る義務があるということじゃ。特に深紅にはそのような事情があり、しかもかの五辻一族のご息女じゃ。お前の負った責任は重大と心得よ』

俺は一瞬、答えに詰まった。
いつもこうだ。
深紅の名字を聞くと、なんともいえない気分になる。
スニーカーの足もとでコンクリートを蹴ると、再び鳩に背を向けていた。

「……話はそれだけ？」
『蒼路』
「心配すんな。ちゃんとわかってる」

分かり切っている。
深紅と出会った時からずっと。
――あいつと俺は、決して対等な立場になんてなれないんだと。

「じゃあな。」

俺は走り出した。
時刻は七時五十分を過ぎてしまっていた。

＊＊＊

バスを逃したので仕方なく走った。
結果、授業には間に合ったがホームルームを遅刻してしまった。
一時間目の開始五分前のチャイムとともに教室に滑り込むと、クラスメートの一人が待ちかねていたかのように俺に声を掛けてきた。

「聞いたか高村っ？　二年生に超美人の転校生が来たんだってよ！」
「……へぇー……」
顔が引きつる。
ある程度予測してはいたが、実際にこういう事態に陥ると、やっぱりかなり腹立たしい。
「すげぇ綺麗だったぜ～。色白・黒髪・紅い唇のミステリアス美人でさ～、着物が似合いそうな感じ！　どうだよお前、興味ない？」
「ない。」
どきっぱりと断言してから、俺は自分の席に着いた。
クラスメートはまだ話しかけてくる。
「でも変な時期に転校してきたよなぁ？　もう一学期も終わりじゃんか。期末テストは皆と受けなきゃいけないっていうのに、何か事情でもあんのかねぇ」
「さあな。ってか石岡、もう授業始まるぜ」
イライラしながら鞄を開き、教科書を取りだした。
一時間目は数学だ、今日は何をやるだろうとか考えて気を逸らそうとするが、情報通のクラスメートはまだ深紅についてくどくどと喋っている。
顔がますます引き攣るのが感じられた。
ともすれば星から火が噴き出しそうだ。
――だから、あいつが転校なんて嫌だっつったのに。
「なんか噂によると、かなり金持ちの家のお嬢様らしいぜ。名字が変わっててさぁ、たしか、五……」

「うるさい。」

俺はついに遮っていた。

もう我慢ならん。

なんで幼馴染の俺があいつについてくどくど聞かされにゃならんのだ。

あいつのことなら俺はもう、知りすぎる程に知っている！！

「興味本位で人のことをべらべら喋んな、デリカシーないぞお前！」

じろりと睨みつけて言ってやると、クラスメート――石岡正――も黙ってはいなかった。

「なっ、何て言い方だ高村！　お前はほんとに硬派だな！」

「硬派で結構、少なくともナンパじゃねえよ。」

「もうちょっと愛想よくしないと、女子にモテないぜ～」

「うるせぇ！」

「だー、もう、そこ五月蠅い！」

そうこうしている内にやっと教師がやってきて、石岡は離れて行った。

心底イライラしながら俺は起立の号令に従い席を立った。

だが、立ちあがって礼をしようとした一瞬――

――なにか尋常でない気配に気がつく。

はっと顔を上げる。

廊下の方からだったが、今はドアに遮られて何も見えない。

いや、見えなくてもわかる、あれは――。

（――魔の気配だ……）

しかも、ベースは人間だ。
恐らくは悪霊だろう、人の体に憑依して操る厄介な存在。
明確な敵意が感じられる気配だった。

（誰だ？）

着席の合図がかかる。
俺は釈然としない気持ちで椅子を引いた。
今までこの学校で魔を目撃したことはなかった。
いや、地縛霊とか猫又とか、そういう可愛いのは見たことあるが、こんなヤバそうなのは知らない。
そもそも俺は星師だ、これほど悪質な魔がいればすぐにわかる。

（もしかして、依頼人……）

考えて、俺ははっと眼を見開いた。
あり得る。
すぐにノートの端をやぶって簡単なセーマン・ドーマンを書きつけると、右手でくしゃりと握りつぶした。
たちまち握りこぶしの間から蒼い煙が染み出して、次に拳を開いた時にはきれいさっぱりなくなっていた。
よし。
リリース、完了。

「はい、じゃあ教科書の三十六頁を開いて下さいねー」

やがて担任がそう声を上げて、そこいらじゅうからばらばらという紙をめくる音が響いた。
俺も教科書を開く。
ちらと窓の外に眼を走らせると、思った通り、俺の式神が上の階

めがけて飛んでいくところだった。

依頼人

式神が帰って来たのは一時間目が終わるころ。
窓をすり抜けて机に舞い戻ったそいつを拾い上げ、俺は思わず笑みを浮かべた。
それから三時間、午前の授業が終わるまでひたすら待ち、四時間目終了のチャイムと同時に教室を飛び出す。

「高村ぁ！　まだ挨拶は終わって無いぞ！」

後方で叫ぶ科学担任の永富（ながとみ）の声が聞こえたけれどもなんのその。
センセ、すまんね。
俺には今、やらなければならぬことがあるのだっ。
全力疾走で上階への階段を駆け上がり、屋上に到達。
息も荒くドアを開けるとそこには。
そこには――

「あら。早いわね、蒼路」

――初めて眼にする制服姿の深紅がいた！
俺は思わずじろじろ見た。
こいつが着物以外の服を着ているところなんて初めて見たが、なかなか。
……いや、かなり。
似合っていた。

まっ白なシャツに、藍色のスカート。
スカートはウエストインしてその上からベルトを巻くデザインなので、腰の細さが際立った。

それに、意外と足も長い。

「……何よ。あんまり見ないで頂戴」

やがて俺の視線に耐えかねてか、深紅はぷいと横を向いてしまった。

普段はツンツンしてるくせに、こいつは意外と照れ屋なのだ。

俺は知っている。

「見てねぇ見てねぇ。それより、式神届いたか？」

なんだか気分がたいへん良い。

ご機嫌で俺は深紅に話しかけた。

彼女はそんな俺を不審そうに見返したが、やがて小さく頷いた。

お、顔赤い。

「だから私も返信したでしょ。――あの気配。私も感じたわ」

「……ああ。」

声を低めて言った深紅に、俺も頷いて見せた。

屋上に来たのはこのことを話すためだったのだ。

給水塔に腰かけている深紅に近づいて行き、その丁度足もとあたりでフェンスに寄りかかった。

あー、空が青い。

雲ひとつないし、黙ってれば本当に良い夏の日なんだけど。

「……あれはヤバいぜ」

俺が言うと、深紅も認めた。

「……そうね。少なくとも、簡単に祓える類の魔ではないわ」
「依頼人なんだろう？　もうあんなにヤバい状態になっちまってんのか？」
「私もまだはっきり確かめたわけではないの。でも、キヨ様から依頼人の大体の情報は頂いている」
そこで深紅は給水塔から飛び降りた。
スカートの裾がひらりと風に揺れ、それは優美な姿だったが、下着が見えやしないかと俺はどぎまぎしてしまったよ。
……見えなかったけど。
「いい、蒼路？」
俺の隣りに立ち、深紅は言う。
「依頼人の名は伊勢遥（いせはるか）。この学校の三年生で、生徒会長。」
「……マジかよ？」
俺は思わず深紅を振り仰いでいた。
その人のことは知っていた。
っていうか、話したこともある。
いい奴なんだよ。本当に。
格好いいけど気取って無くて、優しいけど面白くてさ。
年上ぶる上級生って俺は大っきらいだけど、伊勢遥はほんとうに良い意味でフランクだから、俺は結構慕ってた。
「ハル先輩が魔に憑りつかれてる？　……ちょっと信じられねえぞ」
「あら、知り合い？」
「ああ。ま、そんなに深い仲じゃないけど」

答えると深紅はふうんと軽く唸った。
その仕草に引っかかるものがあったので俺は聞き返す。

「何？」
「いいえ。では彼の双子も知っている？」
「双子？」

それは初耳だった。
あれだけ美形の人に双子がいたら学内では相当目立つだろうに、見たことも聞いたこともない。

「知らねぇ」

驚きも露わに答えると、深紅はいつの間にか手にしていた紙に眼をして頷いた。

「やっぱりね。いらっしゃるのよ。他校に通う妹さんが。こちらは阿南（あんな）さんっていうみたい」
「へぇ……。ってか、その紙なに？」
「キヨ様からのお手紙よ。依頼人について書いてあるの。」

深紅は手紙を掲げて答え、ふいに俺に目線を据えた。
俺は思わず居住いを正す。
……深紅の眼は、いつ見てもドキっとする。

「な、何だよ？」
「いい？　今からその伊勢遙さんについての情報を喋るから、必要があればメモして。ちゃんと全部覚えて頂戴ね。」
「え、全部！？」

「え、じゃなくて。当然でしょ。――始めるわよ」

――そして深紅は朗読を始めた。

＊＊＊

……俺はがんばってメモした。

伊勢遙。

ここ市立明星高校の三年生。

父はイギリス人、母は日本人のハーフ。

金茶の髪をして、瞳もまた茶色がかった緑色。

見目麗しく頭脳明晰、人徳もあり、三年生の今は生徒会長を務めている。

趣味はチェロ……に乗馬、それに何だと、アーチェリー!?

「……すげぇぼんぼんだったんだな、伊勢君。しかし、チェロってなんだ？　車？」

「馬鹿者。」

素朴な疑問を口にした俺は、背後から思いっきり突っ込まれていた。深紅である。

したたか頭を平手で打たれて、その予想外の強さに俺はつんのめりながら叫んだ。

「ってーだろーが、この馬鹿力っ！」

「馬鹿はどちら。お前、チェロも知らないの？」

冷徹な眼で見下され、俺は思わずうっと言葉に詰まってしまう。

何度見ても制服姿が新鮮だ。

黙っていれば間違いなく美女に見える。が。
もちろん深紅はそんなに大人しい女ではなかった。

「チェロっていうのはね、西洋楽器の一つよ。ヴァイオリンはさすがのお前でも知っているでしょう？　チェロはあれの仲間で、もっと大きな、足で挟んで演奏する楽器。ちなみにお前が言わんとしたのはチェロキーのことでしょう。まったく、これぐらいの常識知らないでどうするの。恥ずかしいわ！」
「……別にそんなこと知らなくてもいいし。」
「お前はそうでも、私は無知な男と組みたくはないの」

深紅がにべもなく言い張ったので、俺はたいそうショックを受けた。
マジで！？
口を開けて見つめる先で、彼女は駄目押しのため息まで吐き出してくれた。
ちらりと投げかけられた視線には、なんだか哀れみの色すら混じっている。

「お前、昔から自分の興味あること意外はからっきしだったものね。……まあいいわ。続けるわ」

長い黒髪を掻きあげると、深紅は手の中の書簡をいま一度取り上げた。

「伊勢遙くん。彼が今回、私たちが護衛の役を担った御方よ。そこまではいいわね？」
「子供扱いすんなっ！」
「だって子供じゃないの」

深紅は再び一瞥をくれた。
俺は本気でキレそうになる。
……こ、このアマっ……！

「一歳しか違わねーだろ！」

憤激して叫ぶと、深紅はうるさそうに耳を押さえた。
片手を俺にむかって翳すと、ひらひらと振る。

「いいからお黙り。――で、彼の双子の妹さんである阿南さんによると、彼は近頃とても具合が悪そうだっていうの。顔が青ざめて、痩せてしまって。夜中に徘徊しているそうなんだけれど、本人はそのことを覚えていない。かと思えば、誰もいないはずの場所で、誰かとぶつぶつ喋っていたり……。アンナさんは彼の部屋から知らない人間の声が聴こえたこともある、と言っているわ」
「悪霊か？」

深紅の説明から俺は推測をする。
妖怪と違って悪霊は実体を持たないが故、人間に憑依しようとする性質を持つ。そしてその方法はまず「会話」から始まるのだ。
悪魔との会話。

「可能性は高いわね。でも、生徒会長は立派にこなしている。成績は少し下がり気味だそうだけど――それでも十位圏内からは外れないっていうことだし。まあ、素晴らしいお人」
「けっ。本当に素晴らしい人間だったら、悪霊なんかは近づけもしないだろうよ」

俺は吐き捨てて、手にしていたアイスココアを口に運んだ。
一しきりその涼しい飲み物を楽しんでから深紅に尋ねる。

「けどさ、悪霊に話しかけられるなんて――よっぽど弱ってないと無理だろう。そいつ、なんか落ち込むことでもあったのか？」
「……ええ。」
俺の質問に、深紅はわずかに眼を伏せた。
「今年の春に。とても大切な人が亡くなったそうよ」
あまりにも悲しげな声色だったので、俺は思わず息を呑んでしまった。
長い睫毛の際だつ白い横顔が、六年前の泣きじゃくる少女と重なって見える。
が、それはほんの一瞬で、深紅はすぐに顔を上げると、いつもの顔に戻っていた。
「とにかく、依頼人に関する報告は以上。何か質問はあって？」
「……ありません」
「よろしい。」
照りつける日差しの中、チャイムが鳴った。
気がつけばもう昼休みが終わる時間だ。
深紅が腕時計を見て、そろそろ教室に戻るわ、と言う。
「突然の転校生っていうことで、やらなければならないことが山積みなのよ。期末試験も来週なんでしょう？　面倒くさいったらないわね」
「――え、お前、期末受けんの！？」
「あたりまえじゃない。」

けろりと答えた深紅は、そうだ、そういえば頭が良かった。昔っから。

「お前と違って私にはキヨ様の監視の目がついているのよ。実家のもね。っていうことで一度教室には戻るけど、放課後には伊勢君に会いに行こうと思うわ。お前も来るのよ」

「……わーかってらい！　偉そうに指図済んじゃねえっ！」

「偉そう、じゃなくて、偉いのよ。お前より」

噛みついた俺に、じろりと一瞥をくれ、深紅は歩き出した。

屋上を横断して入り口まで辿りつくと、そのドアノブに手を掛けながら、思い出したように俺をふり返った。

「とにかく、蒼路。授業が終わったら三年生の教室棟にいらっしゃい。」

「……だから……っ」

指図するな！　と叫ぼうとした俺だったが、その時にはドアは既に閉じられていた。

……しかし。

「蒼路！」

ホームルームが終わった後、俺はわざわざ三年生の教室棟に赴く必要はなかった。

深紅が向こうからやってきたからである。

「おお！」

「美人！」

「あれが噂のっ」

たちまち同級生たちが深紅を賛美し、教室の中にも外にもギャラリーができた。

しかし、深紅本人はその身に張り付く好奇の視線をものともせず、つかつかやって来ると俺の机に両手をついた。

「早くするのよ、蒼路！　大変なんだから！」

「いや、ちょ、み？」

「説明している暇はないの！　とにかく早くおし！」

言いざま俺の手を取ると、深紅は無理やり教室の外へと引っ張って行った。

俺は驚くやら、周囲の視線に優越感を覚えるやら、なんとなく気恥ずかしいやらで訳が分からない。

けどこういう時の深紅は絶対に止まらないので、取り合えず引っ

張られるだけ引っ張られることにする。
廊下をずるずる引きずられていく途中、クラスメートの石岡と眼が合った。呆気にとられた顔をしていた。
はっはっは、ざまー見ろ石岡！！

「ざまーみろじゃないでしょう、この緊急事態に何言ってるのお前！」

いきなり怒られて、優越感に浸っていた俺は現実に引き戻された。

「え、俺、口に出してたっ！？」
「ダダ漏れよ。」
「マジかよ……」

がっくりとなった所で、深紅はようやく立ち止った。
掴まれていた手が離れて息を吐く俺をふり返って、彼女は言った。

「蒼路、突撃するわよ」
「は――っ？」

ますます訳がわからなくなる俺に、深紅はすごんだ。

「は、じゃなくて。許せないのよ。馬鹿にしてるわ！」
「だから何の話なんだ一体！」
「あれを御覧！！」

深紅は叫びざま廊下の奥を指差した。
この時には彼女がどうやら怒っているらしいと気づいた俺は、黙って示された場所を見やった。
それは音楽室。

閉ざされた何の変哲もない扉。
だが、その上に――

「……なんで結界？」

驚きに眼を丸くした俺に深紅が答えた。

「挑戦状よ。」

今度こそ明確な怒りの色に染まった声である。
見ればその額にも青筋が浮かんでいた。
俺はあー、と頭を抱えた。
そういえば深紅って、エベレストよりプライド高い女だった。
こういう謂れのない中傷とか、侮辱とか、絶っ対に許せない奴なんだよな。

「いい根性をしているではないの！　この私に向って結界を張るなんて！　破れるものなら破ってごらんと言っているようなものだわ！！」

完全にブチ切れている深紅は俺の先に立ってずんずんと歩いて行く。
俺は慌ててその背中を追った。

「落ちつけよ、深紅。ハル先輩がこんなことするわけ――」
「これが落ち付いていられるわけがなかろう！」

噛みつくように深紅は叫んだ。
彼女は怒ると言葉遣いが古風になるのだ。
なんでも実家ではみんながそういう風に喋るから、それが当たり

前だと思って育ったということである。
やがて音楽室の前に立ちはだかり、右腕を掲げると深紅は言った。
「こじ開けるぞ、蒼路」
結界は俺達の眼の前に、見えるものにしか見えない淡い緑の膜として存在していた。
表面に西洋の文字が一面に書きこまれたその結界に、深紅の白い細い手がちょくせつ触れる。
……こいつだから成せる技だけど、良い子は真似しちゃいけないぜ。
なぜって、種類にもよるけど結界とはすなわち空間が不自然に捻じ曲げられたもの。
呪術に耐性のない人間が触れば体ごと結界に吸収されちまうことだってある。
「……相変わらずダイタンだよなぁ……」
半ば感嘆し、半ば呆れながらそう呟いた俺であったが、そうこうしている間にも深紅の白い指先は結界にずぶずぶと沈み込んでいった。
そして、ある一点で急に抵抗がなくなったかのようにすり抜けた。
急にその存在をたわめられた結界は、まるで生き物のように身を震わせて——ぶるりと揺らいだ。
深紅はその一瞬を見逃さなかった。
勢いよく結界から手を引き抜くと、叫ぶ。
『——解！』
強い声に感応し、結界が内側から消滅した瞬間、音楽室の扉も開

いた。
同時に風のように中から飛び出してきた影が一つ。
それは完全に深紅を狙っていた、が。

――許すわけねぇだろうが！

俺は跳び出し、深紅の盾となった。
影の振り下ろした一閃を刀で受け止めるっ。
一瞬、きぃん！　と金属同士がぶつかりあう高い音が廊下に響いて、それから。

――それから急に、静かになった。

「……誰だてめぇ」

低い声で俺は尋ねた。
すると相手はふっと笑った。
剣が退けられて、俺の刀から重みが離れていく。

「なぁるほど。」

耳を打ったアルトの声に、よく見て見れば女だった。
金色がかった茶色の髪に、緑色の眼、それに超ナイスバディ。
明星の制服を着ていないということは部外者だ。

「さすがは五辻のお嬢様だね。護衛がいるとは」
「――質問に答えぬか！」

背中の後ろで深紅が吠えて、俺はビビった。
……多分こいつ、名字を出されて更に神経逆なでされたな。

深紅は俺の前に進み出た。
謎の女を真っ向から睨みつけて、そして言う。
「貴様は誰かと聞いているのじゃ、無礼者」
「これは失礼」
すると女は再び笑った。
長い腕を体の前で組み、余裕さえ感じさせる動作で手にしていた短剣をしまった。
……その長い首の上に浮き出た、三つの星の中に。
俺ははっとした。
深紅も眉をひそめたのがわかった。
「あたしの名前は伊勢アンナ。ハルの双子の妹で、半星(なかぼし)よ」
「半星――」
その言葉を、俺が思わず反復してしまった時、ふいに背後から足音が立った。
焦ったように駆けてくる足音。
俺はふり返った。
するとそこには。
「アン！　何をしているんだいっ！」
……真っ青な顔をした、ハル先輩がいた。
＊＊＊
「ご説明して頂きたいわ。」

深紅はカンカンだった。
当たり前である。
護衛の依頼を受けたのはこっちだというのに、なんのためかアンナさんによってあれだけ滅茶苦茶なご挨拶を受けたのだ。
心のひろーい俺でさえ怒っているのだから、エベレストプライドの持ち主である深紅が怒らない筈はない。

「……申し訳ない。」

しかし、答えたのはアンナさんではなくハル先輩だった。
さっきから吊り上っていた深紅の柳眉が更に吊り上る。
おお怖い。

「謝るべきはあなたの妹さんであってあなたではありませんわ、ハル先輩。私は状況のご説明を求めたのですが」
「――はい。」

ハル先輩はかなり恐縮していた。
アンナさんはと言えば、グランドピアノの上に座り込んで完全に傍観者を決め込んでいる。
え？　ああ、俺たちは今音楽室の中にいる。
さすがに廊下でいつまでも騒いでいるわけにはいかないからな。

「ええと、単刀直入に言うと――ね。これはアンナが勝手にやったことで、僕はまったく関与してない。大体彼女はこの高校の生徒じゃないし、本来なら入り込むだけで警察沙汰だ」

マジかい。
ハル先輩の説明に俺は内心で思いっきり突っ込んだ。
けど口には出さずに、説明を続けてもらうことにする。

先輩は続けた。

「けど、護衛を依頼したのは実のところ僕じゃなくてアンナだ。だから彼女、こういう言い方はあれだけど……」

「けど？」

言い淀んだ先輩に深紅が先を促した。

その声は静かで落ち着いてはいるものの、逆らえない威厳に満ちていた。

「……君たちを試そうとしたんじゃないかと……」

やがて先輩は言った。

とたんに深紅の額に青筋が浮かぶ。

アンナさんをぶっ飛ばしでもするんじゃないかと思ったが、存外に、深紅は押し殺したような息だけを吐いて堪えてくれた。

あれ？

なんか意外だ。

「お話は理解できました。けれど、はっきり言って私たちが護衛を任じられた理由がわかりませんわ。」

深紅は言い、それからやおら目線をアンナさんに据えた。

「先ほどアンナさんはご自分を半星だと仰った。だったらわざわざ私たちを呼びつけるまでもなく、ご自身でハル先輩を守ることができるはずです。」

「それができたら苦労しないんだけどさ」

アンナさんも答えた。

今やピアノの上に寝そべり、気ままな猫のようにごろごろしている。

ちなみに半星っていうのは、俺や深紅の持つ五芒星じゃなくて、三ツ星や二ツ星のように不完全な星を持って生まれた術者のことだ。

星が半分なので力も半分。

だから半星。

一部の例外を除いて、彼らが星師として認められることはほとんどないという。

アンナさんが続ける。

「言った通りあたしは半星だから。力には限度がある。それにハルに憑依している悪霊は段々力を蓄えてきてて、他の魔物も呼び寄せ始めてるから。あたしの手には負えなくなった」

話を聞いているうちに、深紅が息を止めた。

俺は思わず問い返した。

「……他の魔物？」

「そう。憑依は既に完全なのよ。」

そこでやにわにアンナさんは起き上がった。

ぱちりと指を鳴らしてハル先輩を自分の元に呼び寄せ、彼の首元の一点を指さす。

俺たちの視線はそこに集中した。

アンナさんの三ツ星と全く同じ場所に浮き出た二ツ星。

ああそうか、と俺は悟った。

この人たちは双子だから、生まれた時に星が分かれたんだ。

五芒の星を分かち合う、半星の双子。

それはなんて――悲しくて美しい刻印だろう。

「御覧の通り、ハルも半星。」
言葉もなく見つめる俺たちに対して、アンナさんは言った。
「だから普段の状態なら彼もある程度の術は使える。けど今は駄目。悪霊のせいで」
「その悪霊だけど」
俺は口をさしはさんだ。
ハル先輩が走ってきた時からずっと疑問に思っていたのだ。
今朝感じた凶悪な魔の気配が、先輩からはカケラも感じられなかった。
あらかじめ聞いた情報の通り、頬が少しこけていたり、目元に隈が浮かんでいたりはするけれど——それだって特筆に値すべきものじゃない。
「……ぜんぜん、気配感じないけど。憑依されてるのは確かなわけ？」
「ええ。間違いない。彼が眠ると出てくるのよ」
「僕はぜんぜん覚えてないんだけどね」
「だから危険なんじゃないの。」
横からの先輩の言葉に呆れたようにアンナさんは答え、それからやおら深紅を見た。
彼女はさっきからずっと黙って事の成り行きを見守っていた。
恐らくはその豊富な知識を総動員してハル先輩の状態を観察していたのだろう。
急に自分に視線が向けられた事を察知して、彼女は伏せていた眼を上げた。

「――何？」

その視線を真っ向から受け止めて、アンナさんが言った。

「改めてお願いするわ。」

その顔が、急に歪んだように見えた。

俺はぎょっと体を起こした。

まさか、と思う間もなく、アンナさんの生気にあふれた立ち姿がやわらかいバターのように溶け始める。

深紅は黙っていた。

ただ黙って、アンナさんを見つめている。

『ハルを助けて。』

彼女の声はもはや人が発するものではなくなっていた。

それは心に語りかける声だ。

音声ではない、精神に直接ふれてくる言葉。

『ハルにとりついた悪霊は、あたし』

アンナさんの、足が溶け、服が溶け、手が溶ける。

俺は何も言えなかった。

顔が溶けだす寸前に眼が合った。

泣いているように見えた。

――今年の春に。とても大切な人が亡くなったそうよ。

昼の深紅の言葉が脳裏をよぎった。

ずんっと胸に、刺さるような痛みが走る。
そういうことか。
そういうことだったのかよ！

「アンナさん！！」
『あたしはもう死んでるわ』

その言葉を最後に彼女は完全に溶解した。
残ったのは淡く輝く黄金の光だけで、しかし、その光すらも、やがては河のように寄り集まってひとつの方向に流れて行った。
一つの方向。
そう――ハル先輩の元に。

「かわいそうなアン……」

アンナ先輩だったものを、先輩は呑んだ。
文字通り口を開けて、水を飲むかのように喉を鳴らして。
俺は前進がぞっとそそけ立つのを感じた。
だって、先輩の、その、顔。
呆然としているようにも、うっとりしているようにも見える、その綺麗な顔。
このひとだ、と思った。
この人がアンナさんを悪霊にしたんだ。
妹の死が信じられなくて、悲しすぎて。

――どうにかして戻ってきてほしくて。

闇と呼ぶもの

突然、空気がその質を違えた。
ハル先輩がアンナさんを呑みこんだ途端だ。
さきほどまではとろりとした熱気を帯びていたそれが、今や俺達の皮膚にひんやりと張り付いて、冷酷な温度を主張する。
いや、温度だけではない。
空間そのものの在り方が、一瞬前までとは歴然と異なっていた。
俺達の世界では呼吸の度に体内には新しい空気が取り込まれるが——今のこの空間では、それはできない。
むしろ息を吸う度に何か澱んだ古いものが、決して未来には進むことのできない存在が、体内へと侵入してくる。
まるで異界に足を踏み入れたかのように、全身が拒否反応を起こすこの感覚。そう、これこそが。
俺達が闇と呼ぶもの。

「アン……」

先輩が——闇を呼び寄せていた。
彼は豹変していた。
さっきまで優しかった瞳からは一切の輝きが失われ、なのにその眼球自体は不気味な程あざやかなエメラルド色に変色している。
上品で優美な口許が長く伸び、裂けるように吊りあがって、その紅い割れ目からは並びの良い歯と舌が覗いた。

「かわいそうなかわいいアン。僕がずっと守ってあげる」

突然、その双眸は焦点を失った。
左右の眼がてんでバラバラな方角に向き、同時に、彼は体そのもののバランスを崩したように膝をついてしまった。

「――おいっ!?　しっかりしろ!」

叫びながら駆け寄った俺は、次の瞬間眼にしたものに凍りついた。
項垂れた先輩の背中から突如として――何かがボコリと隆起したのだ。
俺は心底恐怖した。
魔物が怖いんじゃない、先輩の体が怖いのだ。
悪霊が厄介とされるのは、彼らが自分自身の体を持たず、人の体を奪うからだ。
中身は悪魔でも肉体は人。
つまり――壊れれば元には戻れない。

「……やめろ」

俺はかすれ声を発した。
先輩の背中がうごめく。
まるで巨大な蛇がうすい布の下で暴れているかのようだ、ぼこぼこと、ぬめぬめと、背骨さえ無視して縦横無尽に動き回る大蛇。
先輩の体は異常な程に痙攣していた。
苦しそうだ、その表情はとても苦しそう。
なのに、

『アン、ぼくの、アン』

先輩は、さっきから、アンナさんの名しか呼ばない。

「やめろって言ってんだろうが！！」
「馬鹿っ、離れるのよ蒼路っ！」

俺が叫ぶのとほぼ同時に深紅が叫んだのが聞こえた。
その声に俺は振り返ろうとする、しかしできなかった。
――先輩の背中から、まるで火柱でも上がるかのような勢いで、
その皮膚の下に居たものが飛び出してきたからだった。

「……ぐぁっ！？」

触手のようなものが俺を捕獲し、物凄い力で締めあげてくる。
完全に宙吊りにされた俺は苦痛に絶叫した。
大蛇ではない――それは、植物だった。
シダの葉のような赤黒い羽、不気味に枝分かれした根、ぬらぬらと湿った蔦が先輩を呑みこんで、まったく別の生き物と化している。

「蒼路！！」

悲鳴のような深紅の声に答えることすら困難だった。
そもそも、息ができない。
隙間なくみぞおちに巻き付いた蔦が完全に呼吸経路を遮断している。

（焔が……ちくしょう、焔さえ呼び出せればこんな草なんて……っ）

俺はあまりの苦しさに身もだえしながら思った。
しかしこの忌々しい蔦は俺の両腕の動きも完全に封じている。
どうすることもできなかった。
ああクソ、頭が真っ白だ――

「――お行き青藍！！」

――え？

深紅の声に俺はかろうじて薄眼を開けた。

すると視界に映った優美な青鹿。

化け物の魔手をかいくぐって宙を飛びながら、その額に生えた角で俺を捕縛していた蔦を掻き切る！

「っは……ッ！」

自由になった俺の体は背中から床に落ちた、が。

青藍がキャッチしてくれた。

酸素不足で朦朧とする頭ながら、俺はなんとか体勢を整える。

「蒼路！　無事か！？」

「……おかげ……さま、でなっ……」

深紅の声に俺はかろうじてピースサインを送って見せる。

が、休んでいる暇はない。

烈しく咳き込みながらも立ち上がると、今しも化け物がその根を這わせてこちらに向ってくるところだった。

植物の癖に意外と早ぇ動きで、形こそ人型だけれど、シダの翼に虚ろな穴ぼこだけが空いた顔、とこれ以上ないほどグロテスクな眺めだ。

俺はこの期に及んでまだ信じられなかった。

「……これが本当に、全部アンナさんなのか……！？」

触手が伸びてきた。ものすごい数と勢いだ。

俺は刀でそれらを一閃しながら叫ぶ。
すると横から深紅が答えた。
「違う。これは彼女と、その兄の悲しみが引き寄せた魔の集合体じゃ。しかも二人とも星を持つが故に、かなり強力な魔を引き寄せてしまっている」
言いざま彼女はスカートの裾から長い銀針を取りだして構えた。
それは毒針だ。
女の深紅が物理的に相手にダメージを与える時に使う武器。
「全く、よりにもよって学校内で暴れるとは……！」
忌々しげに柳眉をひそめながら、一本、二本、三本、彼女はそれをハル先輩に向けて放った。
全てが見事に命中して、とたんに化け物は物凄い声で絶叫する。
空気がびりびりと震えてうねり、ガラス窓が割れそうに音を立てた。
俺はおもわず耳を塞いで叫んだ。
「深紅っ！！　これじゃ学校中大騒ぎだっつーの！！」
「わかっておる！　だからこいつを眠らせるのじゃ、お前も手伝え！」
「眠らせる？」
どういうことだ、と聞こうとした俺の言葉を待たずして――深紅は床を蹴っていた。
「さっき聞いただろう！　ハルが眠ればアンナが眠り、アンナが眠ればハルが眠る」

なるほど。
と思う間もなく、長い黒髪が宙を舞う。
ふたたび銀の針が放たれた。
まるで糸のように細いそれは眼で追うのが精いっぱいだったが、今度は全部で五本あった。
今や起き上がり、不気味なぬるぬるとした触手を蠢かせながら暴れる化け物にそれは星の形を描きながら命中する。
深紅の毒は猛毒だ、化け物はまたもんどり打った。

『――星・我・以・滅』

すとんっと化け物の目前に着地しながら、深紅は呪を唱え始める。
細い指先に紅い光が宿り、針と針をつなぐようにして魔法円を描いて行く。
だが化け物も負けてはいない。
呪に半ば捕えられながらも、シダの翼を広げて跳び上がろうとし、触手を、根を、やみくもに伸ばしてのた打ち回っている。
俺は駆け出した。
刀にありったけの焔を乗せて。

『我が星を持って――』

深紅の髪が風を孕んだように膨れ上がった。
毛先がばちばちと音をたてて呪力を放出する。
もう少しで呪は完成する、だがその時、狂ったように暴れまわっていた触手の内の一本が彼女の腕を掴んだ！

「深紅！　続けろっ！！」

俺は叫びながら跳んだ。
深紅と瞳が交わる。
彼女は――頷いた。

「いい加減眼ぇ覚ませよぉお、先輩！！」
『我が星を持って汝が闇を祓う――！』

俺が触手を焼き切ったのと、深紅が呪を唱え終えたのはほぼ同時。
紅い魔法円が輝いて膨張し、先輩の体を取り巻いた！
――びくんっ！
化け物の体が思いっきり仰け反る。
眼鼻の部分に虚ろな穴があいただけの顔が、苦痛のような、悲しみのような表情を浮かべて、声にならない声を上げる。
さっきより凄い悲鳴だった。
微動だにもせずに化け物を見つめる俺の横で、深紅が静かにこう言った。

「……眠れ。生まれた闇の、奥深くに還るがいい」

――すると。
まるでその言葉に縛られるようにして、先輩はぴたりと動きを停めた。
まるで電源が切れたロボットのように急停止したと思ったら、それからゆっくりと前のめりになって、倒れ伏した。
ずうんっと音を立てて崩れ落ちた化け物の体が、一瞬後にはきゃしゃな人間の体に戻っている。

「――ハル先輩！！」

俺は叫ぶと、駆け寄ってその人物を助け起こした。

ハル

駆け寄り、助け起こした先輩には意識があった。
それだけでも脅威に値するというのに、今しも覗き込んだ背中の傷からは、一滴の血も流れてはいなかった。
俺は眼を疑った。
傷をもう一度確かめる。
さっき悪霊が火柱のように猛烈な勢いで食い破ったこの背中は、今ももちろん裂けてはいる。
ぱっくりと肉が割れ、確かに傷付いてはいるのだが。

「どういう……ことだ」

ゆるゆると驚愕が、そして恐怖がやってくる。
駆け寄って来た深紅もまた、俺の視線を追うと短く息を呑んで動きを止めた。
嘘、と呟く彼女の声が耳に届いた。

「――もう治癒しかかっている……？」

そう。
先輩の傷は、俺達の目の前でみるみる内に塞がってしまった。
まるで生き物のように割れ目の肉がもぞもぞと動き、内側から傷を閉じた――ように見えた。
俺も深紅も、言葉を失ってしまった。
どういうことだ。
さっきから、俺の頭の中で何百回も繰り返されているその問いかけが、再び頭脳を占拠する。
半星の双子、死んだ妹、その憑依を受け入れた兄、そして。

今度こそ極めつけだ。

「これは、人の治癒能力ではないわ。」

深紅が低く言った。

その時、俺の手の下で先輩の体がピクリと動いた。

俺ははっとする。

「先輩!?」

「……アンナの力だ。」

「え?」

何を言ったのか聞きとれず、先輩を助け起こそうとした俺だったが、次の瞬間射るようにこちらに向けられた冷たい瞳に動きを止めた。

恐ろしく澄んでいながら、同時に恐ろしく暗い、エメラルドの瞳。

「離してくれ」

懇願の言い方でありながら厳然たる命令の口調であった。

俺は驚くと同時に、かすかな反抗心を覚える。

だってこれまでとずいぶん態度が違わないか。

黙って眼を細め先輩を見つめ返すと、彼はいらだたしげに身を起こそうとした。

「……聞こえなかったのか? 離せと言っているんだ」

「聞こえましたが、従う義務は俺達には無い。俺達はあんたの護衛であって侍従ではないのだから」

「護衛?」

は、と先輩のきれいな唇から嘲笑がこぼれた。いよいよ態度が豹変する。
緑の瞳が俺を、深紅を見つめる。
それはぞっとするような侮蔑の眼差しだった。
俺達を眼に映しているくせに、真には何も見ていない、つまりは存在を認めていない、という。

「さっきも言っただろう。僕は護衛なんて頼んではいない」

先輩は言いざま俺の手を音を立てて払い落とした。
ばちん！　と良い音が響き渡る。
当然ながら俺はカッとした。叫ぶ。

「……何すんだよっ！」
「触るな。僕は星師が大嫌いだ。」

先輩は冷たく言いながら立ちあがろうとした。
しかし、傷は塞がったとはいえ、悪霊にその身体を奪われている以上、生気はかなり吸い取られているはずだ。
先輩は膝を震わせながら壁に手をついて何とか立ちあがった。
背筋の曲がった、とても見ていられないほど弱々しい立ち姿だった。
それでも、その佇まいには俺達が簡単に声をかけられない何かが——眼に見えない氷のような拒絶が——みなぎっていた。
先輩が、自分の知る先輩とはまるで別人のように思えて、俺は息を呑んだ。
彼は言った。

「全く、どうしてアンは君たちのところに駆けこんだのか……理解できない。忌まわしい星を持って生まれ、あまつさえそれを理由に

公然と人を殺す呪われし者」

対して大きい声でもないのに、よく通る声だった。
むしろ甘くて響きの良い声であるだけに、口にしている内容の禍々しさが際立ってしまう。
俺はますます困惑した。
どうして。
こんな顔をする人じゃなかった。
こんな風に誰かを憎むような人じゃないと、思っていたのに。

「――星師など、星など、消えて無くなってしまえばいいんだ」

その言葉には真の憎しみが、怒りが、そして悲しみが込められていた。
半星ということで、しかもその双子という事で、きっとこの人たちは今まで俺達の想像もつかない苦労を強いられてきたんだろう。
星が完全ならば俺達の力は星師という存在目的を持つ。
けれど、半星の場合はただの異常だ。
……俺は舌打ちをした。
先輩に同情してしまいそうな自分が嫌だった。

「お前たちはアンを殺そうとしている。僕はそれを望んでいないというのに、星師だからという理由を掲げて。護衛など必要ない。むしろ逆だ。君たちがアンを殺すというのなら、僕は君たちに容赦しない」

先輩はゆるゆると歩き出していた。
壁に手を這わせながら部屋の入り口の方へと進んでいる。
その姿はまるで足を折った馬のようだった。
もう走れない。もう生きている意味がない。

だから死地に赴こうとしている馬。
――けれど。
そんな先輩の前に、深紅がすっと立ちはだかった。

「……退いてくれないか」

先輩は息も切れ切れにそう言った。
しかし深紅は微動だにもしなかった。
黒い瞳に強靭な意志をみなぎらせ、先輩をまっすぐに見据えている。
先輩はそんな深紅に腹を立てたようで再度叫んだ。

「退けと行っているんだ、五辻の姫！」
「――私が五辻の血筋であろうがなかろうが」

ようやく深紅は口を開いた。
黒い髪が風もないのにゆらりと流れ、その額に刻まれた星が露わになる。

「ここでは関係のない話だ。」
「……大ありだ」

先輩の手にはいつのまにか短剣が握られていた。
さっきアンナさんが持っていたのと寸分違わぬそれを、彼は迷わず深紅の喉元目がけて突き付ける。
俺は叫んだ。

「深紅！」
「蒼路、控えよ！」

雷のような激しさでそう制され、俺は飛び出そうとした姿勢のまま固まってしまった。
だが先輩の短剣は今にも深紅の、まっ白で細い首筋を切り裂きそうなのだ、じっとしていられる訳が無い！

「けど、深紅っ」
「控えよと言っておる。……大丈夫じゃ」

黒い瞳がひとときだけ俺を捕え、それからまたすぐに先輩の方を向く。

「伊勢遥。我が一族について、なにか言いたい事があるなら聞くが？」
「……言いたいことも何も。それは姫君が一番よくおわかりではないのかな？」

ハル先輩のきれいな唇が憎しみにまくれ上がる。
ナイフを持つ手に力がこもり、深紅の首筋にすうっと紅い細い筋が走った。
俺は怒りに震える右手に左手を沿わせる。
先輩は続けた。

「貴方の一族のせいで、我ら星を持つ者は戦いの歴史の幕を開き、そして人殺しを行う事になったのだ。それも決して日の当たらぬ闇の中で。星を持って生まれた子供とはすなわち、闇に生きる運命を背負って生まれた子供」
「それがどうした？」

深紅は、己の置かれた状況に全く平然としていた。
むしろ挑戦的な態度で先輩を真っ向から見据え、その美しい顔に

ほほ笑みを浮かべすらしている。

「始まりはどうあれ、星師たちは既に生まれてしまっておる。そして今なお闘っているのだ。人殺しなどではない。お前が言うように、闇の中で、闇を祓うために、誇りを持って仕事をしている！」

「誇りだって？　あなたは――あなたが、その言葉を口にしていいと思っているのか？」

先輩の声に殺気が滲んだ。

――もう限界だ。

俺は悟って音もなく床を蹴っていた。

深紅の目前に着地しざま、先輩の握っていた短剣を片手でもぎとる。

瞬間、そうはさせまいと前のめりになった先輩の、その顔の前に刀を突き付けて、動きを封じる。

「蒼路！」

深紅の声にもふり返らず、俺はただ、先輩を見据えた。

刃を握った左手から血があふれた。熱い血潮。

「……なんかよくわかんないけど」

俺は言った。

そう、よくわからない。この状況が。

先輩が急に態度を豹変した理由も、俺たちを憎む理由も、さっぱりわからない。

けど。

「こいつの言うとおりだ。俺達は誇りを持ってる」

「なんだと？」

先輩は牙を剥いた。

「闇に生きることを余儀なくされた人生が誇りだって？　君は本気でそう言うのか？」

ハル先輩の瞳は俺の刀から発せられる焔に照らされ、鮮やかな緑色に輝いていた。

明確なその、怒りの色と敵意。

ああ、と俺は確信する。

今朝、教室で感じたあの殺気は、アンナさんじゃなかった。

間違いなくこの人、ハル先輩から発せられたものだったのだと。

俺は息を吸った。

そしてはっきりとこう答えた。

「ああ。星師として生きることこそが俺の誇りだ」

「……どうしてだ」

先輩は俯き、ぎりりと音を立てて歯ぎしりをした。

「どうしてそんな言葉を吐ける？　その女の前で。僕の前で！　半分の星しか持たずに生まれてきた僕たちを認めず、あまつさえ引きはがそうとしている癖に……どうしてそんなことが言えるんだ！！」

先輩の肩の線がわななき、その感情が爆発したのがわかった。

俺は思わず身構えた。

また何がしかの攻撃を受けることを覚悟したのだが――予想とは裏腹に、先輩の殺気は急に消失していった。

代わりに残ったのは悲しみだった。

緑の瞳が虚空を見つめ、ふたたびあの名前を、呼ぶ。

「……アン！」

俺はその時理解した。

先輩はただ、悲しいだけなんだと。

「先輩」

思わず呼びかけた、けれど先輩は答えなかった。

俺を押しのけて、ふらふらとした足取りで音楽室を出て行こうとする。

俺ははっとした。

片手に彼の短剣を握ったままだったのだ。

ふり返って呼びとめようとしたが、それより先に深紅が口を開いていた。

「――お待ち。」

先輩は、肩をぴくりと震わせて、ふり返りこそしなかったが立ち止った。

深紅はその背中に言った。

「これだけは言っておく。星師は人殺しなどではない。少なくとも――私は皆に、蒼路にそんな真似はさせん。」

「……深紅」

意外な言葉に眼を見開くと、深紅はやにわに俺の方を向いた。

そして白い手で俺の左手を取ると、そこから短剣を抜きとって先輩に向けて投げつけた。

「返しておこう。」

深紅は言った。

唐突な返却だったが、先輩はその短剣をしっかり片手でキャッチしていた。

……さすがというべきか。

「いくら私たちでも四六時中お前を見張れるわけではない。自分の身は自分で守ってもらわねば困る」

「……二度と僕らに近づくな。」

深紅の言葉に答える代わり、先輩は言った。

「さっきも言った通り、僕からアンナを引き離そうとするなら、僕が君たちを殺す。……もう後輩だからといって、見逃したりはしない。君達は、星師として僕の前に現れたのだから」

……ということは、今までも俺が星師だと知ってはいたんだ。

俺は思った。

知っていたけど何も言わず、良い先輩を演じてくれてたってわけか。

――でも、一体何のために？

なんだか腑に落ちず、俺は再び歩きはじめた先輩の背を、視界から消えるまで黙って見送った。

そしてようやく息を吐く。

その場にしゃがみこむと両手で頭を抱えて、髪の毛をかき乱した。

さっきから訳わかんねぇことばっかりで頭がぐちゃぐちゃだ！

「あー！　俺たちもしかしたらスーパー面倒くさい仕事引き受けち

まったんじゃねぇか、深紅？」

スマートな深紅に状況検分をして欲しくて言ってみたが、彼女からの返答はなかった。

「……？」

俺は彼女を見た。

さっきからずっと、黙って立ちつくすその人を。

「おい、深紅？」

嫌な予感がした。

白い顔がゆっくりと俺の方を振り向いた。

血の気を失い、蒼白な顔であった。

胸の中で予感が確信に変わる。

深紅の体がふらりと前後に揺れ、続けて、黒い瞳が閉ざされる。

「――深紅っ！！」

彼女はその場に崩れ落ちた。

星師とは

深紅には秘密がある。
俺はそれを知っている。
何故なら、彼女がその秘密を負った瞬間、俺も傍にいたからだ。

＊＊＊

深紅はババアの屋敷に運んだ。
え？　どうやってって、勿論俺がおぶって運んだんだよ。
地上を歩いたんじゃ目立つから、学校の屋上から屋根づたいに飛んで歩いてな。
今回ばかりはドレスコードも門番も無視して突入したが、さすがのババアも邪魔しなかった。
それどころか俺達が来るのをわかっていたようで、俺が玄関を突破した瞬間、召使たちと共に出迎えてくれたもんだ。

「む。」

ババアは深紅を見た瞬間そう唸り、即座に屋敷の奥へと彼女を連れて引っ込んでしまった。

「待てよババア、俺もっ」

追いすがろうとした俺だったが、たちまち召使たちの持った薙刀が道を塞いでしまった。
ぬがー！！
俺は暴れた。

何なんだよ一体！！

「おい、ババアっ！」

「やかましいわ、こんの馬鹿者が！　言った傍から深紅に無茶をさせおって、全く、これだからお前に任せるのは不安だと言ったのじゃ。」

ぎらぎらした眼差しで睨みつけられて俺の心はひやりと冷えた。

薙刀から身を乗り出して、必死に突破しようとする。

が、召使たちはびくともしない。

……ちくしょう、これ絶対ババアの式神だろ！！

「深紅、ヤバいのか！？」

突破は諦めて、仕方なくそう叫ぶ。

ババアはやれやれと息を吐いて首を振った。

「大事はない。だが全く問題がないわけでもない。ちと時間がかかる。お前も怪我を手当てしてやるから、それが終わったら帰るが良い」

「え！？　いいよ、俺のことなんて、それより――！」

「駄目だ！　帰るのじゃ。良いな」

で。

ババアは行ってしまい。

俺は召使たちに腕を掴まれ、屋敷の客間へと引きずられて行った。

さっきから放置しておいた左手の傷を手当され、そのまま帰らせられるところだったが、おあいにく。

俺は全力で抵抗して屋敷に居残った。

大体、ババアに聞きたいことも山ほどある。

ここで帰るわけにはいかない
そう思ってまんじりともせずに待っていたのだが――
――やっぱりというか、眠くなってきた……。
気づけば寝ていた。
疲れも少しあったらしく、眼が覚めた時には夜になっていた。

「うおお、マジか！？」

慌ててふすまをすぱんと開き、廊下に飛び出すと、辺りは闇。
濃厚な緑の匂いに風の流れが身い体じゅうに吹き付けてくる。
池の方からぱしゃんと快い水音が立った。

『おや。またいつかの星持ちが来ていますな』
『うむ。先ほど姫様もお帰りになられたようじゃのう』
『おばば様もなにやら忙しそうにしていましたな』
『うむ。姫君の封印がまた強まったと言っておられたのう』

――何だと！？
池の鯉たちが話している内容を聞きとって、俺は飛び上がりそうになった。
慌てて廊下を駈け始める。
今の話が本当だとしたらエライことだ。
姫君とは深紅のことであり、封印とは恐らく封呪（ふうじゅ）を指している――
――六年前、俺の目の前で深紅に施された、あの封呪の法。
それは深紅の力が強まるほど彼女自身を戒めていくという、恐ろしい技だった。

「……なんてことしたんだよ……」

親父、と。

俺は呟いて唇を噛んだ。
薄い皮膚がたちまち破れて血が流れるのを感じたが、憤りは収まらない。
強く握りしめた拳からも血が流れた。
ああそういえば、怪我してたんだっけ。どうでもいいけど。
俺が傷ついて、深紅が楽になるのなら、いくらでも傷ついてやる。
けど実際はそうじゃない。
わかっているから、俺は深紅の傍にいることに決めたんだ。
それなのに――

「――廊下は走るでないわぁあ!!」
「ぎゃーっ！　出たな妖怪!!」

突如視界いっぱいに映ったしわくちゃの顔に、俺は悲鳴を上げて跳び退った。
だがよく見るとそれはババアで、手に何か盆を捧げ持っている。
俺は手にしたくないを下ろした。

「あれ？　なんだババアか。何持ってんだ？」
「なんだではないわ、このこわっぱ！　帰れと言ったのに何をしておる！」
「なんだとぅ!?」
「事実であろうが！　だあーれーが妖怪じゃ、このばっかもん!!」

侮辱の言葉に怒った俺に、ババアは痛烈なチョップをお見舞いしてくれた。

「痛ってぇー!!」

脳天に火花が散って俺はもんどり打った。

またしても避ける隙すらなかった。
本当にこいつ、妖怪ババアじゃねぇのか。

「ふん。これは罰じゃ、未熟者。」
「罰？」

その言葉が何を指すのかわかって、俺ははっとする。

「そうだ、深紅はっ！？」

ババアに取りすがってそう尋ねた。
彼女にふりかかる災いの全ては俺の罰だ。
俺はそのことをようく知っている。
だから星師になったのだから。

「深紅は大丈夫なのかよ、ババア！？」
「……」

ババアはすぐには答えず、無言で俺を見下ろした。
その視線。
感情の読み取れない瞳に俺の焦りは最高潮に達する。
ババアの着物の裾をつかむとがくがくと揺さぶった。

「おい、答えろよ！　深紅は？　深紅は！！」
「……安心せい。ただの疲労じゃ」

やがてババアはそう言った。
俺は安堵のあまり、一瞬息ができなかった。
ずるずるとババアの足もとに崩れ伏し、ようやっと全身の緊張を解いた。

よかった。

「……良かった……！」

そうしてしばらくじっとしていた。

何を考えることもできなかった。

ただ、深紅が無事であればそれで良かった。

ただ、俺は、彼女に傷ついてほしくない。

彼女を守るためだけに俺はここにいて、だから、俺のせいで彼女が傷を負えば、俺はもう彼女の傍にはいられない。

つまり、深紅を守るという事は。

俺にとって、何より大事な自分の居場所を守ることでもあったのだ。

「来なさい、蒼路。」

「え？」

やがてババアが沈黙を破った。

俺は顔を上げた。

彼女の手にした盆の上には、そういえば薬湯（やくとう）の椀が載せられていることに今更ながら気がつく。

ババアは俺の背後を指差して言った。

「お前の怪我にはもう少し特別な手当てがいる。聞きたいこともあるじゃろう――共に私の部屋に来なさい。」

これは師匠としての彼女の言葉だった。

本当はすぐにでも深紅の元に駆けつけたい俺だったが、こういう時のババアに逆らうのは嫌だった。

なんつーか、非礼だから。
……というわけで一秒だけ迷ったが、それでも俺はすぐに姿勢を正し、床に拳をついて一礼していた。

「承知いたしました。」
「うむ」

ババアは厳かに頷くと、着物の裾をさばいて歩き出した。

＊＊＊

左手の傷には草花の種子が植え付けられていたらしい。
自分では全く気が付かなかったので、ババアにそう聞かされた時ぞっとした。
植物。そういえば、アンナさんが憑依したあとのハル先輩は、植物の化け物に変化したっけ……。

「どうやらその双子、緑の性質をもつらしいな。深紅もその毒に当てられたようじゃ」
「――やっぱそうか。」

ババアの言葉に、薬湯の盃を傾けながら俺は眉をしかめた。
怒りが一瞬胸中に生まれたが、それは不思議に燃え立つことなく、すうっと静かに消えて行った。
……なんだか俺はひどく落ち着いていた。
行燈（あんどん）の光に照らされた薄暗いババアの部屋。
辺りには甘い香りのする香が焚かれており、くゆる白煙を吸い込む度に、なにか身体が緩（ゆる）んで行くような感覚がする。
恐らくはこれも薬草なのだろう。
鎮静作用のある薬草。

「しかし半星とはいえその男、なかなかの術者のようじゃの。お前、結構な深さまで種を植え付けられておるぞ」

ババアが言った。

こいつはさっきからずっと、俺の左手から種子を取り除く作業に従事している。

先刻麻酔を打たれたので痛みこそないが、自分の手の肉を、棘ぬきのような器具でほじくられるのは見ていて気持ちのいいものではない。

眼を背けた俺は、部屋の天井付近になにかゆらゆらと漂っている影のような「もの」を見つけた。

影縫いだろうか。影の中に潜むだけの、害のない妖怪。

「……でも俺、わっかんねえんだけどさ。アンナさんがもう死んでるってことは、俺達が会って、話して、あまつさえ戦ったあの人は幽霊だったってことだろ？　あまりにもはっきりした霊で、俺でさえ全然気が付かなかった。そんなことってあり得るのか？」

俺は尋ねながらアンナさんを思い浮かべる。

にやりとした魔女っぽい笑い方、生命力にはちきれそうだったナイスバディ、何よりも、ハル先輩をを呼んだあの声。

信じられない。

もうこの世に居ない人だとは、とても。

考えているとババアが答えた。

「星の力が作用したのじゃな。彼女が半星であり、お前たちは星師。どちらも普通の人間よりもずっと闇――冥界や異界に近い所にいる者じゃ。星師の中には幽霊を専門にしている奴らもおるくらいじゃて」

「へぇ。初耳だな」
「お前はわたしの元で、典型的な闇祓い専門の教育を受けておるからのう。ま、その分今回の依頼は良い経験になるじゃろう」
「――そうだ。そもそもその依頼だけど」
ババアの言葉に思い出したことがあり、俺は視線を元に戻した。
傷口に薬草の煎じ汁を染み込ませた布があてがわれて、ツンとした独特の香りが鼻を付いた。
「ハル先輩は、護衛を依頼したのは自分じゃなくてアンナさんだって言ってた。ってことは、アンナさんはここに来たのか？」
「来たとも。兄を助けてやってくれと泣きつかれたわい。自分ではどうしようもできないのだと」
「……けどさ、さっきも思ったけど、それっておかしくない？」
俺は言った。
だってそうだろ。
「なんで妹の霊が、実の兄貴に憑りついたりしちゃうわけ？　恨みつらみがあったわけじゃないみたいだし、自分で憑依した上で”兄貴を助けてくれ”って、アンナさん矛盾しまくりだろ。」
「お前の言っていることは最もじゃが、あいにくとな。幽霊にはそういう現世の理は通用せん。彼らは体を持たぬ残留思念のような存在だ。己の意思とは無関係に、自分が引き寄せられた人間に憑率してしまうことは少なくない」
「え、そうなの！？」
俺は心底びっくりして眼を見開いた。
だとしたら霊って、なんて悲しい存在なんだ。
思わずババアを見つめてしまったけれど、ババアは俺の顔を全く

見ずに話を続けた。

「そうなのじゃ。アンナの場合は、兄が心配で成仏できず、死してなお霊として兄の傍に添ってしまった。それだけなら良いのだが、まずいことには双子は星を持つ身だった。ゆえに、アンナは非常にパワーを持つ霊となり、ハルの方でもそんなアンナと触れあう力を持っていた。そして互いに、離れがたくなったのじゃな。確かにあれだけはっきりとした霊はなかなかおらん。わしでさえ驚いたくらいじゃから、あれの兄はさぞ驚いたであろうよ。驚いて、そして喜び……妹を手放せなくなったのじゃ。」

哀れじゃのう、と、ババアの声が何か慈しみを含んだように低く、優しくなった。

俺は少し胸を突かれて黙ってしまった。

確かに。

俺だって藍や母さんが死んでしまって、幽霊として俺の前に現れたら……先輩と同じ事をしないとは言い切れない。

愛しくて、恋しくて。もう二度と傍を離れて欲しくなくて。

でも。

「でも……俺たちは星を持っている。」

俺は薬湯を飲みほした。

香ばしく熱い液体が喉から胃に滑り落ちて行く。

ババアは今度は針と糸を持って、俺の傷口を縫い始めた。

「さっきババアがそう言ったみたいにさ、普通の人間よりは死んだ人とか、霊とかに近い場所に居るんだ。そのことを生業にしてる。だから、うまく言えねーけど、そういうことに関して、間違っちゃいけないと思うんだよな。星であろうが、半星であろうが。異能を

持ち合わせている以上、この使い方を勘違いしちゃいけねー気がするんだ」
「……フム。」
傷口を縫う手を止めて、ババアは俺を見た。
行燈に照らされたその瞳は、今までに見た事のない眼差しをしていた。
俺は何となく気恥かしくて眼を逸らす。
するとババアは言った。
「お前は、誠に甘い奴じゃのう」
「……甘い？」
「情にもろいということじゃ。お前、双子の兄の方に同情しているんじゃろ」
「うっ」
図星を指されて俺は固まった。
な、なんでわかっちまったんだ!?
「良いか、蒼路。」
ババアはふと針を置くと、脇に置いてあったハサミで糸を切った。
今度は包帯を取り上げて傷口に巻き付けてくる。
ずっと天井を泳いでいた影縫いが、ふらふらと行燈に照らされた俺達の影の方に泳いでくるのが見えた。
影縫いは影から影へと渡り歩き、けして一つの場所に棲みつかない。
影から外へはどこにも出られず、なんの力も持たない、ほんとうに儚い存在だ。

「優しいのはお前の良い所じゃ。深紅に対するお前の態度からも、それはようくわかっておる。しかしな、可哀そうという気持ちはただの自己満足で、優しさではない。相手のためにはならないからじゃ」

「……わかるよ。でも」

「聞くのじゃ。ようく考えろ。双子の兄は確かに可哀そうな男じゃ。半星で、愛する妹を亡くして、悲しみと怒りに狂うあまり、その妹に憑り付かれてしまった。しかもその状態を嫌だと思う余裕すらなく、むしろ喜んですらいる。お前達がアンナを退治すれば、彼はもしかしたら立ち直れないかもしれぬ」

「だったら――」

「だが、だからこそ！」

耐えきれずに口をはさんだ俺をババアは眼だけで制した。

その瞳。

いつも通りに厳しいが、どこかに……なんていうか、優しいような、悲しいような色を浮かべた瞳。

この人のこんな眼を、初めて見る気がした。

「だからこそ、じゃ。蒼路。ここでアンナを引きはがしたら彼は立ち直れないかもしれない。だが、このままにしておいてはもっといけないのじゃ。アンナがお前たちにハルの護衛を依頼したのは、彼に生きていて欲しいからなのじゃぞ。兄が助かることはつまり、自分が退治されることだとわかっていて、アンナはお前たちに助けを求めたのだ。彼女が助けてほしいのは自分ではない。兄だけ――ハルだけなのじゃ！」

俺は言葉を失った。

やっとわかった。

ババアも胸が痛いのだと。

あの双子を引きはがす事に、アンナさんを退治する事に、胸を痛めているのは俺だけじゃないんだ。
当たり前の事実に言われて初めて気がついた自分が悔しい。

「俺……」

俺は俯きかけて、思いなおした。
まっすぐにババアを見る。
瞳を合わせると、彼女は頷いた。

「お前が言ったことは正しい。蒼路。星を持つ者とはすなわち闇に生きる者である。だが決して、闇に呑まれた者ではないのだ。そのことをハルに教えておやり」
「……星を持って闇を祓い、この世に光を導く者――」

俺は呟いた。
それは幼いころから幾度も繰り返しくりかえし、父に、深紅に、そしてこの師に教えられてきた物語。

「――星導師。」

右手を見つめた。
行燈の光に透けて、わずかに赤みを帯びた肌に浮かび上がる五芒の星。
望んで得た星ではない。
俺たちの運命は、俺達が選びうるものではなかった。
けれど。
眼を閉じた。
けれど、俺達は今生きている。
この手で、この足で前へ進み、生きてゆく事ができる。

（星なんて、あっても無くても。本当は多分、どっちだって同じだ）

俺は思った。

でも、それでも俺は星導師なのだ。

「……わかった。」

ババアに向って頷いて見せると、俺の師は、しわくちゃの顔にかすかな笑みを刻んだ。

そして静かに立ち上がった。

「さて、そろそろ深紅に会いに行くか？　もう眼を醒ましているはずじゃ」

「お、おう。」

俺も続けて立ちあがり、部屋を後にした。

涼しい夏の夜風が心地よい。

ババアの後について廊下を歩きながら、迷ってはいけない、と己に言い聞かせた。

迷ってはいけない。

俺はたぶん。

ずっと進み続けなければいけない。

――うまく言えないが、星を持って生まれたということはつまり、そういうことなんだろう。

夏の朝

「母さん！　もう起きないと遅刻するぞ！！」

夏のさわやかな朝日が差し込むキッチンにて、朝飯を作りながら俺は叫んだ。

時刻は七時。

窓の外には澄んだ青空と白い雲が浮かび、お向かいのビル（うちはマンションの八階に住んでいる）に干された洗濯ものが風にはためいている。

あー、今日も良い朝だ。

「お兄ちゃんおはよ～」

「お。おはよう藍」

オムレツをひっくり返した所で妹の藍が起きてきた。

眼をこすりながらてこてこと歩いてきて、冷蔵庫の中のオレンジジュースを取りだす。

俺はオムレツを皿に盛りながら藍に頼んだ。

「なあ藍、母さん起きたか見てきてくんない？」

「うん、いいよ～」

「で、寝てたら叩き起こして」

「それはヤダ～」

藍はリビングを突っ切って、母さんの私室に突撃した。

この隙に俺は支度を整える。

まずできあがった朝食をテーブルに並べ、コーヒーメーカーに豆

をセット。電源を入れる。
そんでもって今度は冷蔵庫から、昨日の内に作っておいた弁当を取りだして、白いご飯だけ追加するとハンカチで包んだ。
で、それをテーブルに並べると準備は完成。
ようやくエプロンを脱いでネクタイを締められるというわけだ。

「おはよ～」

やがて藍に先導されながら母さんが起きてきた。
寝ぐせでぼさぼさの頭に思わず笑いそうになったが、寝起きの母さんは怒らせると怖いので堪える。
熱いコーヒーをマグに注ぎ入れたものを手渡すと、彼女は喜んだ。

「ありがとー、蒼路。あんたもすっかり主夫っぷりが板についてきたわね」
「お陰さまで。オムレツ、うまいよ。冷めない内に食って」
「チーズ入ってる？」
「入ってる。パセリとバジルも」

言いながら俺もコーヒーをマグに注いで口にした。
ちょっと前は全然飲めなかったこの液体も、最近じゃあ毎朝口にしないとしゃっきりしない。
不思議なもんだと思いながらテーブルの椅子を引くと、一足先に食べ始めた母と妹が唸っていた。

「うむむ……また腕を上げたわね」
「おにーちゃん、これおいし～！」
「そう。良かった」

率直な感想に思わず顔がゆるんだ所で、ふいに母の目線が俺の手

に止まる。
　オムレツとプチトマトをもぐもぐ咀嚼し、飲みこんでから彼女は言った。
「蒼路。あんた左手、怪我したの？」
「ああ。昨日、ちょっとね。ババアとの修行で」
　俺はできるだけ何気なく答えた。
　が、母は腑に落ちない様子である。
　首を傾げながらコーヒーを傾けてなおも言い募る。
「本当～？　深紅ちゃんとの仕事でやっちゃったんじゃないの？　結構面倒なことになってたりするんじゃないの～？　あんたバディーが深紅ちゃんだからって言って、変な意地張ったり格好つけたりしてると、命がいくつあっても足りないわよ」
　ざく、ざく、ざく、と。
　母の台詞は一言ずつに核心を突いてきた。
　……何も話していないのに鋭すぎる。
　俺は居心地が悪くなってきて、高速でオムレツを食べ終えると立ちあがった。
「ごちそーさま！　俺もう行くわっ」
　言いざま弁当と鞄を取り上げて俺は踵を返す。
　背中の後ろから母と妹の声が追いかけてきた。
「え？　まだ早いじゃない、蒼路！」
「おにーちゃん、早い～」
「今日は早く行かなきゃなんねぇんだよ！　じゃあね！　行ってく

る！」
「行ってらっしゃい……」

バタン、と。
音をたてて玄関を閉めれば、眼に突き刺さるような日の光。
これを浴びると気合が入る。
俺はよっし、と拳を握った。

――今日も一日が始まる！

＊＊＊

『おや、坊。早いね』
『お早う、坊。どこへゆくのだ？』

いつもより大分早く出たので時間が余った。
なので、回り道をしながら登校することにした。
近所の寺の境内を抜けて行く時、山門（さんもん）のたもとにちょこんと座っている二匹の神狐（しんこ）と出会った。
俺は手を振って答える。

「よー、カリヤにスリヤ。俺はこれから学校だぜ」
『学校とは何だ、スリヤ』
『人が学ぶ場所の事ぞ、カリヤ』
『わらわもたまには外に出たいのう、スリヤ』
『わしらにはここを守る務めがあるのじゃぞ、カリヤ』

カリヤとスリヤは金弧と銀弧。
その体毛と、青と紫という瞳の色以外は全く同じ姿かたちをしている。

よくわからんが、『限りなく相似しているものの絶対的に違う存在』であるらしく、二匹でこの寺の守護を務めている。

「お前らも毎日お勤め御苦労さんだよな。今度うまい油揚げ買ってくるからもちょっと頑張れ」

そう声をかけると、二匹の神狐は文字通り飛び上がって喜んだ。

『なぬ！　本当か、坊』

『嘘はなしだぞ、坊！』

「俺は嘘はつかねーよ。んじゃあなっ」

笑いながらまた手を振って、行き過ぎた。

星を持っていると、こういう風に他人には聴こえない声が聴こえて、見えないものが見える。

かつての俺はそれが嫌でたまらなかったし、異形のもの達もただ恐ろしく、逃げ回っているだけだった。

けれど、交わす言葉があるということは幸福なことで。

俺は彼らも、時には他愛のない事で喜んだり笑ったりするんだと知った。

優しくされれば嬉しいし、冷たくされれば悲しい。

それは人も妖怪も精霊も同じだ。

異形のものたちと触れ合うということは、俺にそんな当たり前のことを教えてくれた。

『あ、蒼路だ。珍しいわね、こんな早くに』

境内を抜けて、ゆるやかな坂道を上って行くと、今度はそんな声がかけられた。

発しているのは猫である。

まっ白な身体に左右色違いの瞳、二本に裂けた尻尾。
……猫又の花緒（はなお）だ。

「よ、花緒。おはよ」

しゃがみこんで喉を掻いてやると花緒は嬉しそうに眼を細めた。
見た感じは全く普通の猫と変わらないが、じつは花緒が夜な夜なこの近辺のパトロールをして回っていることを俺は知っている
だって手伝ったこともあるしな。

「最近変わったことないか？」
『うん、近頃は平和よ。』
「そか。何かあったら言えよ。手伝うから」
『ありがとう、蒼路。』

花緒は喉を鳴らして甘い声でそう言うと、俺が坂を登り切るまできちんと見送ってくれた。
花緒はこの近くにある老舗の豆腐屋で、一世紀ほど前に飼われていた猫なのだ。
とても大事に飼われたせいか人間が大好きで、死んだ後もこの辺りに棲みついて、土地を守るようになった。
――俺達が気が付いていないだけで、そうやって人の傍に寄りそう存在というものはとてもたくさんいる。
今より闇が深かった時代には、人は彼らの存在を信じていて、ゆえに視認することができた。
けれど良くも悪くも光があふれるにつれて、人々は彼らを忘れるようになった。
妖怪や精霊たちと共存し、助け合っていたことをすっかり忘れて、まるで自分たちだけがこの世界の住人であるかのように生きている。
……そういう人の馬鹿さみたいなことを、星師として闘う時、お

れはいつも考える。
人は一方的に闇を嫌うけれど。
その闇の中には何て言うか、愛しい闇、可愛い闇、悲しい闇――
色々な種類があって。
俺達がその善悪を判断する権利などないのだ。
俺達は星を持っているけれど、その力は決して、誰かを虐げたり、
苦しめたりするためのものではない筈。
――僕は星師が大嫌いだ
ふいに、昨日のハル先輩の言葉が頭をよぎった。
あの瞳。
真の憎しみと怒り、そして、悲しみにまみれた姿。

「……」

痛々しいと、思った。
そして何があったのだろうと。
バス停に辿りつき、俺はバスに乗り込んだ。
つり革を掴んで立ちながら、尚も考える。
先輩は何故あんなに星師を憎んでいるのだろうか？
それは、アンナさんの死と、彼らの半星と、何か関係があるのだろうか。
俺はまずそれを知らなければいけないような気がした。
そうでないとハル先輩の護衛をする権利はないんじゃないか、と。
迷うのは駄目だ。
けど、間違うことはもっと許されないと思う。

（――……アン！）

うまくいえないけど、あんなに悲しい顔をした先輩を、更に悲しませるような結果だけはあってはならないと思うのだ。

でもそれにはどうしたらいいんだろう？
考えている内にバスが停まった。
ん、と顔を上げれば、窓越しに高校の校舎が見えている。
俺は慌ててバスを降りた。

「危ねぇ危ねぇ。乗り過ごすところだったぜ！」

ふいー、と呟きながら正門の方に歩き出した。
とたん。
目の前に飛び込んできた光景にひっくり返りそうになった。
たった今、正門を抜けた一人の青年と、その横を歩く……女性。
二人とも同じくらいの背格好をしていて、すらりとしていた。
金色を帯びた淡い色合いの髪、ちらりと見えた横顔にエメラルドの瞳が輝く。

「って、オイ！！」

二人ともすごく楽しそうに笑っていたが――だからこそ、俺はこの状況を見過ごしてはいけなかった！

「何やってんのアンナさんっ」

深紅の技を喰らったくせに、思い切り目ざめてんじゃん！！
ていうか、朝っぱらから幽霊が、兄貴と一緒に登校するもんじゃねーだろっ！！

『あらー、星師の蒼路くんじゃないの。おはよう。昨日は悪かったわね』

駆け寄るとアンナさんが気が付いて笑った。

ハル先輩はと言えば、ちらと俺を一瞥したっきり完全に無視を決め込む。

俺はむっとしたけれど、取り合えず今は、相手を妹だけに絞ることにした。

「おはようじゃなくて。普通すぎでしょ、アンナさん！」

悲しいこと

『普通すぎって、なにがよ？』

これがアンナさんの答えだった。

今日も今日とて彼女は幽霊に見えない。

顔色なんかつやっつやだし、エメラルドの瞳は日光にきらきら輝いて、その動きに合わせて揺れるボインも実に見事。

生きてる人と違うのは影が無いことぐらい。

周囲の人を見渡して、この人が本当に見えていないのかどうか聞いてみたくなるぐらい、それくらい生々しい霊体だった。

「なにがじゃなくて！　あんた幽霊なんだぜ、ハル先輩の傍にいちゃ駄目じゃんか！」

アンナさんはハル先輩のすぐ近くに、寄り添うようにして立っていた（アンナさんにはもちろん足もあった）が、俺に突っ込まれるとその長い腕を先輩の首にまわした。

そしてそのまま背後から抱きしめる体勢を取る。

おおっ。

俺は思わず身を乗り出した。

あ、アンナさんのボインが先輩の頭を挟んで気持ち良さそっ……！

――って違う！！

「だー！　くっつくな、朝からっ。幽霊の癖に！！」

『うるさいなー、もう。しょうがないでしょ。身体が勝手にハルにくっついちゃうのよ。』

アンナさんはハル先輩をぎゅうぎゅうに抱きしめながら言った。

……どう見ても意図的にやってるとしか思えんが。
俺は軽くため息をついた。
全く、アンナさんという人はいつもおどけていて、言う事のどこまでが本気なのかさっぱりわからない。

「しょうがなくないだろ。あんたがそういう心持だからハル先輩に負担かけてるんだぜ」
『あんたに言われなくたってわかってるわよ、小僧っ子。余計なお世話、偉そうにー』
「なぁんだと!?」
「――高村くん。さっきから、何を一人で騒いでいるのかな?」

ここで、さっきから無言だったハル先輩が突然口を利いた。
驚いて見てみれば、彼はきれいな顔に柔和な笑みを浮かべ、けれど緑色の瞳に明らかな迷惑の色を浮かべてこちらを見ていた。
俺ははっとして辺りを見回した。
すると見つかる多くの奇異の視線。
ヤバい、と思った。
アンナさんが他の人間には見えていないことを忘れて、つい騒いじまった!

「近頃暑いから、ちょっと頭がおかしくなっちゃったのかな? 保健室に行ったほうが良いんじゃないかい?」

ハル先輩はいま一度ほほ笑んで、俺の方に近寄った。
その身体から発せられる殺気に気押されて、俺は一歩後ずさる。
あーあー、この人ってやっぱり二重人格だったんだな……。
眉目秀麗で頭脳明晰、人柄も良い生徒会長なんて、出来過ぎた話だと思ってたんだ!

「大丈夫？　熱はない？」

優しげな声がさらに近づいて、そして、整った顔立ちが俺の目前まで寄った。

俺は全身を緊張させた。

まさか、こんな公衆の面前で攻撃されることはないだろうが、それでも今のハル先輩は何をしでかすかわからない危うさを孕んでいたからだ。

「――アンに近づくな、と言っただろう」

やがて先輩は俺の耳元に囁いた。

甘く冷たい声。

思わず緑の瞳を睨み返して俺は答えた。

「……こっちこそ、あんたの命令に従う義務はないと言ったはずだ」

馬鹿言ってんじゃねぇよ。

低く呟くと、先輩はかすかに鼻を鳴らし、俺から離れた。

おおおムカつく！

この間も思ったけど、この人の笑い方ってマジでムカつく！

「ま、いい。とにかく邪魔はさせない」

「……邪魔？」

それは奇妙な言い方だった。

俺は怪訝な顔をしたと思うが、先輩の肩の上にいるアンナさんはもっと深刻な顔をした。

いつものおどけた様子が消えて、緑の瞳が翳っている。

彼女は先輩を呼んだ。

『ハル――』
「行くよ、アン」
ハル先輩はアンナさんを遮った。
「そろそろ姫君のお出ましだ」
言いざま踵を返し、昇降口の方に行ってしまった。
当然ながらアンナさんも彼と一緒に消える。
残された俺は何だか釈然としない気持ちで頭を掻いたが、やがて背後をふりかえっていた。
校門の前で人垣が分かれている。
その中心をまっすぐな背筋で、優美な歩き方でやってくる少女がいた。
長い黒髪が風に揺れるたび、額の端に星の痣がかいま見える。
俺は眼を細めた。
――深紅だった。
＊＊＊
「お、おはよ深紅！」
俺は彼女に声をかけた。
だが深紅は、俺をちらと見やったものの、返事もしないで昇降口の方へと歩いて行ってしまった。
ええ!?　とショックを受け、半ば怒りながら俺は彼女の後を追う。
「おい、深紅！　何シカトしてんだよ！」

「……」

尚も声をかけるが、深紅は俺の声がまるで聴こえてもいないようにずんずん歩いて行ってしまう。

一年と二年の下駄箱は隣同士だ。

一瞬別れたものの、俺はちょっ早で靴を履き替えると再び深紅の後を追った。

だってあいつ顔色が悪い。

白い肌が青ざめて、眼の下にはうっすらと隈が見えてる。

……昨日の今日だから、俺はどうしても気になった。

「深紅、おい、深紅ってば！！」

俺はめげずに追いかけた。

噂の美人転校生と、それを追いかける後輩の男（つまり俺）という構図はかなり人目を惹くものらしく、周囲の人間があからさまに何か喋っているのが聞こえてくるが、気にしなかった。

気になるのはただ深紅の様子だけで――

「――五月蠅いわね。」

「え。」

やにわに……嫌、ようやくというべきか、深紅はぴたりと立ち止った。階段のたもとで。

俺をじろりとふり返り、そのまま、薄暗く死角となる階段の陰にひっぱりこむ。

俺は突然、耳に火がつくような痛みを感じた。

深紅に耳朶を引っ張られていたのだ。

「痛っ！！」

涙目になって叫ぼうとしたが、それは深紅によって遮られていた。

「しーっ、静かにおし、この馬鹿者！」

「何すんだよ深紅！？　ってか何なんだよさっきから！！」

「それはこちらの台詞でしょう。お前、何を悪霊と楽しそうに話しこんでいるのよ！」

「あ？」

「あ、じゃなくて！　あの双子の妹の方のことよ！」

そこで急に静かになった。

俺が黙ったからだった。

すぐ傍の階段を生徒たちが昇って行く足音と話声がする。深紅はさらに用心深く、俺を物陰の奥の方へとひっぱりこんだ。

距離が急激に縮まり、深紅の、ほのかに甘い香を感じて俺はどぎまぎしてしまう。

「な、ん、お、俺は楽しそうに話したりなんてしてねーぞ……」

もごもごと言うと、深紅の厳しい視線が投げかけられた。

「していたではないの。さっき、校門の前で。」

「別に楽しんでたわけじゃねーよ」

「そういう問題じゃないでしょう！」

ぴしゃりと怒鳴りつけられた。

俺はますます混乱する。

「じゃあどういう問題なんだよ！」

「わからないわけ？　本当に大馬鹿者ね。――蒼路、彼らは敵なの

よ。仲良く会話するべき相手ではない。闘わなければいけない相手なのよ！」

微塵の躊躇もなく深紅が言った言葉に、俺は、むっとした。
だってそれ、昨日もババアに散々言われたことだ。

「わかってるよ」

言い返す。
すると深紅は首を振った。

「そうは見えないわ。」
「っせーな、ちゃんとわかってるって言ってんだろ！」
「だったら何故、彼らと不要なかかわりを持とうとするの！」

厳しく言った深紅の、その瞳に浮かぶものを見て俺ははっとした。
純粋な嫌悪。
俺に対してじゃない、妖怪や悪霊、精霊といった類の「魔物」に対して深紅が抱く憎しみ。
俺は自分が忘れていた事に気がついた――
星師としての深紅が、ひどく冷酷だということを。

「お前は甘い。蒼路」

深紅は言った。

「すぐに人を好きになる。そして好きな人は無条件で信じ、疑う事を知らない。それは星師として致命的な事だわ」

その通りだった。

俺は返す言葉を失い、黙ってしまった。
深紅は続ける。

「そんなお前の事だわ。彼らと話をして縁を深めてゆくうちに、その状況に同情するに決まっている。あの双子を哀れんで、アンナさんを祓わないでいい方法があるのではないか、なんて言いだすでしょう。そうなればどうなる？　ハル先輩は妹に憑り殺されるだけよ」

「……」

俺は返事をしなかった。こういう深紅は大嫌いなのだ。
頭が良いだけに結果を見通して、合理的に物事を進めようとする優等生。
でも、わからないだろう、未来がどうなるかなんて誰にも。
俺達が努力すれば今この瞬間にも何か変わるかもしれない。
その可能性を、一体だれが否定する事ができる。
目の前に悲しんでいる人がいるのを、誰が黙って見てられるかっていうんだ！

「……身体は大事ないのか？」

拳を強く握りかため、やがて俺はそう言った。
深紅に対して言いたいことは山ほどあった。
残酷なお前は大嫌いだ、から始まって、俺には俺のやり方がある、まで色々。
けど、そのどれも口に出すことはせずに、俺はただそう言った。

「……何よ、いきなり。」

当然と言えば当然だが、俺の質問に対して深紅は虚を突かれた顔をした。

俺はそんな彼女を見て眼を細める。
黙っていれば普通の女の子なんだ。
とても綺麗で、少し気が強いだけの。
けど彼女はそうじゃない。
普通じゃ、ない。

「昨日、ババアが言ってた。双子の毒にやられて倒れたって」

すると深紅はこともなげに答えた。

「大したことはないわ。ハル先輩の短剣に毒が塗られていただけ。
それも微量なものだったから、もうほとんど抜けているわ。」
「そう。ならいい」

俺は頷くと深紅から離れた。
スクールバッグを肩の上で持ち直し、そろそろ教室に行こうと歩きはじめる。

「ちょっと蒼路！　話はまだ終わってないのよ！」

背中の後ろから追いかけてきた深紅の声に、ふり返らずに答えた。

「お前もそろそろ行かないと、ホームルーム遅刻するぞー」
「蒼路！！」
「――ああ、そうだ。」

俺は思い出した事があって足を止めた。
頭だけをちょっと動かして、肩越しに深紅を見やる。
まだ何か言いたげにしている彼女を遮るようにしてこう言った。

「一つだけ聞きたい事があったんだ。昨日、お前が昼休みに俺に言った事」
「なによ？」
「アンナさんがちゃんと生きた人間として、他校に通ってるって言ってた事。なんであんな嘘ついた？」
尋ねると、深紅はわずかに下を向いて逡巡した。
俺は黙って答えを待つ。
するとやがて彼女は言った。
「……お前が。きっと悲しむと思ったから」
「――そう」
じわりと、胸に広がるあたたかな感触があった。
俺は深紅から眼を逸らすと、また前を向いて歩きはじめた。
もう深紅は何も言わない。
けど俺にはわかっていた。
口ではああ言いながらも、深紅もまた、この依頼をやりにくいと思っていることを。
双子を、可哀そうだと思っていることを。
（確かに悲しい……）
俺は思った。
ハル先輩の愛する妹。彼と全てを分かち合える唯一のひと。
残された人間が何と言おうが。
アンナさんはもう死んでいる――。

侵入者

「たっかむら～」

教室では石岡が待ちかまえていた。
いや、石岡だけではない。
彼を始めとして十数人の男子生徒と、女子もちらほら。
俺はうっと身構えた。
来たな、魔物！

「さあ、説明するんだ。昨日といい今朝といい、お前が噂の美人転校生と親しげに話していたのはどういうわけだ～？」

石岡は言い、入り口で立ちつくす俺の肩に腕をまわした。
逃げようかごまかそうかうるせぇ！　と怒鳴ってみようか、俺は数秒迷ったが、変な嘘をついても後々面倒な事になると思い、結局端的にこう説明していた。

「幼馴染だから。あいつと俺。だから話してた。それだけ」
「ほほう。なんとも都合の良い設定だな」

石岡が眼を眇める。
そう言われても事実なんだから仕方ない。
俺は肩をすくめた。

「それだけか？　もういいだろ」

言いざま石岡の腕から逃れ、前に進もうとする……が。

「まだだっ」

今度は目の前にずらずらっ！　と他のクラスメートたちがしゃしゃり出てきた。

俺は一気に囲まれた。身動きが取れなくなる。

ぬ、どうしてなかなか、こいつら素早いっ。

……って、違うか。

「何なんだよ!?　お前ら一体何が目的なんだっ」

目の前の状況が理解できずに俺が言うと、敵は――クラスメートたちは、にんまりと不敵に過ぎる笑みを浮かべた。

彼らの内の一人が言った。

「ズバリ、深紅様の情報が欲しいわけよ」

俺は一瞬何を言われたのか判らなかった。

クラスメートの発言が頭の中でリフレインする。

……深紅、『様』？

様ってなんだ、様って。

あいつの一族を知るわけでもなければ星師でもないお前らが、なんであいつをそう呼ぶ必要がある。

っつーか、あいつの情報が欲しいとはどういうことだ！

聞き捨てならんっ。

「あいつの情報なんて知ってどーする」

俺ははっきりそう言った。

ついでにクラスメートたちを睨みつける。

すると彼らは口を揃えて恐ろしい発言をした。

つまり、こう言ったのだ。

「もちろんこの恋の役に立てるのさ！」

「こっ……！」

俺は絶句した。

まっ、まさかこの高校の中に、これほど凶悪な魔物がうじゃうじゃと潜んでいたとはっ！　知らなかった！

ああ、星師としてあるまじき失態！！

「さあ教えるんだ高村、深紅様のスリーサイズを！」

「好きなものと趣味を！」

「好きな男のタイプを！」

「女子もいるのよ高村くん、深紅様の得意教科！」

口々に叫んだクラスメートたちは、なるほど頬が薔薇色に染まり、瞳はきらきらと光り、幸せな恋に身をやつしているようだ……が！

「知るかーっ！！」

俺はブチ切れておぞましい魔物どもに襲いかかった！

星から火が出そうになったのは鉄の意思で堪え、代わりにゲンコツ制裁をお見舞いする。

しかし、魔物どもの先頭に立っていた男（いつのまにか石岡になってた）はすんでの所で俺の拳を交わし、逆に俺の腕を掴んだ。

俺はぐいっと引き寄せられ、石岡と息がかかるぐらいの位置で睨みあう羽目になる。

「……ふふふ、甘いな高村！　俺はこんなことじゃあきらめないぜ！」

「……上等だぜ。こっちこそ、いくら聞かれたってあいつの情報は渡さねぇからな！」
「ずりぃぞ高村！」
「そうよ高村くんっ」

外野の声に俺が今ひとたび激怒して、彼らに二度目のゲンコツをぶちかましてやろうとした、その時だった。
新たな魔物が登場した！

「――お前ら、やめんかぁぁあ！！」

……担任の永富（ながとみ）である。
俺達はたちまち蜘蛛の子のように散り散りになって逃げた。
が、運悪く石岡が襟をつかまれ、その石岡は俺の腕を掴んでいた。
――げげっ！　なんか嫌な展開パターン！！

「離せよ石岡！」
「センセ、元はといえば、悪いのは高村です！」
「俺は何もしてねぇだろ！」
「……喧嘩両成敗だ」

もがく石岡と、その手の先の俺に向って、永富は言い渡した。
その一言にあっさりと急所を刺され、俺達は揃って硬直する。
両成敗。
ってことはつまり！？

「高村、石岡！　お前ら二人揃ってグランド十周してこいっ！」

――つまり、こういうことなんだな。
俺と石岡はうなだれた。

＊＊＊

「高村ぁ～～お前もちゃんと走れよ～！」

へろへろの石岡が、ようやくグラウンドのランニング7周目に入りながらそう言った。

俺は校庭の端っこに腰かけて耳をかっぽじりながら答える。

「っせーな、俺はもう終わったっつーの」

事実である。

グラウンド十周程度ならば俺は五分もかからない。

小さいころから親父やババアに鍛えられているので体力だけは自信があるのだ。

はっきり言って並ではない。

……ま、九尾（きゅうび）の妖弧と一緒に結界張った山に放り込まれて一週間サバイバル生活を強いられたり、東京都中に潜むプロの星師を相手に鬼ごっこさせられれば誰でもそうなると思うが。

そもそも最低限の運動能力がなければ魔物相手に闘うことは愚か、逃げ回ることもできないからな。

だがそんなことは勿論つゆとも知らない石岡は、へろへろと乱れたフォームで走りながら、尚も愚痴を吐いてくる。

「なんでお前、勉強はできないくせに運動だけはそんなできんだよ～、おかしいだろ。それに元々こんなことさせられてんのはお前が原因じゃないかよ～。俺を巻き込むなよ～」

「っせぇな、俺は悪くねぇだろうが！　何度も言わせんじゃねぇよ、てめーらが深紅について聞いたりしてこなければ、こんなことにはならなかったんだぞ！」

俺は額に青筋を立てて怒鳴る。
石岡は座り込んでいる俺をうらめしそうに見つめながらカーブを通過して行った。

「鬼〜」
「何とでも言え、バーカ」

あーあ、あんなフォームじゃ百年たっても走り終わることはねぇな。
永富は走り終わったら二人で職員室に来るようにと言っていた。
だがこの様子だと石岡が走り終わるにはまだまだ時間がかかるだろうと踏んだ俺は、校庭の隅に歩いていくと周囲に人気がないのを確認して、簡単に式神と連絡を取った。
これは先日深紅と話し合って決めたことだが、授業中や放課後など、先輩を直接見張っていることができない時間帯には式神を使う事にしたのだ。
式神っていうのは要するに、パシリのことだな。
安倍晴明（あべのせいめい）が使ってたのが有名だけど、あれは鬼神（きしん）——魔物のことだ——を使役するスタイルだから、俺の式神とはちょっと質を異にする。
俺の場合、式神は作るものなのだ。
紙や葉っぱなんかに呪力を込めて、自分の意のままに操ることのできる人形を作る、という感じだろうか。
ただ当然その人形は俺から生まれたものなので、俺が知らない場所には行けないし、意思も持たない。
が、だからと言って星師の全員がそういう式神しか持っていないというわけではない。
たとえば深紅の青藍は召喚獣ではあるものの、彼女の命によっては式神としても動くので、式神の一種といえよう。

深紅のように魔物を折伏し、使役する――この術を俺達は「召喚」と呼ぶ。

更に、それができる奴は召喚師と呼ばれて重宝される……まあ、呼び出せる魔物のレベルによっては重宝されない召喚師もいるが。

――話が長くなった。巻き戻そう。

ともかくそういうわけで俺はハル先輩の元に送っていた式神と呼びもどし、その安否を問うた。

答えは安。彼は大人しく教室で授業を受けているらしい。

アンさんの気配はしないようだ。

眠っているのかもしれない。

「了解。サンキュ」

俺は手のひらの上の式神に礼を言うと、再び息を吹きかけてハル先輩の元に戻した。

ノートの切れっぱしで作ったその身体は、ひらりと一瞬風に乗ったかと思ったら、次の瞬間にはもう消えていた。

「お～い、高村どこだ～、終わったぞ～」

お。

どうやらやっと石岡が走り終わったらしい。

グランドの方から俺を呼ぶ声がする。

校舎の脇の影にしゃがみこんでいた俺は、立ち上がると背伸びをし、ぎらぎらとした日差しの照りつけるグランドに戻ろうと歩き出した。

――その時。

「！」

俺はぴたりと立ち止った。
突如として精神に触れた、強力な邪気を感じたからだった。
はっとして首を動かしたが、そこには何もいない。
ただ萎んだ朝顔のつぼみがフェンスに絡みついているだけだ。
しかし、俺は右手の星が痛みだすのを感じた。
ということはやはり見間違いじゃない。
――魔物だ。
今度は本物の。

「おい、高村。どうした？」

立ちつくしていると、やがて石岡が俺の姿を見つけて走り寄って来た。
息をぜいぜい切らして汗まみれである。
俺は彼の眼を見返すと答えた。

「……いや。何でもない」

多分今の俺はかなり真面目な顔になっていると思う。
足もとからじわじわと緊張感が這い上って来て、身体が星師として戦闘態勢を整え始めるのがわかった。
……白昼の学校に魔物。
その状況がもたらす緊迫感が、胸に暗雲を投げかける。
今までならあり得なかったこと、というよりも、あり得てはいけないことだ。
アンナさんという悪霊の場合、その狙いはハル先輩という一点に絞られているが、他の魔物はそうではない。
場合によっては彼らは見境なく人を喰らい、危害を加えることがあるのだ。
――星師の俺がいるのに……

俺はくしゃりと前髪を掻き乱した。
イライラしていた。
星師というのは五芒星を身体の上に持っているため、その存在そのものが一つの魔除けであり、魔物を弾き返す結界といえる。
にもかかわらず魔物に侵入されたということは、入ってきた奴はそんじょそこらの小物ではないということだ。
防げなかった。
つまりこの身は、今の俺の力は、所詮その程度のものということだ。

「畜生……」
「おーい、ホントにどうした高村」

思わずうつむいた俺の顔を、石岡が覗き込んだ。
日焼けしてない生白い顔の中で、澄んだ眼が俺を心配しているのが見える。
……駄目だ、しっかりしろ。
俺は自分で自分を叱咤した。
侵入されたなら、追い返してやればいいだけのことだろう！

「……悪い」

俺は言った。
色々な意味での謝罪だった。

「でも俺、ちゃんとやるから」
「は？　何を？」

石岡はキョトンとしたが、俺は彼の問いには答えず、ポケットに手を突っ込んで歩き出した。

「おい！　高村～？」

追いかけてくる石岡の声に心の中でだけ答える。
大丈夫だよ、ちゃんとやるから。
俺、ちゃんと守るから。お前のこと。
みんなのこと。
巻き込んだりしない、一人だって、傷つけたりはしない。

「高村、待てよ、何かヘンだぞお前！？」
「べーつーに。それよりお前、遅い。早くしろよ」
「殺生だな～、あんだけハードなランニングの後で……」
「どこが。あんなの屁でもないじゃん」
「お前、ほんとに人間か！？」

石岡と言葉を掛け合いながら昇降口の方に歩いていくと、また星が痛んだ。
同時に背後から刺すような視線を感じて振り向く。
さっきは見えなかった、けれど今度は捕えた。
上空(うえ)だ。
屋上の、フェンスの上に、見事にバランスを取って立つ巨大な獣。
――黒妖犬(こくようけん)か……！
俺が視線を合わせると、その犬は緋色の瞳を細めて笑った。

黒妖犬

――すごい妖気だ……

俺は身体じゅうに汗が噴き出すのを感じた。

黒妖犬。

人を喰らい、その血肉によって妖力を得た狼だ。

ゆえに人を極上の餌とし、その肉を得るためには何でもする、妖怪の中でもやっかい至極な食人鬼の類。

――こんなのが学校の中で暴れたら

俺はぞっとして背後の石岡を窺い見た。

真っ赤な血の海のイメージが脳裏を占拠する。

教室の中から溢れて、窓から校庭へ、廊下から校舎中へ、あふれて飛び散る友達（みんな）の血。

――守らないと……！

ぐ、と右手の星に念を込めた瞬間、思考に触れてきた声があった。

（……が……った……）

はっと顔を上げる。

緋色の瞳が俺をはっきりと捕え、その身の内に荒ぶる意思を伝えてくる。

（腹が、減った……！）

黒い毛並みが抑えきれない欲望に逆立ち、ざわりと無数の触手のように蠢く。
俺は堪え切れなくなり、ぱっと石岡をふり返ると、叫んだ。
「悪ぃ石岡！　先に行っててて！」
「……は？」
彼はまさしく鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしたが、とにかく俺はここから離れて一人にならなければいけなかったので、そのまま走りだすと石岡を引き離した。
「おいっ高村、逃げんのかよ！？　ひきょう者―っ！！」
背後から、そう絶叫する石岡の声が聞こえたが、無視した。
……ごめん、石岡。
俺は内心で滂沱の涙を流しながら（いや、マジで）全力疾走し、校舎の裏側へと入って行った。
朝顔のグリーンカーテンを通り過ぎ、スイカの畑を飛び越えると、校舎からは窓が消える。この辺りは教室棟ではないのだった。
俺は窓がない場所を見極めると地面を蹴った。
そのまま懐から鉤縄（かぎなわ）――先端に爪のついたザイルみたいなもんだ――を取りだすと、ひょいと校舎の屋上へとひっかける。
一瞬後にはぐんっという強烈な重力が腕にかかり、俺は校舎の壁に縄一本でぶらさがっている形になった。
そのまますると縄をつたい屋上まで昇ってゆく。
やがて目の前に登場したフェンスをすたんっと鮮やかに飛び越えると――とたん、ものすごい威圧感がこの身を襲った。
「っ」

俺はとっさに両腕で顔を覆った。
それほど強烈な邪気が俺の方に吹き付けてきていた。
眼に見えないのが不思議な程だ。
どろりと重く、濁ったその黒い力が辺り一帯に滞り、闇の温度を発している。

『……腹が減った……』

闇の中心に、それを発しながら坐していたのは先ほどの黒妖犬。
こうして間近で見ると本当にデカい。
屋上のほとんどを埋め尽くすようにして座り込み、その状態だけでこちらが圧倒される程の邪気を発している。
針金のように強(こわ)い体毛に覆われた身体はやせ細ってはいるものの、緋色の瞳は深い知性を湛え、生への渇望に輝いている。
毒々しく赤い口許が物欲しげに半ば開かれ、その口内には俺の指ほどもある牙がびっしりと隙間なく生えているのが見て取れた。

『腹が減ったぞ、星持ちよ……』

黒妖犬の声は地鳴りのように俺の身体を揺らした。
ざざっ、と、全身が鳥肌立ち、急速に体温が冷えていくのがわかる。
俺はひとつ、腹から息を吸い込むと吐きだして、両足をかるく広げると踏ん張った。
腹に気をこめて対峙しなければ、意識だけでこの妖怪には負けてしまう。

「ここから、出ていけ」

俺はゆっくりとそう言った。

同時に右手を掲げ、星からずるりと刀を引き抜く。
焔を伴って出現した刃が闇を焼き、俺の周囲だけわずかに空気が暖まった。

「――出ていかないと、お前を殺す」

いま一度念を押して、刀を構えた。
そのままじわじわと脅迫するように星の力を刀に移してゆく。
が、黒妖犬は答えない。
ただ、青く光る俺の星をじっと見つめ、緋色の眼を嬉しそうに細めている。
そこで初めて妙だな、と俺は思った。
――これだけ腹が減っているというのに、何故すぐに襲いかかってこないのだろう。
そもそも、黒妖犬は山に棲む妖怪だ。
腹が減ればすぐ傍の人間を捕えて喰えばすむ話だというのに、何故わざわざこの学校までやってきたのだ？

『……星持ちの肉……』

考えていると犬がようやく口を開いた。
俺は刀越しにその瞳を捕える。

「なんだと？」
『うれしやのう……極上の餌である人間の、更にその中でも強力な霊性を宿した星持ちの肉……この身に力を取り戻すにはふさわしき獲物よ』

そして彼は（雄だと言うのは何故かわかった）、ゆっくりと立ち上がった。

がりりと、金属が固いものをひっかくような音が立つ。その爪が地面をこすったのだ。
夏の太陽の光に、しろがね色の爪が反射して輝き、彼は僅かに身を屈めた――俺はとっさに構えた。
来る！
『――我は星の匂いに誘われてここに罷り出た』
その瞬間、何が起こったのかわからなかった。
犬がまったく重さを感じさせない動作で地を蹴り、飛んだところまでは見えた。
が、その後、自分が刀を振り下ろしたかどうか覚えていない。
気がつけば俺は、黒妖犬の前足の下敷きになっていたのだった。
「……ぅあっ……！」
驚いた。
デカイ図体して、なんて早さだ。
みしみしと身体がきしみ、胸と腹の数か所が焼けるように痛い。
あのしろがねの爪が喰いこんでいるのだと、見なくてもわかった。
『ほう。我が一撃を喰らっても生きているとは。坊主、なかなかの力を備えているな。どうりでうまそうな匂いがするわけだ』
「……なせ、よっ……」
犬の前足を避けようと俺はもがくが、このとんでもない大妖はびくともしない。
彼は俺の顔に鼻面を寄せてくんくんと匂いを嗅いだ。
『だが、お前ではない。もっとうまそうな匂いがする。もっと強い

――もっと甘い匂いが』

「……！」

俺は驚愕に眼を見開いた。

聞き捨てならないセリフだった。

この学校で俺以外の星師なんて、もちろん一人しかいない。

『星持ちの姫』

心臓の鼓動が跳ね上がる。

その動揺を、犬は悟った。

俺をまんじりともせず見下ろしている緋色の瞳に、狂喜が躍った。

『やはりここにいるのだな……！』

「……離せ」

俺は低く言った。

激怒に近い怒りが体内を走り抜ける。

身体の上を抑えつけている黒い前足を右手で掴むと、そのまま怒りに任せて焔の術を叩きつけた。

「――離せって、言ってんだよっ！！」

じゅうっという音と共に、動物性の物が焦げる嫌な匂いが広がった。

犬がとっさに前足を退き、俺はその隙に飛び退る。

途端に口許にこみあげる物があり、思わず吐いた。

びちゃびちゃと音をたてて、真っ赤に染まった胃の中身が地面に飛び散る――内臓に傷が付いたらしい。

俺は喘ぎながら腹に右手を押し当てた。星印には、最低限の治癒

能力が備わっているのだ。

『……この小僧……我の毛皮を燃やすとは……！』

犬の声が怒りに染まってゆく。

見ればその全身の毛が針のように伸び、縮んで、生き物のように蠢いている。

俺は空いた左手で刀を捕え、それを地面に突き刺した。

焔の力が地面に走り、びしびしと表面に亀裂が走ってゆく。

「……犬っころ」

俺は言った。

息を吸い込む合間合間に、空気が漏れるひゅうひゅうという音が漏れる。

だがいつまでも座ってはいられない。

ぐっと、左手で刀を強く掴むと、立ち上がった。

「深紅に手ぇ出してみろ……」

星持ちの姫。

それはすなわち、俺の幼馴染であり、この命かけて守ると決めた彼女のことだ。

「――ぶっ殺してやる！！」

吠えた瞬間、犬の毛束がひと房、ムチのようにしなりながら振り下ろされた。

が、その時にはもう俺も跳んでいる！

右手で犬の毛束を叩き落とすようにして振り払う。

漆黒の毛束が瞬時に灰と化し、地面に落ちるのを尻目に、上空から犬目がけて切り込んだ。

『調伏（ちょうぶく）の焔……小僧の分際で、なんという力……！』

驚愕に見開かれた緋色の双眸が眼前に迫る。

間近で見るそれは、遠くで見るより遥かに澄みきって美しい。

俺は犬の背中に斬り付けた！

だが、鋼のように固い体躯は俺の刀を受け付けず弾き返す。

反動で俺も吹っ飛びフェンスに叩きつけられそうになったが、すんでのところで宙返りして回避した。

ざざっと制服の膝が地面を擦れ、熱が走った。

「……お前、ただの黒妖犬じゃねぇな」

俺は刀の刃を指で撫ぜながら言った。

「星師の刀を刃こぼれさせるなんて、並の妖怪にはとてもできる芸当じゃねぇ」

『……フン。思いあがった星持ちの小僧が、何を言いたい』

犬の尾がぴしりと地を打ち、それだけでも地面が揺れる。

俺は犬の眼を見据えた。

そして――刀を納めた。

「何をしに来た」

犬が、瞳を丸くするのが見えた。……お、虚を突かれてる。

その眼をまっすぐに正面から見据えて、俺は更に言う。

「いや、何があった、が正しいか。……お前のその力、俺達星師の保護を乗り越えてこの学校に入り込めたところからしてみても、少なくとも土地神か鎮守神（ちんじゅがみ）の位。にも関わらずそれほど痩せこけ、俺達星師を喰おうとしている。どう考えても尋常じゃない」

『……ほお』

犬は尻尾を打ち振って、嫌味たらしくそう口の端を吊りあげた。

『見かけと違って頭は悪くないようだな、小僧』

明らかに馬鹿にしているその言い草に俺は思わず突っ込んだ。

「どういう意味だよ、この犬っころ！！」

『犬ではない。狼だ』

犬はゆっくりと立ち上がると、四肢を伸ばして身震いした。

すると先ほどまで蛇のように蠢いていた毛並みの触手がぴたりとおさまり、普通の獣と同じような、けれど黒曜石の如く艶やかな毛並みへと変化する。

俺は犬の影に呑まれながら茫然とその姿を見上げた。

……かなり場違いだが、綺麗だと思った。

――こんな痩せて、こんな綺麗なら、健康なこいつは一体どれほど美しい姿をしているのだろうと。

『確かに我は、かつてこの界隈の山を守護した鎮守神であった。だがそれも今は昔の話よ。今の我には力がない。ゆえ力が必要なのだ、小僧よ。長きにわたる眠りの間に、失ってしまった力がな』

犬は瞳を細めて言った。

俺は眉をひそめた。

「だからって、人を喰うな。神としての誇りはないのか？　人を喰えばその時点で、あんたは闇の道に落ちるんだぜ」
『もう遅いわ。我は既に妖（あやかし）と化しておる』

犬は自嘲するように笑ってそう言った。
俺ははっと顎を上げる。
ということは――！

「おいっ、ってことはもう喰ったっていうのか！？」
『……案ずるな。最後に人を喰ろうたのも、もう遠い昔の話よ。』

そう言って再度笑う。
低い声が銅鑼のように重く辺りの空気を揺らした。
犬はわずかにあぎとを開き、くつくつを身を震わせるようにして笑っている。
その様子を見上げながら、俺は、魔物が笑うのを初めて見たと思った。
そしてそれは中々悪いもんじゃないのかもな、とも思う。
ババアや深紅が聞いたらまた甘いとかなんとか言われるに決まっているが、あるいは――
あるいは魔物でも笑えば、闇に生まれついたその性質を違えることもできるんじゃないか、と。
そう思った。
瞬間だった。

「ずいぶん楽しそうね」

凛とした声に、背筋が凍りついた。
ばっとふり返ると、その人はいつのまにか、給水塔の上に腰をお

ろしていた。
あまりにも無防備なその姿に、俺の全身をぞわりと恐怖が包み込む。
咄嗟に叫んでいた――来てはいけない、と。
だが俺の見る者を、背後では黒妖犬もまた同時に目にしていたのだった。
声も無く、彼が歓喜するのがはっきりとわかった。
俺は立ちあがろうとした、だがその時にはもう、頭上を黒く巨大な影が通り過ぎて行った。
完全に間に合わない。
足がまるで鉛になってしまったかのように感じられた。絶望的に前へ進むことができない。
重い手足をひきずるように走り出し、俺は声を限りに咆哮した。
「深紅――!!」

心配

『捕えた、捕えたぞ――』

黒い彗星のごとき犬の影が、深紅目がけて突っ込んで行く。

俺は喉が潰れるかと思った。

だが自分がそれほど声を上げている事にも、この時は気づかなかった。

『捕えたぞ、星持ちの姫――！！』

妖犬の歓喜の声が屋上を取り巻く空気を揺らす。

俺は物事の全てがスローモーションで進行してゆく錯覚に陥った。

まんじりともしない深紅、その柔肌にぴたりと狙い定めたしろがねの爪、そして、何よりも凶悪に開かれた紅い口。

端から泡を吹き、びっしりと隙間なく並んだ牙をむき出しにしたそれが――

深紅の小さく美しい姿を一呑みに――

「犬畜生が」

え？

俺は眼と耳を疑った。

「誰に向って物を言っている？」

深紅が――笑ったのだ。

紅い唇の端を吊り上げて、艶やかというよりは、残忍に冷たく。
そして立ち上がった。
俺よりも早く、妖犬にさえできない速さで。
驚いたなんてもんじゃない――それはほとんど脅威だった。
圧倒的な戦闘センスと強さ。
呪を唱えることすらせずに青藍を召喚し、彼が飛翔した時には既に手の上に新しい術を載せている。

「私たちはお前などに構っている暇はないのだ、忌々しい魔物よ！」

青藍が猛々しく吠え、低く角を構えた姿勢で妖犬めがけて突っ込んでゆく。
俺は肌が鳥肌立つのを感じた。
彼は――彼も、容赦がない。当たり前だ。
主人である深紅が魔物を激しく憎悪しているのだから、その召喚獣である青藍に情けなどあろうわけもない。

――畜生、俺、間違ってた！

俺は舌打ちをした。心配すべきは深紅じゃなかったのだ。
妖犬だったのだ！
いま一度星から刀を閃かせる。
妖犬が鋭く叫び声を上げたのが聞こえる。青藍の角が前脚を裂いたのだ。
瞬間、わずかに動きが鈍った漆黒の体躯めがけて放たれたは銀の針。

――あれは交わせねぇ！！

大体、空中戦は俺には不得手だっつーの！

イライラしながら俺は走り、加速をつけると、強く強く地面を蹴り、妖犬の前に飛び出した。
視認できるだけの毒針を刀で叩き落とす！
余りはしょうがないから制服の袖で受ける！

『え、ちょ……蒼路――っ！！？』

青藍が驚愕に眼を見開いて、身の動きを留めようとする。
俺はかすかに笑った。無理だろ。
だって目の前のこの角には、もう十分に加速と重みが載っている。

「受けるぜ。青藍」

両手を広げて俺は見据えた。
稀なる青い鹿と、その背後に控えた彼の主人を。
鋭い角の切っ先が腹に到達する寸前で、呆れたように見開かれた深紅の瞳と瞳が合った。
彼女の唇が開く。
なにか言っている。叫ぶような大きな口で。
けど。

（――駄目だ、もう、聞こえねぇ……）

『小僧……！？』

というわけで、俺は妖犬を庇い、青藍の角に刺された。
そしてさっき犬から喰らった怪我もあいまって、そのまま意識を手放した。
ダサいな。
でも、ちっと無理しすぎたわ。

鎮守神レベルの妖怪と、深紅が相手じゃ……いくらなんでも分が悪すぎだ。

というわけでゴメン。ちょっと寝る。

＊＊＊

――……て

泣いている。

誰かが、とても、悲しんでいる。

――……どうして

ああ、そういう声、俺ダメなんだよ。

可哀そうすぎて、聞いていられない。

なぁ、泣くなよ。何があったか知らないけど。

――どうして、あたしのせいなのに……！

おいおい、だから、泣くなってば。

それだけ苦しんでるならもういいじゃんか。

何が起きても。

なにがあっても。

俺達は何回だって、やり直せるんだから。

――怖いよ

……え？

――怖いよ、蒼路……！

あ。

何だ。この声、もしかして。

「深紅……？」

そこで俺は眠りから醒めた。

自分で自分の声に起こされたのだ。

ぼんやりとした思考に現実という外界が割り込んできて覚醒を促す。

まぶたを開けると、薄暗い天井が見えた。

それから鼻腔をついた薬品の類の匂い。

どうやらここは医務室で、俺はベッドに寝かされているらしい。

訳もなく大きくひとつ息を吸い込んだ。

そして吐きだしながら首を僅かに横に巡らすと。

「……深紅」

なんだか強張った表情の、彼女と。

「れ、ハル先輩……？」

そう、先輩が、並んでいた。

俺は思わず起き上がろうとしたが、その途端内臓を走り抜けた激痛に身体を折った。

はうっ……痛ぇ、超痛ぇ……！！

さすが青藍、深紅の僕（しもべ）、とか思いながら身を震わせて痛みに耐えていると、横から呆れたような声がかかった。

「馬鹿だなあ。肋骨骨折、内臓損傷、おまけにベラドンナまで盛られちゃって。普通の人間なら死んでるとこだよ。あんまり校内でてれつな怪我をするのはやめてくれないか、面倒至極なことになるから」

「……は、ハル先輩……なんでここに」

俺は涙目になりながら先輩を見やった。

だって近づくなとか言ってる癖に、向こうからやってくるなんて変じゃないか。

すると先輩は嫌味たらしく腕を組んでため息を吐いた。

「君を見舞にきたわけじゃない。むしろ逆だ。注意しに来たんだよ」

「注意って、何の」

「忘れたのかい？　僕は今学期まで現役の生徒会長。校内の平和を守る義務があるんだ」

「平和っすか……」

「そう。白昼の屋上で堂々と魔物とチャンバラやられてみろよ、校内は大地震だ世界の終わりだって大騒ぎだったんだ。なんとかごまかしたけど」

は。そういえば。

俺、妖犬に気を取られるばっかりで、学校が授業中だってことぜんぜん考慮してなかった。

……でも、それを言うなら昨日の放課後の一件だってかなりやばいと思うんだが。

俺は思ったが、ハル先輩はそれを指摘する前にはもう身を翻していた。

「とにかく、死亡ニュースにならないように戦ってくれよ、誇り高き星師さん」

「い……嫌味！」

俺は痛みとはまた別の意味合いで身体を震わせた。
ほんとうに、なんてむかつく野郎なんだ！
が、罵声を吐こうにも身体が痛いし、そもそも先輩はもう行ってしまっていた。諦めるしかない。

「……っだよ、相変わらずむかつく奴……」

俺はため息を吐きだすと、改めて横の深紅を見やった。

「なあ？　深紅」

深紅は答えなかった。
それどころか深く俯いて、膝の上で両の手を固く握りしめたまま微動だにもしない。
俺はいぶかしんだ。

「おい、深紅？」
「……鹿」

小さな声が耳朶を打った。
俺は可能な限り身体を彼女の方に傾けて、耳をそばだてた。

「え？」
「……馬鹿って言ったのよ……」
「バカ？」

俺はその言葉を復唱した。
まさしく青天のへきれきである。

俺は確かにバカかもしれないが、何故このタイミングでそれを言われるのかわからない。
小首を傾げて頭を掻いた。
その瞬間。

「――蒼路ッ！」
「はい！？」

怒鳴られた。
反射的に答えてしまった。
いつも通り、姿勢まで正して彼女を見つめる。

「お前を、ここまで馬鹿だと思ったことはない」
「は、いや、あの？」
「黙って聞け！！」

凄まじい一喝であった。
……何でかわからんけど本気で怒ってる。
俺は従わざるを得なかった。
わずかな沈黙が流れ、深紅がゆっくりと息を吸い、そして吐いた。
彼女は言った。

「……再会してからのお前を見て気付いた事がある。お前の戦い方の無謀さ。その精神の甘さ。何よりも、己の力量も推し量れない愚かしさよ」

深紅の声は低く、何か感情を押し殺すようにかすれていた。
この声、さっき聞いたばかりだ、と俺は意識の片隅で考えた。
夢の中で。とても遠い場所で。
深紅は、泣きじゃくっていた――。

「はっきり言って、今のお前では一人前の星師にはなれぬ」
「……は？」
俺は止められたのに声を上げていた。
さすがにカチンと来たのだ。
「なんでだよ」
眉を吊り上げて問う。
すると彼女は立ち上がった。
寝ている俺は彼女に見下ろされる格好になってしまい、再びその存在に威圧感を覚えた。
深紅は恐ろしく冷たい眼をしていた。
氷のような怒りを浮かべた瞳で俺を見据えていた。
「わからぬか？　お前、このような戦い方でこの先、どのようにして生き残って行くつもりなのだ！　お前は自己を省みない。そのくせ自分勝手に突っ走って、満身創痍になっておる。……私はな、その態度に腹が立つのじゃ！」
「……はあ？」
わからない。深紅の言いたい事がさっぱりわからなかった。
はっきりと核心を突いてくれればよいものを、なにを湾曲的な表現ばかり使っているのか。
俺は思った。
なので、はっきりとこう言った。
「意味わかんねーし。はっきり言えば？」
「――……」

間があった。
深紅が黙った間だ。
彼女の、元々白い顔がさらに紙のように白くなり、それから一気に紅潮した。
深紅はまぶたを一度閉じて、一瞬のちに勢いよく開いた。
同時に振り上げられた右手が俺の視界の端をよぎった。

――ばちぃんっ！！

マンガの効果音のように良い音をたてて、彼女のビンタは俺の頬を直撃した。
瞼の裏に星が炸裂する。
あまりの衝撃に全身が痛んだ。もちろん傷には相当響いた。

「……！！」

どこもかしこも痛くて悶絶する俺を尻目に、深紅はさっさと出て行った。怒鳴りたいが到底できない。さっきと一緒だ。
なんなんだ。
何なんだよ、みんなして！

『あ～あ、君、幸せもんだねぇ……』

今度こそ涙を流して呻いていると、ふいに今まで無かった気配が登場して、俺は顔を上げた。
もう誰が来たって驚きゃしねぇぞ。そう思って見てみると。

「……何してんのアンナさん」
『やあやあ』

幽霊の彼女が、ベッドの端に腰かけて笑っていた。

「なんでここにいんの、アンナさん。ハル先輩ならもう行っちゃったよ？」

俺が医務室のドアの方を振り仰ぎながらそう指摘すると、アンナさんは緑の眼をいたずらっぽく瞬いて答えた。

『勿論、わかってるわよ？　だから出て来たんだもの』

「どういう意味？」

『待ってたって意味。ハルと、あんたのこわーいお姫様がいなくなるのを』

緑の瞳が猫のように細くなった。あ、笑ってる。

笑った顔、いいな、と思ってから、俺はやっぱり信じられなくなる。

――この人が幽霊だなんて。

目の前にいるのに、もう、死んでしまった人だなんて。

（神様……）

柄にもなく祈りたくなってしまった。

あなたは何てひどい。

胸が苦しくなって、緑の眼から眼を逸らした。

「……つうか悪霊さん、兄貴の傍にいなくていいわけ？」

『何言ってんのよ。離れられる時ぐらいは離れておかないと、ハル

に負担がかかっちゃうじゃない』
「いや、自分の意思でどうにかなる問題なのかよ！？」
思わず突っ込むと、アンナさんは僅かにほほ笑み、長い脚を組んだ。
くっきりと彫りの深い顔に浮かぶものを見て、俺はどきりと胸を突かれた。
そのエメラルドの瞳。
切なくて――そして、なんていうんだろう。
寂しい？
……ああ、そうだ。
とても寂しそうな、この彼女のまなざし。
『蒼路、だっけ』
「え？　うん」
名前を呼ばれて素直に首肯する。
すると彼女は眼を細めた。
『あんた、姫様のこと好きでしょ』
「――なッ！？」
俺は一瞬で真っ赤になったと思う。
血が沸騰した気がした。いや、錯覚じゃない、ぜってーそうだ。
畜生、そんなしおらしい態度で、いきなり何を言い出すかと思えばっ。
「す、すすす好きなんかじゃねーよっ！　勝手に決めんなよっ！！」
絶叫して否定した。途端、また傷に響いた。

ぎゃっ！

たちまち身体を二つ折りにして悶える俺の耳に、愉快そうなアンナさんの声が届いた。

『あっはあ、ビンゴ！　良いわね～、青少年』

「ち、違うって言ってんだろ！！」

俺は呻きながらも顔を上げて精いっぱい否定し続けるが、アンナさんは顔の前で人差し指をちっち、と左右に振って言った。

『ごまかしても無駄よ無駄。あんた、わかりやすすぎだもん。いいじゃない、お姫様、綺麗だし。ちょっと気が強そうだけど』

「ちょっとどころじゃねえよ」

痛みに耐えながらもそこは思わず訂正してしまう。

するとアンナさんはまた笑った。

……良く笑うひとだ。

『あはは。確かにね。魔物には容赦ないみたいだしねぇ。さっきの黒妖犬も、あんたがいなきゃ間違いなく殺されてたわ』

「え――見てたの？」

アンナさんの意外な発言に俺は眼を見開いた。

驚いた。さっき屋上には俺と深紅しか星の気配はしなかったと思ったが。

『見てた。というかハルがね、見に行ったのよ。昼間っから校内を騒がせてけしからん！　って言いながら。まあ、行ったら丁度君が倒れてたところだったんだけどさ』

「うわー」

あの醜態を見られていた、と知って俺は頭を抱えた。恥ずかしい！
仮にも星師が魔物を庇って、しかも同じ星師からの攻撃に倒れる、なんて。
ババアが聞いたら末代までの恥、とかなんとか言うに違いない。
俺だって――あんまり褒められた行動じゃないことは自覚している。
けど……身体が勝手に動いちまったんだ。
あの犬、理由はわかんねーけど、腹ペコだったみたいだし。すごく痩せてた。
そんな状態の妖怪を手にかけるなんて、良くないことのような気がしたんだ。

『ね、蒼路ってさ。優しいのね』
「……は？」

アンナさんが身を乗り出してきてベッドに肘をついた。また笑っている。
その表情に、俺はやや斜に構えて問い返した。
近頃、甘いだの優しいだのって悪い意味で周囲から言われ続けているもんだから、俺はその言葉に対して懐疑的になっていた。

「自覚してるよ。最近みーんなに注意されら！　お前は甘い、優しすぎる、とかなんとか」
『え？　何言ってんのよ、あたし、褒めてんのよ？』
「――え？」

また眼を瞬いてしまう。……なんかアンナさん相手だと、このパターン多いな。
言動の予測が付けづらい人だからだろうか。

彼女は続けた。

『びっくりしたよ。今まで、魔物を殺した星師ならそれこそ星の数ほど見てきたけど、助けた星師は一度だって見た事無かった。しかも、あんな風に身を挺してさ……ちょっと感動しちゃったもの』

「……いや、そんなに、格好良いものではない、と思う」

率直な感想を述べられ、照れた俺はもごもご口の中で呟いたが、アンナさんはそれをばっさり否定した。

『格好良かったわよ！　あたしはそう思ったもの。それに多分、あの犬もそう思ったと思うわ。あたし達が屋上にかけつけた時にはもう飛んでいくところだったけど、振り向いてあんたの姿をちらちら見てた。気になっている様子だったわよ』

俺はそんな妖犬の姿を想像した。

青空を飛翔する美しい身体が、戸惑ったように空に浮かんで、学校を見下ろす様子を。

そしてぽつりと呟いた。

「無事だったのかな」

『わんちゃん？』

「ウン。腹ペコで、弱ってるみたいだったから、気になって」

『……大丈夫よ、多分ね。あれだけの妖怪なら、餌は自力で取れるでしょう』

アンナさんは頷くと、優しい声でそう言った。

俺も勇気づけられて、そうだね、と首肯した。

なんともいえない沈黙が落ちる。

俺は、ヘンな意味じゃなく、アンナさんを好きだと思った。

明るくて情に厚い。
良く笑う、ユーモアのある人。――太陽のような。

「アンナさんて」
『何よ』
「太陽みたいだ。ハル先輩は冷たいのに。似てないね、双子なのに」
『ハルも、本当は優しいのよ。ただ君たちの事は――ちょっと、訳があって。ごめんね。ゴキブリ見るみたいな眼で見てるけど』
「ゴキブリ……」

あまりといえばあまりの比喩に俺はがっくり項垂れてしまったが、アンナさんの言葉のなかに引っかかるものがあるのに気づき、直ぐまた顔を上げていた。
そうだ、今しかないじゃないか。
アンナさんにそれを聴けるのは。

「アンナさん」
『なに？』
「教えてほしいことがあるんだ」

俺は単刀直入に尋ねた。
アンナさんの緑の瞳に理解の色がよぎったのがわかる。
俺はそこでああ、と思った。そうか、彼女も。
アンナさんも――それを話すためにここに来たんだ、と。

『……ハルが星師を憎む理由？』

彼女の表情が翳ったのが胸にこたえたけれど、俺は知らなくてはならなかった。この人を助けるために。
この人の兄を、救うために。

「そうです。それから――」

だから言った。とても残酷なひとことを。

「――それから、あなたが死んだ理由も」

アンナさんは、ただ笑んだ。

アストリア

そしてアンナさんは語り始めた。
長いながい彼女の物語を。

『どこから話そうかしら。そうね――まず。
あたし、ハルが大好きなのよ。
もちろんヘンな意味じゃないわよ。きょうだいとして、家族として。
あたしたちは男女の双子としては多分、規格外の仲の良さだったと思うわ。
って言っても、仲良しになったのはつい最近だったんだけどさ。
中学生くらいまでは死ぬほど仲が悪かったの。お互い憎み合ってたぐらいで。
どうしてかって？
だって、あたしたち双子でしょ。双子って、いつも周りからワンセットで扱われるのよ。
双子だから一緒にしましょう、同じ服を着せましょうって。ふざけんなって感じよね。
何よりあたし達、半星だったし。
――あ、言い忘れてたけど、うちって歴代の星師の家系なのよ。
外国では星師のことアストリアっていうのよ。知ってるでしょ？
え、知らない？　……蒼路って、面白い奴ね。
とにかくね、うちはグランパもグランマもパパもママも、みいんなアストリア。
だもんで、あたしとハルが生まれた時は相当がっかりしたみたい。
だって、よりによって半星よ？
半分の力しか持たない異端児が二人もじゃあ、そりゃ一族のお荷物よね。いっそ星を持たないで生まれたほうがどれほど楽かという

ものだわ。
　でもあたしたちは生まれてしまった。半星を分かち合う双子として。
　でもどうにかしてあたし達をアストリアにする方法はないか――親はこう考えたのよ。だって、アストリアしか生みだしてこなかった家だもの。他のなにか、パン屋さんとかさ、スチュワーデスとかにしようなんて思いもよらないわけ。
　でも半分の力しか持たないのでは到底戦えないでしょう？　すぐに死んでしまうのがおちだわ。
　親は始めは諦めようとした、って言ってた。
　でもね、まずいことに、あたしとハルは、半星としてはかなり強い力の持ち主だった。それこそ弱いアストリアと同じくらいには、二人とも力を備えていた。
　だから二人で一緒に戦えばいい――親はこう判断したのよ。
　……そしてあたし達は双子のアストリアになった。
　世間様からは受けが良かったわ。珍しかったんでしょうね。けっこう、有名なのよ。あちらでは。
　あたしたち途中で解散しちゃったし、日本にはほとんど帰って来なかったから、こちらでは全く知られてないと思うけど。
　そう、解散、したのよね。中学を卒業と同時に。
　もういやだって言いだしたの。ハルが先に。
　あたしはね、嫌い嫌いって言ってても、心のどこかではハルをやっぱり大好きだったから、言わなかったけど、向こうに嫌だって言われたらカチンとくるじゃない？
　大げんかしたの。
　あたしはアストリアの仕事を続けたかった。誇りを持っていたからね。
　誰かの力になれることが嬉しかったし、笑ってくれると自分の存在を認めてもらえるような気がして、ほっとしたの。自己満足だけれど。

けどハルはまじめだったし、星以外にやりたいことがたくさんあった。

というよりも、星を憎んでいたのね。

あの子、チェロを弾くの。知ってるでしょ？

とても良い音を出すのよ。

……チェリストになりたいんだと思う。本人はけしてそう言わないけれど。

だからハルにとっては、星なんて邪魔な烙印でしかないのよ。

とにかく、ある時から彼は、もう絶対にアストリアはやらない！の一点張りを始めたわ。

で、あたしと絶交して。

あたしはひとりでアストリアをやり始めた。

はじめはうまく行っていたのよ。

あたし、言ったように結構強かったし。

なにより空間支配能力を持っていた。

わかるでしょ。日本で言う、空間師の力を備えていたの。

半星なのにアストリアができたのも、この力を持っていたからって所が大きいでしょうね。

ご存じの通り、空間師の絶対数はとても少ない。だからいくら半星の双子でも、あたしたちは重宝されたの。

あ、勿論ハルも空間師だったわよ。

はじめてあんたと姫君に会った時、結界張って威嚇したでしょ？

あれ、あたしとハルが張った結界だったの。

……で、どこまで話したっけ？

ああ、そうそう。ハルと別れてあたしは一人でアストリアをやり始めた。

はじめは上手く行ってた。ハルがいなくても。

でも一年ぐらいたって——あたしはその頃、イギリスのハイスクールに通い始めていたんだけど——なんか、身体がおかしくなったのよね。

こう、きしむっていうか。
星を使うと、身体じゅうが痛いの。
病院に行ったけど異常はないって言われたから、気のせいかなって思って、そのままアストリアは続けたけど。
お決まりの展開が待ってたわ。
いっこうに、身体は良くなる気配がないの。
むしろ、酷くなってくるの。
身体のきしみというか、なんだろう……肉体の内側に、なにかが住んでいるような妙な感覚がしはじめて。
それが星を使うと暴れて、もー、本当に苦しいのよ。いっそ殺してくれって言う位。
あたし、段々、悶絶するようになってさ。
歩けないくらいになっちゃって。
戦闘を外されて、アストリアの治療師に身体を見てもらったの。
――そうしたら。
信じられないことだけれど、体内に星が根を張っている、って診断が下された。
星が根を張るって聞いたことある？
……あるんだ？　そう。じゃあ、深くは説明しないわ。
とにかくあれってさ、星の持ち主が星の力に負けた時に起きる、一種の拒否反応でしょう。
蒼路も知ってると思うけど、弱った星師や、星師としての務めを放棄したり、間違った行動をした星師には必ずこの定めが待っている。
星師は星に殺される可能性があるの。
まるで、神様が、もうお前は要らないから死ねって言ってるみたいな。
……あたしはショックだった。だってそうでしょ？
半星で生まれたのはあたしの責任じゃない。そう決めたのは神様よ。

なのに、好きでアストリアをやってるあたしに、星の根を張らせたのよ。
でもまあ、根を張った星に勝てた星師はいない。
あたしはどんどん衰弱していった。
で、ハルがさ。
久しぶりに日本からイギリスにもどって来て、あたしの病状を知ったわけよ。
……その時、信じられない事にあいつ、泣いたの。
星の運命に対して泣いたんじゃないわ。星が憎いから泣いたわけじゃなかった。
あたしに対して、ごめんって言って。
そう、謝罪の意味で大泣きしたのよ。
何も謝ることなんてないのにね。そう思うでしょ？
で、あたし達は晴れて仲良しの双子に戻ったのだけれど——病状は元に戻りはしない。
ハルはあたしの傍についててくれた。ずっとね。
信じられないことにアストリアの仕事に戻ってくれさえした。
罪滅ぼしのつもりだったみたいで、見ていられなかったけど。
あいつはね、優しい子なのよ。
誰よりもほんとうは優しいの。
血を見るのが嫌いだし、誰かが傷つくのも嫌い。
皆に幸せでいて欲しいと思っている子なの、本当は。
だからアストリアの仕事が嫌いなんだと思うわ。
なのに無理して復帰してさ。どんどんやつれていって。
このままじゃ二人とも死んじゃうって思って、あたし、言ったのよ。
無理しなくていいわよって。
あんたの星はあたしが引き受けるから、あんたはやりたいことをやんなよって。
あたしは恨んでなんかいないし、憎んでもいないから。誰も。

そう言ったの。
それで、死んだの。

……でもね。やっぱりハルが心配でさ。
気が付いたら彼に魂がくっついちゃってて。
離れられないのよ。
ハルはずっと泣いてた。あたしが死んで。
迷子になったみたいな顔をして……あたし、そこで気付いたのよね。

ハルはずっとあたしを必要としてくれてたんだって。
なのにあたしはそんなハルを捨てて、ひとりでアストリアをやろうとして、それで勝手に死んじゃったんだって。
すごく身勝手な妹だったのよ。
だから謝りたかったの。
でもね、それを言う前に――ハルに魂が憑依してしまった。
それからあとは自分の自由も利かないし、かといってハルに祓ってくれるよう頼んでもハルは受け付けてくれないし、あまつさえ暴走しはじめちゃったし。現在に至る。
あたしはこうやって僅かに自由がきく時間を見計らって、キヨ様に助けを求めに行った。
……それで、後はあんた達の知る通りよ。』

交錯

「それで、ハル先輩は――元々嫌いだった星をさらに憎むようになったってわけ？」

『そういうこと。……あたしのせいだわね』

話終え、アンナさんはやや疲れた様子で髪をかきあげた。

俺はなんだか苛立ちを覚えて軽く彼女を睨みつけた。

「カンケーねぇだろう。そんなの自分だけの問題で、他人がどうこうできることじゃねぇ」

アンナさんは答えない。

ただ笑んで、静かに息を吐いた。

俺はその何とも言えない表情を見つめている内に、彼女の身体の輪郭が薄くなっていることに気がついた。

いつかのように、黄金色の燐光をちらちらと瞬かせて、バターのように溶け始めている。

思わず声をあげた。

「ア、アンナさん！」

『え？　何？』

「か、身体！　っていうか霊体！」

俺が指差して口をぱくぱくさせると、彼女は自分の体を見下ろして、納得したように『ああ』と呟いた。

『駄目だ。そろそろ時間切れだわ』
「時間？」

俺は心臓をドキドキさせながら問い返した。
この鼓動はなんだろう――ああ、そうか。
俺、怖いんだ。
アンナさんが消えてしまうのが。

『ハルが呼んでる。戻らなきゃ』

すっくと立ち上がったアンナさんの霊体から、膝から下の部分がどろりと崩れて溶け落ちた。黄金色の光が宙に広がる。
つづいて髪の毛先に耳、身体の外側の部分が順当に溶けて行く。
俺はぞっと背筋を凍らせた。
――これは、一時的なものなのか、それとも？

「――アンナさん！」

思わず呼びとめていた。
彼女は首を傾げて答えた。
まるで緊迫感のない、愛らしいと言えるほどの仕草で。

『なあに？』
「何じゃないよ！　もしかして――もしかして、ハル先輩から離れるのって霊体に相当な負担がかかるんじゃないの！？　霊体に傷がついたら、成仏も、生まれ変わることも、できないんだよ！！」

必死な自分の声が、まるで悲鳴みたいだった。
アンナさんは少し眼を見開いて――それから、細める。
猫みたいに。三日月みたいに。

どうしてだよ、と俺は歯ぎしりした。
どうしてこんな時にすらあなたは笑うんだ！

「アンナさんっ」
『いいものあげよか。蒼路』

アンナさんは俺の声なんてまるっきり聞いてないみたいだった。
やにわに笑うと、俺の方に身を屈めて、同時にその細い首に手を当てる。
一瞬、星を使うのかと思ったけれど、そうじゃなかった。
首にかけていたネックレスを外したのだ。
極細の銀鎖にぶら下がる緑の石。
輝く夏の森のような色合いが、双子の瞳の色と酷似していた。

『あげる』

アンナさんが言った瞬間、ネックレスをつまんでいた指先が溶けた。
俺は泣きたくなったが、彼女はぜんぜん構わずに、指のない手のひらにそれを載せて俺に押し付けてきた。
ふわりと羽が載るような感触が手のひらに触れた瞬間、質量を伴う。
冷たい石と金属の重さが、わずかに俺の手のひらに沈み込んだ。

『お守り。きっとあんたを守ってくれる』

アンナさんはさっぱりと言って、俺を見た。
そしてまたにっこりと笑う。
俺は何か言おうとした。
気の利いた一言じゃなくても、でも何か、この人に届くことばを。

――けれど。

『じゃあね。蒼路』

「アンナさ……」

何を言うよりも先に、彼女は溶けて消え去っていった。

光の届かない場所に。

孤独な闇の中に。

「――くそっ」

俺はベッドを殴り付けた。

固いマットの感触が身体を空しく伝ったけれど、今度は痛みなんて感じなかった。

痛いのは、俺じゃない。彼女なんだ。

俯いて両手で顔を覆った。

ああ、アンナさん。

あなたはどうして。

（あたしは誰も恨んでなんかいない）

どうして、そんなに優しい――。

＊＊＊

「……ただいま」

学校が終わり、俺は深紅に即刻帰宅させられた。

あ？　もちろん抗ったさ。

深紅にだけ護衛の仕事をやらせて、俺がのうのうと家で寝てるわ

けにはいかないってな。
けど、そう言ったらあいつは俺を鼻で笑いやがった
「お前、だからこそバカだと言っているのよ。自分の不始末でそんな怪我をしておいて、あたしとまともに張り合えると思っているの？　大きな勘違い、傲慢もいいところだわ。足手まといだからさっさと帰って寝て頂戴。あんたに今できることはさっさと怪我を治して復帰することでしょ」
……だって。
正直かなり腹が立ったが、事実なもんで言い返せない。
怪我は確かに酷かったし、この状態では護衛の仕事をするどころか、気配を殺してハル先輩の近くに控えていることすら辛い状態。
それより何より深紅が昼間のビンタの件以降、著しく機嫌を損ねているようなので俺は大人しく言いなりになることにした。
「あれぇ？　お兄ちゃんだ～」
玄関を開けるなり、藍がリビングの方から駆け寄って来た。
その声を聞きつけて母も出てくる。
二人とも一様に驚いた顔をしていた。
「蒼路。どうしたのよ、早いじゃない。深紅ちゃんとの仕事は？」
「……ちょっと」
「ちょっとじゃわかんないでしょう。どうしたの？　また怪我でもしたの？」
「べつに」
相変わらず母は鋭い。
俺はぷい、と顔を背けてスニーカーを脱ぎ、家に上がると、その

まま母の横を通り抜けようとしたが――

「――ギャッ！！」

腹に肘鉄を喰らって悶絶した。母のしわざだ。

廊下に膝を折ってしまった俺はうらめしく母を睨み上げた。

「……か、かあさん……マジで死ぬからっ……」

「ウソをついたお前が悪い。ほれごらんなさい、怪我したんじゃないの。何したの。言ってごらん」

厳しい視線に見下ろされて僅かに竦んだが、魔物を庇って怪我をしたなどとは恥ずかしすぎてとても言えない。

腹の傷を押さえながら立ち上がっていた。

「別に……だから、何もないって」

「夕飯抜きにするわよ！？」

「――マジでっ！？」

俺は迷った。

同時に、台所の方から漂ってくる料理の匂いを嗅ぎつけ、今日の夕飯のメニューを想像する。

香ばしく肉の焦げた匂い、にんにくとハーブの織りなす重厚な香りのハーモニー、その中に僅かにパン粉の気配がするっ！

「お兄ちゃん、今日、ハンバーグだよ～」

背後で藍が答えを言った。

俺は本気で悩ましく、頭を抱えて唸った。

「ハンバーグ……くっ」
「く、じゃないでしょ。何真剣に悩んでるの、阿呆！　お母さんに何があったのかさっさと教えなさいよ、格好つけてないでっ」
「るせぇ、これは俺の沽券に関する問題なんだ！」
「じゃあお兄ちゃんのハンバーグ、藍がもらう♪」
「それは駄目！！」

反射的に妹を叱ってから、俺はハアとため息をついた。
仕方がない。
母さんと藍は星師じゃないし……まあ、大丈夫だろう。

「わかったよ、話すから。取り合えず着替えさせて」

諦めてそう言うと、母は大袈裟に頷いた。

「よろしい」

――で、まずは自室に戻った俺だったが。
部屋のドアを開けて、制服を脱ごうとブレザーのボタンに手をかけた所……

『……蒼路！』

耳に届いた人ならざるものの声にひっくり返りそうになった。
えぇー！？
一体どこから、と思って視線を巡らせると、ベッドでもなくマンガの詰まった本棚でもなく、机の上でもなく。窓枠の上だった。
日の長い夏だからまだ夕暮れには遠いけれど、空気が青っぽく染まり、陽は翳り始めている。
そんな空を背景に二本の猫の尾が揺れていた。

おお、まさに逢魔ヶ刻、だ。

「よお、花緒ぉ！」

俺は思わず笑顔になって駆け寄った。

そう、猫又の花緒が、窓枠にちょこんと座っていたのだった。

異形たちの噂

『蒼路、血の匂いがする』

ぽてっと音をたてて窓枠から飛び降りると、花緒は俺の足もとにまとわりついてきた。

ふんふんとしきりに鼻を動かしながら二本の尾を振り立て、無意識なのだろうが白い毛並みをふくらませている。

その瞳は針のように細くなっていた。

――興奮しているのだ。星師の匂いに。

『いい匂い。甘い匂い。怪我したの？』

「……ちょっとな。あんまり嗅ぐな、喰いたくなるぞ」

俺はさりげなく花緒の身体を手で押しのけて、この身体との距離を広げた。

星師の血肉は魔物達にとって至高の珍味なのだ。

強い力を宿すだけに喰うとうまい上、魔物達に特殊な力を与えてしまうらしい。

つまり俺達は魔を祓う存在でありながら、魔を引き寄せてしまう体質なのだ。

……不思議だと思う。

星師に力を与えたのは神々で、それは俺達が神々のために魔物を祓う役目を担ったからだ、と言われている。

けれど俺達がいくら魔物を祓っても、この命続く限り魔物は湧き続けるだろう。生き物の骸に群がる虫たちのように。

そう考えると不思議でならないのだ。

ほんとうに俺達は神々からこの星を得たのだろうか。
だとしたら何故、星は魔を吸い寄せるのか――と。

『蒼路？』

黙々と考えていたら、花緒の声で我に返った。
はっと白い猫を見下ろす。彼女は眼を蛇のように細くして俺を見上げていた。

「あ、悪い。それで、どうしたんだ？　わざわざ」

尋ねながらずっと手にしていた鞄をベッドに放り投げた。
同時にネクタイをはずして、シャツの襟をはだける。
花緒はそんな俺の一挙一動を興味深そうに眺めながら言った。

『うん。蒼路、気がついた？　北山の犬塚の封印が、今朝解かれた』

「――なに？」

俺は花緒の報告に驚くと同時に、はたと気がついたことがあって手を止めた。
頭に浮かぶのはあの黒妖犬。
尋常でなく腹をすかしていた彼はこう言っていなかったか。

――今の我には力がない。ゆえ力が必要なのだ、小僧よ。
長きにわたる眠りの間に失ってしまった力がな。

“長きにわたる眠り”とは、つまり。

「封印のことか」

『え？　蒼路、やっぱり気づいてたの？』

花緒がぱっと顔を上げる。
俺は小さく頷いた。
彼女はこの丘の街を守る意識が強い、善き妖怪だ。
街に異変あらば全力をもって解決しようとする。
今日俺の元へやってきたのも、だから、そのためなのだろう。

「ああ。気づいてたっつーか、そいつ、俺のところに来た」
『え！　星持ちの肉、食べようとしたの!?　ずるい抜け駆けっ』
「突っ込みどころが違うだろ花緒！　……まぁ、そういうこと。正確には俺の星を狙ったわけじゃないみたいだったけどな」
『あぁ。それも聞いた。星持ちの姫君が、蒼路の傍に現れたって』

訳知り顔に頷く花緒に、俺の心は不穏にざわついた。
星持ちの姫――深紅。
元より魔物を吸い寄せる体を持つ俺達星師のなかで、抜きんでて魅惑的な芳香を放つ娘。
あいつの存在は魔物達の間ではもはや生きた伝説らしい。
生まれた瞬間から魔物を御身に引き寄せ続け、ゆえに故郷を滅ぼしてしまった、血ぬられた姫君。

『本当に、ものすごく美味しそうな匂いがするよね。あの姫君。でも不思議。なんだか力を押さえられている感じもする』

ぱたぱたと尻尾を振ってそう言う花緒に、俺は低い声で答えた。

「……封呪をかけられてるんだよ。強すぎる星を持って生まれたから」
『ああ。なるほどね。で、犬塚の鎮守神は、姫様を食べたの？　食べれなかったの？』

妖怪だけに、花緒はぞっとするようなことを無邪気に言う。
俺はただ首を振って今度こそシャツを脱ぎ棄てた。

「喰えるわけねぇだろ。俺がついてるんだから」
『へえ。蒼路は姫君の護衛なの？』
「ちがう」
『じゃあ恋人？』
「……もっと違うっ」

顔がじわじわ紅くなるのを自覚しながら俺は私服に着替えた。
動きやすいジーンズにポロシャツ。
夏なのに紺や藍という暗い色合いを選んでしまうのは、この後に控えた展開を何となく予測しているからだろう。
――濃色は、闇に紛れる。

「それよりも花緒。いまあの犬、どこにいるかわかるか？」

着替え終えると俺は花緒をふり返って言った。
すると白い猫は実にあっさりと首肯して、再び窓辺に飛び乗った。

『わかる。おかげで街中の妖怪たちが大騒ぎしてるの。だから蒼路に頼みに来た』

……やっぱりな。
俺は思ったが、口には出さなかった。
代わりに片手を探るように腹の傷に押し当てて、その治癒状況を確かめる。
どうやら深紅が治療してくれたらしく大事には至らなかったが、この傷、実を言うとかなり深い。

ハル先輩が言っていたように、俺が星師でなければ間違いなく死んでいるだろう。
――しかし。
眼を閉じると浮かぶ、いつも厳しい表情をした深紅の顔。
痩せこけた鎮守神。
悲しみに暮れるハル先輩と、痛々しいほどに笑うアンナさん。
俺は右手をきつく握りしめると息を吸った。
怪我をしていようがいまいが、そんなことは関係ない。
大事なのは俺に今、やるべきことがあるということなのだから。

「よし。んじゃぁ、行くか。ちょっと案内してくれよ、花緒」

ぱんっと両手を打ち合わせて笑うと、花緒は応えるように二本の尾を振り立てた。

『わかった』

＊＊＊

『人間の足は遅い』

ぼやく花緒の背に乗せてもらい、黄昏の宙（そら）を駆ける。
眼下に広がるのは薄闇に包まれて濃い紫色の影のように見える俺の街。
君見丘、という。
君に見（まみ）える丘――そんな名前を持つこの街は、元々は山だった土地を開発してつくられた街だ。
開発元の会社は鉄道会社で、山を切り崩して駅を建設し、そこを中心として街を広げた。
だから今でもこの街は山を連想させる形状をしている。

丘のてっぺんから中腹にかけてまではさっき述べた学校や住宅地、病院などの生活施設が密集しており、小奇麗に整頓されているが、そこから下の裾野にあたる地区にはあまり手が及ばなかったようで、今でも昔ながらの緑深い田畑や神社、ゆるやかに流れる小川といったのどかな光景が残されている。

その本質を物質ではなく気――つまり、心や感情、思念という力のことだ――とする魔物たちは、環境から気をとりいれることのできない都会にはあまり住みたがらず、緑豊かな田舎を好むことが多い。

まぁ中には悪魔のように、人の悪しき心を好んで都会に跋扈（ばっこ）する魔物達もいるが、今は彼らの事は置いておこう。

とにもかくにも、花緒が俺を導いているのは、うっそうとした緑に覆われた、山の裾野めがけてだったのだから。

「……暑いな」

これほどの高台を飛んでいても、吹き付ける風はほとんどなく、夏の暑気は弱まらない。

俺は腕で額を軽くぬぐいながら花緒の背にまたがっていた。

彼女の毛並みはしっとりと細やかなだけに、肌に触れると暑い。

『蒼路～、また雑魚が来たよ』

汗を拭っている俺に向けて花緒の声がかけられる。

俺はまたか、と舌打ちをして眼下の闇の海を見下ろした。

足もとから広がる藍色の靄のなか、湧き上がるようにして、蟲のような雑魚の魔蟲たちが絶え間なくこちらへと上ってくる。

星の、星師の血の匂いに誘われているのだ。

キチキチと嫌な鳴き声をたてて無数に飛んでくる彼らは、大抵は星の力に反応して、俺達に触れることすらできず蒸発してゆくが、

中にはそれなりのレベルの魔物も混じっていて、家を出てから何度襲われたかわからない。
今しも、一匹の鳥妖がするどい嘴を開いて突っ込んで来るところで、毒々しい緑色の羽が闇に妖しく光をはじいた。

『蒼路！』

足もとを素早い動きですりぬけたその鷲のような姿の妖怪に、花緒も気が付いて俺に注意を呼び掛けた。

「ああ、わかってる」

俺は短く応えると、花緒にまたがる両足に力を込めた。
振り落とされないように体制を整えると、両手を解放し、宙に魔法円を描いて呪を唱えた。

『我、星を以て万魔を調伏すべし』

鳥妖が俺の上空に閃光のように伸びあがり、そのまま急降下を始めた。猛禽類より尚鋭く巨大な嘴がまっすぐに俺の眼玉に狙いを定めている。
蒼く光る魔法円を両手の中に掲げて俺はやれやれとため息を吐く。
ほんとうは、術はあんまり得意ではないんだが。
……とにかくにも、今は極力体を動かしたくない。

「――降魔調伏」

小さな声で呟いた瞬間、手の中から蒼い光があふれ出た。
鳥妖は悲鳴をあげる間すらもなく、その光に呑みこまれて消滅する。

おまけに魔蟲（まむし）たちも、いましも林の合間からわらわらと飛び立とうとしていた別の魔物たちも、皆灰と化して崩れ去った。
ふぅ、と軽く息をついて俺は呪を解いた。うまく行った。

『蒼路、前よりは術、うまくなったね』

何事もなかったかのように飛翔を続けながら花緒が言った。
俺は首を振ってわずか苦笑する。

「まぁな。でも、やっぱ肉弾戦のほうが得意だ」
『今はやめたほうがいいよ。身体を動かして傷が開きでもしたら、もっとたくさんの蟲が寄ってくる』
「わかってる」

短く応えて俺は腹に右手を当てた。
じわりとした温もりが傷に染みいる。……確かに、しばらくはあまり派手に動けない。
この血の匂いが呼び寄せる災いは、俺だけでなく俺の大事な者までをも飲み込むだろう。

「しばらくは、術を中心に戦うつもりだ。……それより花緒、まだ？」
『もう着く』

答えた花緒の声は明確だった。
白い毛並みに金色と緑の模様を持つ美しい身体が、ひらりと宙を旋回し、それからふいに下向きになった。下降を始めたのだ。
だが衝撃はほとんどなく、俺は余裕を持って周囲の景色を確認することができた。左前方に黒くうごめく小川、蛇行するその川に沿って伸びる道、辿った先には——ひどく崩れているものの、あれは

おそらく朱の鳥居。
抑えてはいても隠しきれるものではない妖気が、鳥居の奥のこんもりとした林の中からあふれ出ていた。

「神社に隠れているのか……」

俺が呟くと、花緒はうんと首肯した。

『今は誰も参拝しない、廃れたお社。忘れられているけれど、ここが元々の彼の家だった。北山の塚は後から人が勝手に作ったものだ』

彼、というのが誰を現しているのかは無論明白だった。
俺は花緒の言葉に胸を痛めて、崩れ落ちた鳥居を見下ろす。
忘れられた神、つまり。
――俺達が忘れ、見捨てた神。

「どうして、人は……」

俺は花緒の毛皮に顔を押し付け、知らず呟いていた。
風がゆるやかに吹き付けて髪を動かしていく。

「……人は、見えなくなってしまったんだろう……」

ここに、確かにあるものを。
こんなに温かいのに。やわらかいのに。
彼らは確かに生きていて、人と同じものを見て、同じことを感じる心を持っているのに。

『――降りるよ、蒼路』

静かな声で花緒が言って、やがて彼女はふうわりと地上に降り立った。あまりにもなめらかな着地で、そうと言われなければ気付かないほどだった。

彼女の身体が水平になり、俺はようやく地面に降りる。

まだ完全に落ちていない日が照らし出す、眼の前の光景。

そこには、ぼろぼろの鳥居があった。

太い柱が中ほどからぽっきりと割れ折れて、半分しか形を保てていない。

うっそうと茂った雑草は周囲の木立と同じほどの高さがあって、かつては参道であったであろうものを完全に覆い隠していた。

壊れた鳥居、それが、西日を浴びて燃えるような朱色に輝いている。

『蒼路』

地に鼻をこすりつけて匂いを嗅いでいた花緒が、顔を上げて俺を見た。俺も頷いた。

鳥居の方へと数歩足を進め、草むらの中に埋もれてはいたものを取り上げる。

「ああ」

それは、千切れた注連縄（しめなわ）だった。

人の住む現世と神の常世（とこよ）を隔てるもの、つまり結界の役割を果たす縄。

縄が落ちていた場所の草は、折れてまだ間もない様子だった。

つまり――つい最近誰かがここに来て、この縄を切ったのだ。

明確な目的を以て。

『呪力で切られてるね。この縄』

「ああ」

花緒の指摘に俺はふたたび頷いた。

彼女が身体を緊張させているのがわかった。

美しい毛並みが波打ち、見えざる敵を威嚇するかのように二本の尾が天を向いている。

俺はしばらく手の中の縄を見つめていたが、やがてそれをぽいと林の中へ放り投げると、歩き出した。

鎮守神

注連縄が切られたとはいえ神域は神域、参道に一歩足を踏み入れた途端、襲い来る魔蟲たちの数は激減した。

だが彼らが鳴りを潜めているのは結界の効力よりも、恐らくは、この奥に控えている存在への恐怖のためであろう。

俺は昼間会ったばかりだからさほど驚きはしなかったが、『彼』と初めて見えるらしい花緒はさっきから全身を緊張させて、できれば前に進みたくないというようにじりじりと俺の後を一歩ずつ着いてきていた。

それはそうだ。何しろ、今も全身に吹き付けてくるこの気配。

時刻が時刻であるだけに、闇が濃くなる度に肌が凍りそうな——それでいて、焼けつきそうな——そんなただならぬ気配が辺りを支配してゆくのが感じられた。

妖気、と一口にくくっていいものではない。

初めて出会うものではあるが、これこそが恐らく神気というものの一種ではなかろうかと、俺は歩を進める度に思った。

「蚊がすごいな」

ぱちん、と腕を手のひらで叩いて俺は言った。

なんと場違いな一言を、と思われそうだが、これは重要なポイントだ。

魔物が生息する場所には、生き物の虫は決して寄りつかないのだ。

人よりも本能に依って生きる生物であるだけに、動物や虫たちは彼ら魔物を感ずる力がとても強い。

だから、今こうして辺りをうわんうわんと蚊が飛び回っているということは、逆にいえば、他に魔物がいないという証明になる。
それだけあの鎮守神の力は強く、高位にあるのだ。
証拠に花緒が立ち止った。
どうしたよとふり返れば、首を横に振ってこれ以上は行けない、と言う。

『だめ。さすがに恐れ多すぎる』

言うなり花緒は後ろ足を畳んで、お座りの格好に座り込んでしまう。
尻尾もしゅんと前脚に巻き付けて、本当に弱った様子である。
俺は仕方なく頭を掻いた。

「じゃあ、ここで待っててくれよ。何かあったら合図するから」
『うん』

花緒は尾を振って答え、それから、思い付いたようにこう言葉を付け足した。

『でも、気をつけてよ。蒼路』
「大丈夫だ。――あいつは、悪い奴じゃない」

俺は言うと、いま一度前を向いた。
さすがに長い夏の日も沈みかけており、一寸先は闇だった。
鬱蒼と茂る木立のシルエットが不気味に参道に覆いかぶさり、こちらの侵入を拒んでいるように見える。
だがその奥に、ぼんやりと浮かぶ光があって、それが『彼』の灯したものだと俺には何故かわかった。
いま一度花緒をふり返り、俺は笑ってみせた。

――魔物たちにも笑顔の意味は通じるのだ。

「じゃ、行ってくる。ああ、もしも俺の身に何かあったら、高台の筧のババアに伝えてくれ」

『わかった』

花緒がしゃがみこんだまま頷いたのを見届けて、俺は闇の奥深くへと入って行った。

＊＊＊

この神社は、昔は相当な数の参拝者がいたに違いない。

昔は大きかったであろうと思わせるきちんとした造りをしていた。

参道をゆっくりと歩いていくと、手を清めるための手水舎（ちょうずや）を横目に灯篭が立ち並ぶ場所に差しかかった。

苔むして草花がびっしりと生い茂るそこを過ぎれば、元々は拝殿だったのであろう、崩れ落ちた建物が見え、その前には二頭の狼の石造（せきぞう）が鎮座していた。

俺は立ちどまるとその眷属の像を手のひらで撫でた。ひび割れて耳や尾のあちこちが欠けた痛々しい姿。

かつては訪れる者たちを見守っていたのであろうが、今は石造と呼ぶのすらためらわれる佇まいだった。

「……よう」

俺は石造たちの、黒ずんだ瞳を覗き込みながらそう声を発した。

「長いお勤めご苦労さん。お前らの主人はどこだ？」

応（いら）えは、無い。

だが石でできている筈の彼らの瞳が、俺の呼びかけに反応し、濡れたような艶と生き物の細胞を取り戻した。
虚空を見つめていた瞳に魂の意思が宿り、明確な焦点を伴う。
ぎょっとして俺が見つめると、その驚くべき変化はひび割れた石造の全身におよび、彼らはたちまちのうちに、輝くような銀色の毛並みを持つ狼と成り変わっていた。
唖然として物もいえない俺を尻目に、彼らはやがて四肢を踏ん張ってぶるぶると身震いをしはじめた――動いた！

『ふあーあ。しばらくぶりの来訪者じゃのう』

思わず戦闘態勢を取った俺に対し、彼らは存外穏やかな口調でそう言った。
先ず口を開いたのは左方の石造、眼も同じように見開かれ、そこにはあの鎮守神とは異なる、澄み切った蒼い瞳が存在していた。

『誠に久しき客人じゃ。人の子よ、おぬし星を持っておるな、我ら主人が求める者か』
「……求める者かどうかは知らんが」
続けて口を開いたのは右方の狼。
麗しい二頭の狼に挟まれて、眼を白黒させながら俺は答えた。

「お前たちの主人に用があって来たのは確かだ」
『では先ず名を名乗られい、人の子よ』

右方の狼がひらりと台座から飛び降りた、と思ったら、そのまま地上に足を着けることなく、優雅に宙を泳ぎ俺の目の前に静止した。

『我らは主を守る者。素性の知れぬ者を、しかも人の子を、いくら

星持ちとて軽々しく通すわけには行かぬ』
『安心せよ、星の子よ。我らは神に通ずる者。おぬしを卑しめる存在ではない』

左方の狼も台座の上で立ち上がると、闇の中でも冴え冴えと蒼く輝く双眸で俺を見つめ、そう言った。
……しかしだなぁ……。
俺はちょっと困って、考える間を取った。
筧の鬼ババアの顔が脳裏を占拠していたのだ。
――よいか蒼路、いくらお主が術者の最下位に位置する者であろうとも、これだけは心せよ。
彼女はいつもそう言っていた。
――呪術を使う身として、どんな理由があろうとも、軽々しく相手に名を与えてはならぬ。
なぜならば名はその者を体を現し、名を奪うということは命を奪うということだ。
魔物に名を奪われて殺されてしまった術者は、実際に俺の周りに何人もいる。
故に、俺たちは本当に信頼のおける存在にのみ己の名を伝え、それ以外の者の前では固く口を閉ざしていなければいけないのだ。
それが普通。
それが、大原則。
――なのだが。

「……高村、蒼路」

俺は名乗っていた。
二頭の狼が、視界の両端で驚きに眼を見開いたのが見えた。
いくら自分たちから乞うたとはいえ、ここまであっさりと名乗ってもらえるとは思っていなかったらしい。

二頭は互いの顔を見合わせて、まったく同じしぐさで瞬きをした。
その様子がおかしくて、俺は思わず笑みを漏らしながら、もう一度こう言った。

「俺は蒼路だ。お前たちの主人に会いに来た。害をなすつもりはない。案内してくれ」

その言葉に嘘はない。
だからこそ俺は名前を名乗ったのだ。

『……誠に変わった人の子じゃ』
『全くじゃ。星を持っているとはとても思えぬ』
『主様は人間がお嫌いだぞ、星の子』
『取って食われても知らぬぞ、星の子』

狼たちはきっちりと順番に俺の顔を見つめて、四つの蒼い瞳をきらめかせた。その輝き。
闇に潜む、闇こそを好む生き物とはとても思えぬ、鮮やかな光。
俺は頷くと、はっきりとこう言っていた。

「――構わない。だって、襲えるものならとっくに襲っているだろう？」

俺の声は、闇の合間に存在するこの不思議な社の中に、妙にくっきりと響きわたった。
二頭の狼が再び顔を見合わせたのがわかる。
彼らはしばらく考えるように互いの瞳を覗き込み、尾を打ち振っていたが、やがてふいに天を向いた。

『……主様』

二頭の声が重なり、闇を震わせる。
急に風が起きて、ざわざわと周囲の林が不穏に重くうごめいた。

『主様』
『仰せになられた人の子がここに』
『此処に』
『星持ちの子供です』
『まばゆい光を宿しております』
『主様』
『主様――！』

彼らの呼びかけの一声ごとに、風は強く、大きくなって、社の全体を包み込むようだった。
俺はふいに、息が詰まるような圧迫感を感じ、眷属たちと同じように天を見上げていた。
闇に塗りつぶされた暗い空、だがそこから、何かが来る。
強大で恐ろしい、凄まじい力が――

「――！！」

思わず、眼を閉じていた。
地面が割れたかと思った。
足もとから脳天を突きぬける衝撃、これを地震と呼ばずになんと呼ぶのか。
突如として大地を揺らした巨大な揺れに、俺は軽く脳を揺らされて吐き気を覚えたが、なんとか堪えて眼を開けた。
するとそこに――『彼』がいた。

『……そなたか、星持ち』

緋色の瞳が、触れれば溺れてしまいそうなほどすぐ近くに在った。巨大な頭が俺の顔の前に突き付けられ、生温かい吐息が髪を揺らす。

彼の発する妖気と神気の入り混じったエネルギーによって、周囲の草木がぶちぶちと弾け飛んで空に舞った。

彼は息を荒く乱していた。ひゅうひゅうと、風を切るような音は、彼の呼吸が立てる音だ。

まともな音ではない、と俺は思った。

少なくとも健康な生き物がたてる音ではないと。

「腹が減ったか」

俺は緋色の瞳に問うた。

すると瞳が欲望の輝きにぎらついた。

黒妖犬の意思が答えているのではない、彼の本能が応じたのだ。

その瞳を見て、俺は決心した。

左手を彼の前に掲げ、昨日からまだ解かれていなかった包帯を解いた。するすると流れた白い布の下から現れた、まだ塞がり切っていない生傷。

とたんにかっと眼を見開いた鎮守神に対して、俺は、こう言った。

「――俺の血をやろうか。鎮守神」

話をしよう

俺には生まれた時から魔物が見えた。
星を持って生まれたのだから当然だ。
山奥の里で過ごした幼少時代、世界は一面、彼ら魔物の織りなす不思議な色彩で満たされていて、俺は彼らが彩る景色が好きだった。
きらきら輝く湖の水面に、はしゃいだように跳ねる人魚。
真っ赤に染まった秋の山肌を駆けまわる山犬、あでやかな着物をまとって舞う女妖（じょよう）、見事な楽でそれを囃す天狗（てんぐ）たち。
――あれは悪いものだ、決して話しかけてはいけない。近づいてはいけない。
里の大人たちにそんな風に教えられる度、どうしてだろうと悲しい気分で思ったものだ。
どうして話してもいないのに悪いものとわかるのか。
そもそも、本当に彼らは悪いものなのか。
幼心に不満でたまらず、俺は大人たちに尋ねた。
ねぇ、だって『あれ』、ぼくたちと同じことばをはなしているよ。
もみじをきれいだって言って、水がおいしいって言っている。
なのに、『あれ』はぼくたちと、何が違うの？

（……お前はやさしすぎるなぁ、蒼路）

教えられることに対していつも、何故、どうして、と返していた俺を、困ったように笑んで見つめる人がいた。
ずいぶん前に死んでしまった、否、死んでしまったことになっている人。
俺に星師の手ほどきをしてくれたのは彼だった。

あの里、深紅の一族が治める星の里で、五辻一族を守護する任についていた屈強の星師。
——親父は、俺にとって憧れの星師だった。

（人を、動物を、魂を愛して止まず、魔物にすら心を砕く……それは星師として、許されないことであるにもかかわらず）
（どうして？）

尚も尋ねる俺の頭に手を置いて、親父はわしゃわしゃと髪を掻き乱した。
大きくあたたかで、ほんの少しごつごつしていた、傷だらけの手のひら。
頬に星印の刻まれた顔で、親父はやさしくほほ笑んだ。

（さぁな。きっと誰にも答えられまい。星を持って生まれたからと言って、彼ら魔物を虐げる権利は、実は俺たちにはないんだから）
（しいたげる？　いじめるってこと？）
（そうさ。だから、蒼路。お前はそのままでいいんだよ）

彼のその一言を、俺は今でもはっきりと覚えている。

（そのままで、進め。がむしゃらに、もがけ。誰がなんと言おうと、自分が信じる道を行くんだ）

——まっすぐに、曇りのない心で、蒼穹のような路（みち）を切り開け。

（そうすればきっと、いつか誰かがわかってくれるさ……）

俺はひとつ、瞬きをした。
思い出が遠ざかる。同時に、胸に迫り上げていた熱いものを、無

理やりに飲み下す。
深く息を吐き出して、いま一度目の前の瞳を見つめた。
夕焼けの色、花の色。
血の色と呼ぶにはあたたかすぎる緋色の眼(まなこ)を。

「……どうだ？　俺は本気だぞ。お前に俺の血をやろう」

言いながら、宙に掲げたままだった左手を、強くぎゅっと握りしめた。指先を手のひらの肉に爪立てるようにしてあらん限りの力を込める。
すると、縫われた傷の合間から焼けるような痛みが走り、そのままどろりと流れ出すのが感じられた。
ゆっくりと、指を開く。
闇に覆われた視界のなかで、鉄錆(てっさび)の匂いが一際くっきりと鼻孔に流れ込んできた。
鎮守神が、堪え切れないように喉の奥で低く唸った。巨大な瞳の上に様々な光が乱舞して、その心の乱れをこちらに伝える。

「星師の血だ。数滴でも、常人(たたびと)一人を喰らうより、よっぽど空腹が満たされる。飲めよ。それで、力をつけろ」
『……小僧、何を、考えておる』

今や口の端から泡を噴き出しながら、それでもこの鎮守神は耐えた。
涎を垂らし、凶悪な口を半ば開いて、周囲の闇と同化するほどの漆黒の毛並み、それを激しく波立たせた。
轟くような咆哮を上げ、彼は苦しげに叫ぶ。

『我を、馬鹿にしておるのかっ……！』

毅(つよ)い声だった。全身の肌にびりびりと響き、体がわずか背後に後退する。

俺はとっさに顔の前で両手を組んだが、星の力は使わなかった。

戦うつもりは、毛頭ない。

「馬鹿になんて、してねぇだろ！　俺はただ……」

だがそう言いかけた言葉は、今や怒り心頭に達してしまったらしいこの鎮守神によって遮られた。

彼は四肢をつっぱり、しろがねの爪をむき出しにして、屈辱に身を震わせていた。

『うぬれ、思いあがった星持ちの小僧よ……！　昼間といい、今と言い、我は人に情けをかけられるほど弱き存在ではないぞ！』

俺の顔の前でがっぱりと、狼の口が開いた。

赤黒い口腔内、隙間なく並んだ鋭利な牙。

今の今まで一言も発さずに沈黙していた鎮守神の眷属たちが、慌てたように叫ぶ声が耳に届いた。

『なりません、主様！』

『また人を喰ろうては、今度こそ御身は……！』

『――黙れ！！』

眷属達の悲鳴を叩き潰すように神は吠えた。

彼らはその一喝だけで全身の毛を逆立てて、怒りの衝撃波に吹き飛ばされた。

「おい、何てことするんだ、あいつらはお前の事心配して……！」

思わずカチンと来て鎮守神を怒鳴りつけようとした俺は、しかし、次の瞬間本気で頭蓋を噛み砕こうと飛びかかって来た犬の頭に気が付いた。

ただでさえ暗い視界が犬の影によって尚暗く塗りつぶされる。

――イライラしやがって。

俺はちっと舌打ちをすると、そのまま眼を閉じて息を吸った。

全身をぴくりとも動かさずに、次の瞬間の訪れを待つ。

鎮守神のあぎとは俺の頭など卵を割るように容易に噛み砕き、そのまま丸飲みにして――

――脳をすすり、血を舐める、筈だが……？

予想していた事態が起きない。

俺はうすく眼を開けた。だがそこには何も見えない。

視界が機能しない代わりに、強烈に鼻をつく生臭い匂いがある。

生臭く、温かな、しめった匂い。

『……何故だ……』

くぐもっているのに、脳を揺さぶる程の音量の声は、頭の上から聞こえている気もしたし、両脇から聴こえている気もした。

俺はようやく予測がついた。ああ、これは犬の口内だ。

こいつ、俺の事、噛まなかったんだ。

『……何故反撃せぬ、星持ち』

ゆっくりと、犬の声が遠ざかっていく。

同時に生温かな吐息も離れて、やがて程なくして、夏の夜気が汗にしめった俺の頬に触れた。ようやく瞬きをすることができる。

「それはこっちの台詞だろうが。喰うなら喰えよ。もったいぶってないで。でないとお前、本当に飢え死ぬぞ」

『そなた星持ちであろうが。魔物に何故情けをかける』
「腹減ってる奴を切るほど卑怯なことはねぇだろう」
『……我は人は喰いとうない』
「もう既に喰ったんだろう？」
『人間は嫌いだ！』

鎮守神が再び吠えた。
俺は思わず天を仰いだ――さっぱり、わからない。
人が嫌いだから人を喰ったのか。
喰ったから嫌いになったのか。
それとも、全然違う、何か別の事情があるのか。
……どちらにしても。

「……あー！　面倒くせぇ！！」

深く考えることが苦手な俺は、天を見上げたままそう叫んだ。
とたん、鎮守神とその眷属がぎょっとして飛び上がるのを尻目に、とにかく、と彼らの傍に詰め寄って言った。

「話さないことには事情もわからん。そして今のお前は話すことすら困難なほど腹を空かしていると来た！　だったらその辺からウサギでも魚でも獲って来てやらぁ、だから待ってろ！！」
『……話？』
「そう、話だ！　話をしよう、とにもかくにも！」

さすがに予想外の一言だったらしい。
犬は眼を丸くして体の動きを全停止したが、俺はその様子を肯定と勝手に受け止めた。
踵を返して歩き出すと、術で呪力の糸を紡ぎ、それをそのまま眷属の片方の首に巻き付けた。

『ちょっ……何をするのだ星の子よっ？』
「道案内してくれ。それに、こうでもしなきゃあいつ、戻って来ても待ってっかわかんねーじゃん。……悪く思うなよ」
言いざま俺は、眷属もろとも、神社の周囲を覆う森へと飛び込んでいった。
ざざ、ざざ、と音を立てて、鋭利な草の葉が肌を切る。
僅かに傾斜した地面をスニーカーの足元が滑る。土が湿気を含んでいるように感じるのは、たぶん気のせいじゃない。
近くに川が流れているのだ。
完全な日没を迎えた今、この山の中は伸ばした手の先すら見えない真の闇に包まれた。
役に立たない視界に代わり、聴覚と嗅覚が普段の何倍も鋭敏に辺りの様子を把握する。
俺は眷族の首に巻いた糸をひっぱり、彼に尋ねた。
「とりあえず川に行くか。……お前の主人、魚は好きか？」
闇にほんのりと浮かぶ銀の毛並み持つ狼は、俺の問いを完全に黙殺した。
代わりに手足をじたばたさせながらこうわめく。
『小僧！！　いい加減にせぬか、先ほどから、これは我ら神に通ずる者に対して純然たる侮辱であるぞ！！』
「侮辱だろうがなんだろうが、腹が膨れりゃ何でもいいだろ」
『良いわけがなかろう！』
「うっせえなあ、じゃあなんだよ、お前はこのまま自分の主人が飢え死にするのを黙って見てるっていうのか。それがお前らの役割だって言いたいのか？」

言いざま俺は狼を見下ろし、その首に巻き付けた糸をさらにひっぱった。
細い糸に喉を圧迫され、さしもの神の眷族も必死の形相で苦しみ出す。
やめろやめろと動かされる銀の手足を今度は俺が黙殺して、取り敢えず歩き出した。
空いた片手をポケットに突っ込み、ひらりと一枚の紙を取り出すと、そのまま宙に放り投げた。

「顕現(けんげん)せよ」

短く呟くと、紙片がたちまち一羽の鳥へ変ずる。
夜目にも鮮やかな白い鳥。それが軽やかに上空へと舞い上がり、星の印を持つ翼を羽ばたかせた。
小さな嘴には明るく輝く球体が咥えられており、それは俺たちの足元を照らすだけの光をもたらしてくれた。
わずかに明るくなった視界のもと、たちまち群がる虫を横目に俺は眷族を振り仰ぐ。

「おい、行くぞ」
『……主様のお言葉さえなければ良いものを……！』

狼はまだ地に体躯を伏せて嫌がる気持ちを全身で表現していたが、俺が黙って見つめているとやがて身を起こした。

「で？　どっちだ？」

俺は小さくほほ笑んで問う。
すると狼は答えた。

『……右だ』

――その、瞬間だった。

俺たちの頭上、この山の上を、風のように飛んで行った凄絶な気配があった。

俺と狼はまったく同時に、弾かれたように天を見上げた。

闇の中にも気配は見える。

これは、善い気配ではない。邪悪な気だ。

狼が、闇空に軌跡を残して飛んで行ったその気配を眼で追った後、やにわに叫んだ。

『――主様!!』

そして突然、狂ったように全身をくねらせて暴れ始めたのだった。

『小僧、この、糸を解け!!　早くしろ!』

「え？　どうしたんだ、一体……」

『戻るのじゃ!!　このままでは主様が――』

銀狼の最後の言葉が、悲鳴のように闇に響き渡った。

『――主様が危ない!!』

話をしよう　2

『主様！！』

捕縛を解いた瞬間、銀の狼が天めがけて彗星のように駆けあがった。

その軌跡が闇の中に尾を引いて、俺が進むべき道を示す。

湿った草を掻き分けながら走り始めて程なく、社の方角からすさまじい咆哮が響いた。

鎮守神の声だ。

「――犬っころ！？」

俺は走る速度を上げる。

元より全速力で走ってはいるが、逸る心にとても足が追いつかない。

灯りを持たせた式神を頭上に飛ばし、寄りつく虫や餓を手で払いのけながら、何とか元来た道を辿った。

汗が、珠のような汗が、額から首へ、首から背中へと伝い落ちる。

全身が灼熱のように暑いのに、心は嫌な予感に冷えていた。

……だって、今の気配。

まっすぐ社目がけて飛んで行った、あの邪悪な気。

まだ信じられない、けれど認めなくてはいけない。

あれは――星の気配を秘めていた。

『――来るな！　小僧！！』

視界が開けた。
同時に鎮守神の怒号が飛ぶ。
突風が湧き起こり、熱気を孕んだ風が渦を巻き、社の周囲の草木をなぎ倒してゆく。
俺は思わず腕で顔をかばった。
重い音をたてて灯篭がなぎ倒される。森全体がきしむように悲鳴を上げる。
眷属達が吼えているのが聴こえた——憎しみのこもった威嚇の声。
その声の上から、鎮守神のものともまた違う、空を裂くような獣の声が重なった。
鳥類の鳴き声だ。

『魔の道に堕落(だらく)した鎮守神……貴様がこの上抗って、一体何を守るというの』

優美といってもいい、楽の音の如き声色だったが、はっきりと侮蔑の色が込められていた。
人ではない、雌の魔物だ。
……ちくしょう、誰なんだ一体！
俺が風に抗いながらもなんとか瞼をこじ開けると、まず視界に映ったのは、天を突くほどに巨大な甘茶色の双翼(そうよく)。
獰猛に湾曲した嘴(くちばし)を持つ頭部は鷲、しかし、筋肉の隆起した見るからに俊敏そうな胴体は獅子のそれ。

「——グリフィン……！？」

驚愕のあまり声が出ていた。だってこの獣、ほとんど伝説上の獣だ。しかも西洋の魔獣だから、実在することすらも知らなかった。
俺の声に反応して、それまで鎮守神に向けられていた鷲の黄色い双眸が、ぎょろりと俺の姿を捕えた。

まるで本当の鳥のように、横を向いたままこちらの様子を確認し、瞬きを繰り返す。

『その声。五辻の姫の護衛たる少年ね』

「――え？」

俺は茫然としていたと思う。

このグリフィンの体から発せられている気配、話す内容、全てが俺の予感が正しい事を示している。

なのにまだ信じられない。信じたくない。

彼が――あの人が、まさか。

まさかこんな非道なことをする、わけが――。

『――いかん！　小僧、早く逃げよ！』

鎮守神が叫ぶのを、俺は他人事のように聞いた。

ぼんやりと顔を上げ、そのやせ細った神を見つめる。

眼に映すたび胸が引き裂かれそうになる、弱った体、それに相反して生への渇望をみなぎらせている強い瞳。

（こいつを……）

こいつを、無理やり、起こした奴がいる。

封印をこじ開けて、その眠りを妨げ、こんな体で現世に放り出した人間が。

俺はそいつを許せないと思った。

全身から音もなく焔が迸り、気付けば刀を抜いていた。

（こいつを、墓から引きずり出したのは……！）

『聞こえぬのか、小僧！　こいつは貴様を狙っておる！　早く――』

「――お前。伊勢遥の召喚獣だな」

喚き立てる鎮守神の声を遮って、俺はグリフィンにそう言った。
闇に響く己の声を聞いて、不思議なほど落ち付いているなと思った。
怒り狂っているのに、胸の内は氷のように冷たい。
理由はわかっている。あまりにも怒りが烈しいから、ではない。
……悲しいのだ。

『だとしたら如何するの。ハルの憎む星師の小僧？』

グリフィンはゆったりと翼を広げながら歌うようにそう言った。
やっぱり、と俺は胸がふさがるような閉塞感を覚えた。喉が痛む。
刀を握る手に知らず力がこもり、絞り出すように低い声を出した。

「聞きたいことがある。答えろ」

俺はゆっくりと、鎮守神の方へと歩み寄って行った。
ちょうど、参道の真中だ。二頭の眷属たちが地に体躯を伏せ、微動だにもせずにグリフィンを睨みつけている。
彼らは主を守るために二頭で結界を張り、その印を結んでいた。
攻撃されれば反撃はできないだろう。
だから、俺は狼たちを背中に庇う位置で立ち止った。

『小僧！！』

いま一度、怒ったように叫ぶ鎮守神を黙殺して、刀の切っ先をまっすぐグリフィンに向ける。
黄色い瞳の瞳孔がまぶしいものを見るように細くなった。

「こいつの――こいつらの封印を解いたのは、あいつなのか」

押さえた声で俺は問うた。
焔がめらめらと、闇を揺らす。
ここに存在する者すべての色を照らし出しながら。
銀、緋（あか）、蒼（あお）。魔物だろうが神だろうが、みな同じように生きて呼吸しているもの達の色だ。
グリフィンは答えるまでに間を取った。けれどその反った翼と曲がった嘴は戦意を喪失していない。
鎮守神が、いつでも飛び出せるように低く身構えたのがわかる。
俺たちの間に緊張が膨れ上がった。
頬を、背筋を、つうと汗が伝い落ちる――。

『……ええ、そうよ』

やがてグリフィンは言った。
主人によく似た、甘く優しい、けれど一欠片だって容赦のない声で。

『お前と、そして、五辻の姫。邪魔な星師を消すためだけに、その犬は解き放たれたの』

どくん、と心臓の鼓動が俺の体を貫いた。
まるで喉元まで心臓が迫り上げているかのようだ。
血の脈動がうるさい程に耳の中で鳴り響いている。
怒りのあまり、視界が一瞬、真っ暗になった。

『早くその小僧を喰らうのよ、けがらわしい魔物』
「……止めろ」

俺は掠れた声で呟く。
グリフィンが、嘴を開いて嘲笑する。

鎮守神が背後で侮辱に身を震わせるのが伝わってくる。
ああ、傷ついている。俺は悟った。
そして――

『何のためにハルが自分の手を汚してお前などを呼び起こしたのか考えなさい。よぼよぼの鎮守神。それともやはり、山を失い、信仰を失ったお前はもう、なんの力も持たないただの老犬に過ぎないのかしら？』

グリフィンが、翼を広げて飛翔した。
それと同時に俺も限界を迎えていた。全身から呪力を解き放つ。
燃え上がる刀を地面に突き刺し、飛び散った土くれを顔に受けながら高速で呪を唱えた。――焔よ！

『焔縛（えんばく）！』

叫ぶと同時に、刀を中心として焔が宙に弧を描いた。
鞭のように長くしなやかに伸びた焔が、高く跳躍し、弾みをつけて突っ込んできたグリフィンの手足を絡め取る。
動物性のものが焦げる匂いが辺りにたちこめ、高い悲鳴が闇を裂く。
どん、と重い音を立ててグリフィンの体が地面に倒れ込み、そのまま俺は術を解いた。
飛び立てないように羽を足で踏みつけて、刀の切っ先を鷲の首元に突き付けた。

『小僧、お前……』

黄色い鳥の眼が、苦痛にまみれながら俺を睨みつける。
俺はじろりとその鷲の頭を見下ろした。

「何」

『……お前の任務はハルを守ることでしょう、なのに、私に攻撃を仕掛けて許されると思っているの……！？』

「お前にだけは言われたくねぇんだよ。この言いなり野郎が」

俺は怒っていた。猛烈に怒っていた。

何がって、ハル先輩もそうだが、そのハル先輩が明らかに悪しき行動をしているのに止めないこの召喚獣に対してもブチ切れていた。

しかもこいつが言った通り、ハル先輩は俺にとって任務の依頼人なので、ぶっ飛ばしてやることもできやしない。

だが、だからと言って、このまま引き下がれるわけもない！

俺は息をひとつ、吸い込んだ。

刀の切っ先に力を込めて、そして――

「俺はてめぇみたいな自己意思のない奴がいっちばん嫌いなんだよ、この獅子鳥。獅子舞野郎」

――暴言を吐きはじめた。

脇で、鎮守神とその眷属が、ぱちくりと瞬きをするのが見えた。

グリフィンが屈辱のあまり身もだえする。

『しっ……！　け、獣の王たるこの私に何たることを！』

「誰が王だ、バーカ。俺たちにちょっかい出してる暇があったら主人の暴走止めろ。だいたいグリフィンは欲に堕落した人間を処罰するのが役目なんだろう。主の命令だからって何でも従ってんじゃねぇぞ、この召使」

『この……半人前の、忌まわしい星師のくせして……！』

「忌まわしいのはどっちだ！！」

俺はついに怒り心頭に達して怒号を発した。
空気が揺れた。グリフィンが気押されたように嘴を閉じる。

「お前は……お前は、それでいいのか！　ハルが星師を憎めばお前も憎む。ハルが魔物をクズのように扱えばお前もそうする。そこにお前の意思はないのか！？　お前の正義は、忠義は、そんなものなのかよ！　――召喚獣になったからって己の誇りも品格すらも失うような奴に比べたら、いくら空腹でも俺の血に手をつけなかった鎮守神の方が百倍ましだ！！」

逆るような――我ながら驚くほどの感情の奔流であった。
鋭利な言葉の余韻が、尾を引いて闇空に響き渡る。
俺は言いたいだけ言うと刀を引いた。
大きく見開かれたグリフィンの瞳めがけて呪を唱え、眠らせると、ようやく背中を向けた。
茫然とした様子でこちらを眺めている鎮守神と眷属たちを横目に、口許に指を当てて高らかに指笛を打ち鳴らした。

『蒼路！　大丈夫だった！？』

たちまちの内に、木立を掻きわける音を立てて、白い猫又が登場する。俺は頷くと、柔らかなその背の上に飛び乗った。
そして僅かに高くなった目線から、鎮守神と眷属達に声をかける。

「――おい、行くぞお前ら」
『……行くとは一体？』
『どこに行くのじゃ？』

困った顔で首を傾げる眷属の間で、ただ鎮守神だけが、打たれたような顔をして俺の顔を見つめていた。

言葉は無い。
だが、俺には彼が何を考えているのか、少しわかる気がした。
思い切り頷いてみせ、そして笑ってこう言った。

「一緒に行こう。鎮守神。とりあえず飯を食って――それからちゃんと、話をしようぜ」

尊きもの

――父さんに、もう一度だけ会えるなら。
叶わないとはわかっている、けれど、もしも、本当にもしも。
ただ一度だけでいい、あの憧れの人に会えるならば。
聞いてみたいことがある。

＊＊＊

東の空から暁の光が輝きはじめる時刻。
つまりは早朝、黎明（れいめい）の時。
俺は花緒の背にのってひょっこりと、自宅であるマンションの上空に姿を現した。
見下ろす街が淡い群青（ぐんじょう）にかすみ、しかしながら、そこかしこに太陽の光である薔薇色を浮かべて、闇を排し、生の色を脈打ち始める。

「きれいだな……」

俺は感嘆に思わず声をもらした。
ひんやりとした朝の空気が頬を撫で、一晩中酷使したせいで熱を持つ眼もとをここちよく冷やしていく。
わずかに眼を細めて、俺は眼下の情景に魅入った。
君見丘、これが俺の守る街。
隆起した丘の上に並ぶ住宅街、人気のない学校、もうすでにぱらぱらと人影のみえる駅。
いっとう高台である町はずれには、筧家の屋敷が見えた。
まだ闇の残滓に覆われ、影に覆われている裾野の山林には、眼ざ

めの早い鳥たちが羽ばたいているシルエットが確認できる。

『この街、好き』

花緒の短い言葉に、心から賛同した。

答える代わりに夜明けの輝きを取りこみ輝く、純白の毛並みを撫でる。

花緒は己の肩越しに俺の顔を振り仰いで、左右色違いの眼を瞬かせた。

『降りるよ。蒼路』

「ああ」

答えると同時に、白い体が優雅にしなった。

ちょうど水に飛び込む様な姿勢で花緒は空を降下してゆき、あっという間に俺のマンションのベランダに舞い降りる。

大きな猫の頭が地面に軽く伏せられて、俺は造作なくその背から降りることができた。

「ありがとうな、花緒。色々付き合わせちまって、悪かったけど」

花緒の頬に手を伸ばし、そこをそっと撫でながら俺は言った。

彼女は髭をそよがせながら眼を閉じた。

『そんなことはない。鎮守神を捕獲してくれたから、助かったのはこっちのほう』

「うーん。捕獲したつもりはないんだが。まあ、あの体で野放しにされているよりは、ババアの結界の中に保護されてる方があいつにとっても良いだろう。少しは飯も食ってたし、元気になると良いなと思ってる」

俺は頬をかりかりと指先で掻きながら答えた。
どういうことかと簡単に説明すれば、さっき社で鎮守神とその眷属に見えた俺は、そのまま彼らをババアの屋敷へと連れて行ったのだった。
彼らは封印から解かれたばかりで弱っていたし、しかもそのまま放置すればハルに利用されてしまうこと間違いないという酷い状況にあった。
しかし、いくら弱っているとはいえ神は神。俺がどうにかできるレベルの存在ではない。
ゆえ俺は花緒とともに筧家の屋敷の門をたたき、ババアに事情を説明して、しばらく彼らを預かってもらう事にしたのだった。
……まあ、現実はこんなに簡単にはいかなかったんだが。それはまた後で詳しく説明する事にしよう。

『蒼路は本当に、わたしたちの良い理解者だ』

くすくすと花緒はわらうと、そのまま体を通常の猫の大きさに縮め、瞬くたびに明るさを増してゆく天空へと再び飛び立っていった。
俺は大きく手を振って、薔薇色の空に一点浮かぶ白い小さな姿を見送る。
やがて彼女の姿が朝日に遮られ、完全に見えなくなると、ふいと体の向きを変えて私室の窓に手をかけた。
がらがらと横開きにその窓を開き、靴を脱ぐと部屋の中へ踏み入る。
毎度のことながら、こういう風に星師として戦ってきたあとの帰宅は、ものすごく安心して気が抜けると同時に、ものすごく後ろめたい。
それは多分、いつも家族に心配をかけているということがわかっていながら、それでも星師としての仕事をやめられない自分に対し

ての後ろめたさだった。

「――ただいま」

呟く声は、低く小さく。ほとんど申し訳程度に。

けれど、足音を忍ばせて風呂場へと赴き、そこに真新しいタオルと着替えが用意してあるのを見た瞬間。

シャワーを浴びた後、水を飲もうと出て行ったリビングで、きちんとラップのかけられたハンバーグの一皿が残っているのを眼にした瞬間。

――後ろめたさはほんの少しだけ軽くなる。

許されているのかもしれないなと思う事ができる。たとえ、本当はどうであれ。

しんと静まり返った家の中で、穏やかに眠っているであろう母と妹、彼女たちのおかげで。

待ってくれている人がいるおかげで。

――俺はこうして、ちゃんと帰ってこようと思うのだ。

＊＊＊

風呂を浴びたあと、ハンバーグを食べて、ベッドに倒れるようにして眠りについた。

きょう一日で眼にした様々な映像が、色鮮やかで胸に迫る多くの画像が、眼を閉じた後の暗い視界をよぎってゆく。

遠くを見ているアンナさん、健気な花緒、銀の狼。

初めて眼にした西洋の魔獣、その、残酷な黄色い眼。

彼らとかわした言葉の残響が脳裏にひびく。

すでにうとうとし始めた意識のむこうに、遠く波のように打ち寄せる感情がある。

怒り、切なさ、悲しみ。

（ハル先輩……）

彼に対して激怒していた。いや、今も。

けれどどうしてだ、憎みきれない。あの碧（みどり）の眼を思い出すと胸が痛む。

鎮守神をあんなふうに扱われてさえ。

（……犬っころ……）

口から泡を吹きながらですら、俺の血に手をつけなかった誇り高き神。いや、もう、神ではない。

かつては神だった、けれど今は人を喰らい、妖怪へと転じた存在。

無理やりに封印を解かれて、彼はいまどんな気持ちでこの現世によみがえったのか。

（……堕落した存在だって、あのグリフィンは言ってたけど……）

俺にはそうは思えない。

絶対にあいつはそんな奴じゃない。

なにか理由があるんだ、きっと。人を喰わなければいけなかった理由が。

（でなきゃババアがあいつを受け入れるわけはねぇ）

あの人はすごい星師なんだ。

優しさをきちんと知ってはいるけれど、公私混同は決してしない。

だから、ババアが受け入れたということは、犬っころは絶対に悪い奴じゃないのだ。

（……親父……）

俺はそこで、襲い来る睡魔に耐えかねて、白濁しはじめた意識を手放した。

ゆっくりと、背中から海に沈むようにして、世界が形を失っていく。

（なぁ、親父。俺は間違っているのかな）

眠りに閉ざされる最後の瞬間、俺が想い返したのは、もうずいぶん前の画像。

闇に向かって歩いて行く、強くまっすぐな背中だった。

この問いを投げかければ、幼いころと同じように、きっとまた困らせる。わかっている。

けれどそれでも、どうしても教えてほしい。

（俺は、魔物も尊い魂だと思う）

きちんと呼吸をして、人と同じように必死に生きている、かけがえのない命なんだと思う。

あいつらは、虐げられるために生まれてきたわけじゃない。

そんなことのために生まれたんじゃない。

――そう思う俺は、間違っているんだろうか？

あかい目醒め

短い眠りの中で夢を見た。
とても、とても悲しいゆめを。

冬枯れた木立の中にひとりの女性が立っている。
着物を着たうしろ姿はひどく痩せて頼りない。
その人は、吐く息がまっ白く立ち昇るのにも、手足の指先が真っ赤に悴むのも、全く気が付いていない様子で、ずうっと木立の向こうを見つめていた。
灰色の乾いた空に小高くそびえる、山並みを。

（……め……）

その人は繰り返し繰り返し、あるひとつの言葉を呟いていた。

（ひざめ……）

呟いては山を見て、山を見ては呟いて。
やがてちらちらと小雪が降り始めても、太陽が傾き、辺りが薄闇に包まれ始めても、ずっとそこに立って、その言葉を繰り返していた。
――その言葉。
誰かの、名前のようだと俺は思った。
女性の声が、誰かを想って発せられる音をしていたから。

（緋醒）

ひざめ、と。
彼女はまた、その名を呼んだ。
そしてやがて俯いた。僅かに傾いた肩ごしに、その顔が垣間見えた。
頬のこけた青白い顔。唇も血色が悪くかさついて、見るからに尋常ではない様子であった。

（許してくれ、緋醒）

その人は、言った。

（もう、会えなくなるんだ……）

――そこで眼が醒めた。

『蒼路、怪我はなし、熱もなーし。でも、他の魔物の匂いがするなぁ。どうしよっかな、今日は登校させて大丈夫かなぁ～？』
「……」

目ざめていっとう始めに視界に飛び込んできたものは、俺の上に腹ばいになり、騒いでいる一頭の青い鹿だった。
見ていた夢の名残が一気に脳裏から?き消えて、俺は思わず頭を押さえる。
……この状況は、どうしたことだ。
俺はまだ夢を見ているのだろうか。
いや、それにしては腹の上が重すぎるし傷も痛い。

『この匂い、どうやらあの鎮守神だよね。あ～あ、蒼路ってばやっぱり一人で出かけたんだ。だから一人にしておくのは反対だって言ったのに。深紅も心配なら心配って素直に口にすればいいのにさー、

つんつんしてばっかりいるからこういう事になるんだよ』

寝起きの頭にべらべら喋くる鹿の声がわずらわしい。

青藍の声は丸っこくて高い。

耳触りの悪い声ではないが、決して朝起きてすぐに聞きたい音でもない。

俺は手を伸ばし、眼前でゆらゆらと揺れている角をがっしと掴むと引っ張った。

とたんに青藍は、己の危険を察知して泣きわめくひな鳥の如く、ぴいぴい声をあげはじめる。

『痛いっ！　蒼路、何するんだよ、離してよ！』

「それはこちらのセリフではないのか……」

『僕は深紅に頼まれたの！　離せってば、角は鹿の急所なんだよー！！』

角を引っ張られているから、青藍は頭を伏せた体制で首をぶんぶん振り、必死に俺の手から角を解放せんと暴れる。

ひづめの付いた四肢に体重をかけ、精一杯俺の腹の上に踏ん張るものだから、傷が痛い痛い。

俺は堪え切れずうめき声を上げ、青藍を投げ飛ばすように退かすと起き上がった。

そのまま床にでも激突すればいい、と本気で思ったのだが、おあいにく、身軽な青鹿はそのままひらりと空中に逃れ、停止した。

黙っていれば愛らしい黒い眼が、非難と恨みのこもった視線でじとっとこちらを見つめてくるのに睨み一発で答えると、俺は薄いタオルケットを跳ねのけてベッドから飛び降りた。

「だー！　お前、朝っぱらから何なんだよ一体！　いくら主の頼みだからって、人の寝起きを楽しげに邪魔すんじゃねえっ！」

『邪魔はしてないさ。ただ、調べてただけだよー、蒼路がきのう、深紅が見ていないところでまた何か無茶をしやしなかったかと』

ぎくり。

青藍のことばに思いっきり頬が引きつった。が、別に何も悪いことはしていないと思いなおし、俺は寝巻を脱ぎ捨てた。

「……べつに。おとなーしく過ごしてたぜ」

『嘘がへったくそだなあ！　相変わらず！　魔物の匂いぷんぷんいしてるよ！？』

「うるせぇな！」

俺は叫んだ。

青藍はおしゃべりだ。はっきり言って騒々しいことおびただしい。なぜこいつがあの冷静沈着な深紅の召喚獣になどなれたのか、俺は常々不思議で仕方がない。

「つうか深紅なら、わざわざ調べなくたって俺の行動くらいお見通しだろうよ。お前はいったい何をしに来た」

『だからー、深紅に頼まれて』

ワイシャツに袖を通しながら尋ねると、青藍はふよふよと部屋の中を飛び回りながら答えた。

さして広い部屋でもないのですぐに端から端に行き辺り、結果として彼はくるくる旋回しながら飛んでいる。

『蒼路の怪我の具合はどうか見て来い、見てまだ動かない方が良さそうなら学校休ませろって言われたの。あと、どうせ昨日、深紅が見てないところで鎮守神とひと悶着やらかしただろうから、その様子も探って来いって』

「……そら見ろ。やっぱお見通しなんじゃねぇか」

ふうとため息をついて着替え終えると、俺は部屋の時計を見た。六時七分。昨日の夜におかずを作ることができなかったから、今日は一から弁当を作らないといけないのだ、青藍に構っている暇なんぞ全くない。

「怪我なら問題ねぇから、学校は行くぞ。それより深紅は大丈夫なのか。昨日、ハル先輩は何か面倒なことしなかった？」

部屋のドアを開けながら青藍に尋ねる。

まだ寝ているであろう母と妹を気遣って、自然と声は小さくなった。

『昨日は存外大人しかったよ。こっちが見張ってるのには当然気が付いてるんだろうけど、敢えて突っかかって来るようなこともなく。深紅が拍子抜けするわね、って言ってたぐらい』

「はぁん」

俺はかすかに笑みを漏らした。彼女のその言い方は想像に易い。昔っから生真面目に過ぎる生真面目な性格をしているから、深紅は何事にも全力投球なのだ。手抜きを知らない。

「まぁ、無事なら良かった。ハル先輩も」

廊下をすたすた歩いて行き、リビングのドアを開けた。

瞬間だった。

俺は眼の前に開けたリビング、そこに、既に灯りがついていることに気がついた。

ぎょっとして視線を巡らせると、よりによって藍が、パジャマ姿

でソファに腰掛けてオレンジジュースを飲んでいる。
――げっ！？
思わず背後を振り仰いだ俺の脇を青藍がすり抜けたのと、藍がこちらに気が付いて顔を上げたのはほぼ同時。
「あ、お兄ちゃん。お――」
はよう、と続くはずだった藍の言葉は中途で途切れた。
それもそのはず。
彼女の眼は……リビングの天井付近にふよふよと浮かぶ青い鹿の姿をしっかりと捕え、くぎ付けになってしまっていたのだ。
驚愕の色をいっぱいに湛えたその眼差しを一身に受けて、さすがの青藍も気がついたらしい。
気まずそうに俺をふり返った。
わずかな沈黙が流れたのち、彼は言った。
『……蒼路……もしかして』
「……もしかするんだよ」
はあー、と再び頭を押さえながら俺は答えた。
肺の奥からため息が出てくる。そうなのだ。
藍は――魔物が見えるのだ。
＊＊＊
「つうわけで、勝手に青藍をよこすのはもうやめてくれ」
そのあと、登校した学校で俺は深紅に物申した。
時はホームルーム直前、場所は二年生の廊下。

深紅ははじめこそうっとうしそうに俺から眼を背けていたが、話を聞くに従って、大きな黒い瞳を見開いて驚きを露わにし、最終的には素直に謝ってくれた。

「……そうだったの。悪かったわ。ごめんなさい、まさか妹さんに霊感があるだなんて思わなくて。それに、ランが勝手に家を飛び回ったみたいで、そちらもごめんなさい。厳しく申しつけておくわ」

「ああ。頼む」

俺は頷いたが、怒りは既に消えていた。

深紅が言ったように悪いのは勝手に動き回った青藍であるし、何より彼女はすぐに己の非を認め、謝ってくれた。

プライドはエベレストより高いが、深紅は己を過信しない。

他人に対しても自分に対しても、不正あらば正し、けして踏みにじられることのない、真に毅い心を持っている。

俺は彼女のそういうところが好きだった。

……って、べべべ別にヘンな意味じゃねえからなっ!?

「っていうか！　えーとそうそう、お前もう怒ってないわけ？」

自分で自分の感情にどぎまぎしてしまった俺は、いささか無理やりに話題を転換した。

すると深紅は軽く目を見張り、それから何故か、ぷいと俺から目を逸らしてこう言った。

「……なによ、いきなり」

「え？　いきなりっていうか、昨日あんだけキレてたくせに、今日は存外ふつうだなあと思って」

俺は言った。言いながらさりげなく深紅の顔色を観察する。

わずかに赤いような気もするが、いつもより血色がよく、目立った怪我もない。
青藍が言ったように昨日は大きな出来事はなかったようだ。
俺の視線を受けて、彼女は居心地悪そうに小さくつぶやいた。

「べ、べつに、本気で怒ってたわけじゃない」
「えー？　それであんなビンタするかよ？　結構効いたぜ、あれ」
「うるさいわね！　そんなことよりお前、傷の具合はどうなのよ！？」
「え？　傷？」

意外な深紅の言葉に俺はきょんと目を瞬く。

「ああ、これ。ほとんど良いけど？　体力だけは自信あるからな、もう動いても問題はない」

言いざま制服の上から腹をぽん、と手のひらで叩き、笑ってみせる。
すると深紅はなぜか大きく息を吐いた。
華奢な肩の線が呼吸に大きく上下する。
俺は深紅の質問の意図を計りかねて首をかしげたが、彼女はすぐに話題を別のところに移してしまった。

「……それよりも、蒼路って妹がいたのね。知らなかったわ」
「うん」

軽く頷いて、俺は壁に背中を預けた。

「俺が里を出た翌年に生まれたんだよ。つまり、親父がいなくなる年に出来たこども」

「そう。そうだったのね。ではもう、六歳なんだ」

親父という言葉に反応し、僅かに顔色を翳らせた彼女を見て、俺はつとめて明るくこう答えた。

「そ。可愛いぜ。一回、会いに来いよ」

「わたしが？」

軽く眼を見張った深紅の表情がなんだか可愛らしく、俺はまた少し口角を上げた。

「うん。母さんも、今回の仕事の話をしたら会いたがってたし――歓迎するよ。俺も飯つくるし」

「蒼路、料理できるの！？」

「失礼だなぁ、お前。できるよ。母さん働いてっから、うちの家事は分担制。こうみえて炊事洗濯は得意分野なんだぜ！」

「それってもしかして、お前の唯一の特技なんじゃないの？」

「……うるせぇな！　唯一の、は余計だ！」

たちまち噛みついてやると深紅は笑った。

珍しく。声を上げて。

口許に手を寄せて、いつもは怜悧な印象すらある声色を、鈴のように響かせて笑う――その様子が、あんまりきれいで。

思わず見入ってしまったところで、タイミング悪く予鈴がなった。

「あら、時間だ。もう帰った方がいいわよ、蒼路」

たちまち深紅はいつもの無表情に立ち戻る。

おのれ、と内心で予鈴を呪いながら俺は頷いた。

「……おう」

そして別れようとした刹那、重要なことを思い出して、俺は踏み出しかけた足を戻した。

ふり返る。

「ああ、それから深紅。ハル先輩のことなんだけど」

「何？」

いまや教室のドアに手をかけていた深紅もふり返った。

振り向いた拍子、額の星が垣間見えて、俺は思わず自分の右手を意識する。

手甲をつけて、ふだんは痣を隠している右手。

「多分もう知ってると思うけど。鎮守神を起こしたの、あいつだ。しかも昨日の夜、俺に召喚獣を差し向けてきやがった」

短く昨日知った事実を伝えると、彼女はわずかに不快そうな表情をした。

眼をついと細め、柳眉を軽く寄せて。

「――先輩、今日は午後からいらっしゃるそうよ」

と言う。俺は軽く瞬いた。

「え。マジ？」

「ええ。多分、体力の消耗が激しいんでしょうね。そういう余計な事ばかりしているからだわ」

微かに苛立った声でそう言うと、深紅はではね、と黒髪をなびか

せて、教室の奥へと消えて行った。
その後ろ姿を見送ってから、俺も歩き出す。
時間が時間のために、自然と早足になった。
階段を駆け下りながら、ある一つの問いを、今まで何度繰り返したかしれないその問いを、誰にともなく投げかける。

――なんで顔なんだろう。

なんで深紅の星は、顔にあるんだろう。
彼女みたいにきれいな女の子にとって、それはあまりに酷な話だ。
変わってやりたいと本当に思う。
無理だと知っていても、それでもどうにかして。
彼女の担う苛酷な運命の、その内わずかでも、俺が背負うことができたらと。

（いや、できたら、じゃないな……）

ぐっと右手を握りしめた。
身の内でばちばちと、焔が音を立てて燃える。
できたらじゃない。やるんだ。

深紅を守るために。
その苦痛を少しでも和らげるために、俺は星師になったのだから。

というわけで、意気込んで廊下を走り抜け、教室に飛び込んだ俺は、この時まだ気が付かなかった。
一頭の銀の狼が、開け放しになった廊下の窓枠にちょこんとお座りして、俺を見つめていた事に。

碧の瞳

午前中は面倒くせえことに二時間連続で体育だった。
しかも剣道。
この暑い夏に剣道着を着せて体育館で授業させるとは……毎度思うが学校側は俺達を殺そうとしているのではないだろうか。
女子なんてプールで水泳なんだぞ、水泳！　なんだよこの違いは!?
俺は昨日ほとんど徹夜に近いんだ、睡眠は二時間ぽっち、おまけに怪我もしてんだよー！
……とまあ、実際はそんなことを言えるはずもないから、授業も出るしかないんだけどな。

「高村あ、お前、昨日、よくも逃げやがったな！」

試合中、ここぞとばかりに竹刀を振るってきた石岡にそう言われても、心身ともに疲れている俺はもう言い訳すら面倒くさく感じる始末。
彼の一撃をかるーく受け流しながら空とぼけた。

「あ～？　何のことかな石岡くん」

受け流した後は、すくい上げるように、こちらからの一撃を返す。
しゅっ、と空気が裂ける快い音が立ち、石岡が若干ビビった顔で一歩退いた。
その表情に俺はくつくつ笑みを漏らした。面白え。

「と、とぼけるんじゃない！　お前がお前が逃げたあの後、俺は一人で永富に怒られて散々だったんだぞ！　しかもその後もお前帰って来ないし、帰って来たと思ったら夕方で、もう下校時刻だし！　学校生活やる気あんのか！」

やや離れた位置で間合いを取りつつも、そんな風に騒ぐ石岡。
彼の問いに対して俺は無情なほどきっぱり答えた。

「ないね」

「……このやろう！」

彼はとたんに突っ込んできた。どうやら逆鱗に触れたらしい。
面越しに俺をぎらりとした眼でにらみつけ、彼は叫んだ。

「お前に深紅さまのお傍に寄る資格はなぁいっ！」

同時に竹刀を高く掲げる。そのままストレートに振りおろして面打ちを取ろうというつもりのようだが――

「あーはいはい、五月蠅いうるさい」

――この俺が深紅の名を出されて黙っているわけがなかろう！
俺は軽く床を蹴り、石岡の間合いに入り込むと、その胴を打突（だとつ）した。

「逆胴打ち！　高村、一本！」

体育教師の声が響き、俺の勝利が決定する。
軽く拍手が起きて俺は面を外す。顔をゆすって汗を振るい落とした。

たしか、これでクラス一位か。ってことは今度行われるクラス対抗の試合にも出ないといけない。

……面倒くせー。

「今日はここまで！　各自片づけをしてから着替えて教室に戻るように」

教師が言い終えない内にチャイムが鳴り、ようやく午前中の授業が終了した。

「ちくしょ～、勝てると思ったのに……」

「百年早ぇよ」

呻いている石岡の手を引いて立たせ、器具を片づけにかかる。

ふと目線をやった入り口に何やら集まっている女子の集団が見えて俺は首をかしげた。なんだろう。

「おい、石岡。あの女子どーかしたのかな」

ふり返って聞いてみると、石岡は何故か忌々しげに舌打ちをした。

「……勉強ができないってことは男の障害にはならないってことだろ。……よかったなー高村」

「はあ？」

意味が判らなくて首を傾げた俺に対して、石岡はなぜか軽く瞠目した。

「え、お前、まさか自覚ねーの！？　勿体なっ！」

「意味がわからん」

何の話だ、と俺は肩をすくめて再び片づけの作業に戻った。

「石岡、お前だいじょうぶか？　さっきの一撃、かなり手加減したつもりだったけど」

「お前がバカなのはしってたけど、鈍感だとはしらなかったよ……」

「だからー、何の話」

喋りながら片づけをしていた俺だったが、ふと、この後の昼休みには深紅との約束があったのを思い出し、あっと大きく叫んでいた。

「悪い、石岡！　俺、先行くわ、約束あった！」

言うが早いかだっと走り出して手を振る。

石岡は、近頃恒例のパターンになりつつあるが、俺の背後でぴーちく喚いた。

「あ、なんだよ高村、待てよこらっ！　お前最近付き合い悪いぞ！？」

「結構」

ふり返らずに、俺はちいさくほほ笑んだ。

深紅に会えるのなら、誰に何と言われようが構いはしない。

＊＊＊

しかして、近頃の俺は万事が平和に進んだためしがない。

この依頼を受けて以来、なんだか毎日怪我してるし、気付けばいつも戦っている。

今までだってババアのお使いで仕事はやらされていたが……今回

は俺個人の受けた依頼だし、何よりも学校の中での仕事だ。
俺もいろいろと敏感になっている。
そんなわけで、着替え終えてからいったん教室に戻り、そこから弁当片手に屋上へと歩みを進めていた俺は、ふと神経に触れるものを感じて窓の外に眼をやった。

（――……妖気？）

かるく眉を潜めると同時に星が痛んだ。
だが向けた視線の先には真夏の白い日差しを受けて、疲れたような緑の木立が生い茂っているだけ。
俺は立ち止ると右手にはめていた手甲を外した。
露わになった星に神経を集中し、いま一度外の風景を見つめる。
すると、さわさわと微かに揺れていた緑の木立の合間から、するりと細長い影が滑りだしてくるのを捕えた――蛇！
ぬめぬめと蠢く太い身の丈はゆうに一メートルを超している。
緑がかった鱗が木漏れ日を反射して、毒々しい光沢を放った。
明らかに普通の蛇ではない。
思わず窓に手をかけて身を乗り出した俺だったが、さらに信じがたいことに、蛇は一匹ではなかった。同じ蛇が次々と、辺りの木立やら草の茂みやらから湧いて出てくる。
何かに感応されたかのように後から後から登場し、ひとつの方向を目指して動きはじめたその数――捕えただけで十数匹。

「ちょっ……どういうことだ！？」

即座に胸ポケットからノートの切れ端を取り出して式神を創り出し、屋上へ向かっているはずの深紅の元へ飛ばす。事態を知らせるためだ。
そして即座に駆けだした。

「俺の星をかいくぐって侵入するとは……いい度胸じゃねぇか！」

全力疾走して廊下の奥、この時間には人気のなくなる特別教室棟に渡る。周囲に人目がないのを確認してから、窓を開けて地上へと飛び降りた。

軽い衝撃が足もとから突き上げるのをやり過ごし、再び駆けだそうとした時、俺は気がついた。

しゅるしゅると、衣擦れのような奇妙な音が、俺を中心としてちょうど八方から聞こえてくる。瞬時に全身が緊張した。

その場で構え、神経を研ぎ澄ませて気配を探る。

やがてあの緑の蛇がゆっくりと。だが大挙して俺を取り囲むように集まってくるのが見えた。

陽に焼けたアスファルトを這うその細長いシルエットは、まるで不吉な文様のように、地に黒く印を描いている。

「……俺が狙いか？」

低く呟き、俺は眼をわずかに細めた。迷う。

真昼に力を使うわけにはいかないが、こいつらは明らかに俺を狙っている。

しかし蛇の正体を見極めない内には攻撃すること自体ためらわれる。

――どうする？

迷ううちに蛇の群れはどんどん近付き、やがて俺の手前一メートルほどの地点でようやく動きを止めた。

水銀の色をした瞳のない眼が言葉なく俺を見つめ、紅い舌がちらちらと燐光のように蠢いている。

「やるしかないか……」

再び呟いて、星に左手を這わせた。
刹那。
『星の子！　いかん、退け！』
怒号（どごう）一発、天から降って来た銀の矢が視界を駆けた。
俺は瞬く。昨夜は月明かりの元で眺めた白銀の毛並みが、今は太陽の光を受けて七色に輝いている。
「眷属！？」
そう、鎮守神の眷属である銀狼が、緑の蛇の群れに突っ込んでゆくところだった。
「お前、何でこんなところに……！」
『話はあとじゃ、それよりも、これは術者の式神！　お前の周りに魔方陣を描くための手段にすぎぬ！　早くこの場を離れよ、術中に嵌まるぞ！』
蛇を次々噛みちぎりながら狼は澄み切った青い瞳でこちらを振り仰ぐ。
俺はといえば、指摘されて初めて蛇の描く文様が魔方陣だと気がつく羽目になり、盛大に舌打ちをしながら蛇を焔で焼き払った。
手ごたえのない感覚が腕を伝う。
くそ、式神なんて一体誰が――？
その問いは、燃え上がった蛇が緑の葉っぱと化して辺りに舞い落ちるのを目にした瞬間、雲散霧消した。
緑。

「……まさか」
「そう。――そのまさかさ」
甘い声が、突如としてその場に響き渡った。
甘く優しい声、なのに、背筋を氷の手で撫でられるような、ぞっとする殺意を孕んだ声。
俺はとっさに身を固くした。
応じるように眷属が、ひらりと目前に降り立つ。
銀の毛並みを逆立てて威嚇の吠え声を上げ、彼は全力で眼の前に立つ人間を敵視していた。
つまり――ハル先輩を。
「へえ……」
凍て付く碧の双眸が、まず眷属に、次いで俺に向けられる。
それだけでもぞっとするほどの威圧感だった。
この人は既に人でありながら人でない、と俺は悟った。
眼を合わせるだけで胸の内に黒く重いものが凝ってゆくこの感覚――闇を。ハル先輩は蓄え始めてしまっている。
「……やるなあ、高村くん。神狼を配下に下したのかい？」
口調は柔らかくとも、明らかな軽蔑を――ほとんど憎悪と言えるそれを宿した声だった。
「……そんなんじゃねえよ」
短く答えて、俺はかるく息を吸う。
碧の眼から目を逸らさないように、ぐっと堪えた。
落ちくぼんだ眼窩（がんか）、げっそりとこけた頬。

数日前と比べて様変わりしてしまった、その秀麗な容姿。
明らかに生気を吸い取られてしまっている。
――駄目だ。同情するな。

「こいつらは、俺の配下なんかじゃない。そんなものに成り得るわけがない。こいつらは、自分の意思で自分のしたいことをする、誇り高い魂だ」

そう、こいつらは自由なんだ。
誰の指図を受ける義務もない。
俺は言った。

「それは鎮守神もあんたのグリフィンも――それからアンナさんだって、同じ事だろう？」
「……戯言だな」

アンナさんの名前を口にした瞬間、碧の眼に暗い閃光が走った。
俺は即座に刀を取りだした。迷ったら、負ける。

「きみにアンを語る資格なんてないんだよ、星師」

先輩の輪郭からじりじりと黒い燐光が立ちのぼり、揺らめくそれは見つめる内にやがて五芒星を宙に描きはじめた。
俺がはっとしたのと、先輩の背後に出現したその魔法陣から音もなく巨大な鷲の頭が現れ出でたのはほぼ同時。

「――眷属！　退けッ！」
「オーア！」

俺の悲鳴にかぶさるようにして響いたのは先輩の声。

その声にグリフィンは反応した。
鋭く湾曲した嘴をぐわりと開いて前へ飛び出し、まっすぐに銀狼の脇腹にかぶり付く。
俺は全身から血の気が引くのを覚えた。嘘だ。

「……眷属――――ッ！！」

グリフィンの嘴は寸分の狂いなく狼の腹を食いちぎった。
大量の血潮が飛び散り、狼が苦悶の唸り声を上げる。
眼の前があかく染まる光景を悪夢のように見送って、俺は気づけばグリフィン目がけて思い切り刀を振りかぶっていた。

「よくもやりやがったな！！」

怒りが赤い火花となって脳裏に炸裂する。
俺の焔はそんな俺の心情を鏡のように反映し、火柱のようにめらめらと高く燃え上がった。
怒りの一閃は、しかし、グリフィンの血濡れの嘴によって受け止められる。
がちりっ！　と石が打ち合うような重い音を立てて、俺の刀は宙のある一点で喰いとめられてしまった。
グリフィンの巨体の重さが容赦なく刀の薄い切っ先にかかる。
しかし俺は刃が折れる可能性などまったく危惧せず、ぎりぎりと全体重を刀にかけた。

「ざけんじゃねぇぞ……」

睨みつける先でグリフィンの黄色い眼が剣呑に輝いている。
彼女も相当な力で刀を受け止めているらしく、苦しげな呻きが鳥の喉からぐるぐると漏れた。

「……退きやがれ獅子鳥ッ！」

咆哮と共に全身から呪力を爆発させる。
眼に見えないその力の放射をまともに食らい、グリフィンは吹っ飛んだ。
巨体がアスファルトに沈みこみ、重い振動が足もとから突き抜ける。
俺は即座に眷属の元に駆け寄ろうとした――が。
鈍くきらめく銀色の刃が行く手を阻んだ。

「……てめぇ、いい加減にしろよ」

俺はぎりぎりと歯ぎしりをして短剣の使い手を睨みつける。
彼はにこりとほほ笑んだ。

「それはこちらの台詞。昨日も思ったけど、君ってほんとに馬鹿だよね――低俗な魔物なんかを庇って」

先輩の肩越しに、グリフィンがよろめきながらも再び翼を広げ、眷属に襲いかかるのが見えた。
傷ついた銀狼も、下肢をふんばりながら凶悪な口を開けて猛然とグリフィンを迎え撃つ。

「憎むぞ、あんた！」

俺は本気で呟いて、先輩の腹にひじ打ちを喰らわせた。
だが先輩も素早い。即座に身を退き攻撃態勢を取った。
銀の短剣が太陽の光を弾き、一瞬、眼がくらむ。

「望むところさ。本気になれよ、高村蒼路。でないと君が死ぬんだぞ」

ぎんっと振り下ろされた一閃は、予想をはるかに上回って重い！

（……こいつ、本当に強ぇ）

その一太刀を受け流し、切り返しながら俺は内心眼を見張った。
半星なのに、召喚獣を召喚したままでこれほどの力を操れるとは。
完全な星師だって召喚術には相当な呪力と集中力を要するものだ。
ほとんどの術者は魔物を召喚している間は身動きが取れない。
深紅はできるが、あいつは天才だ、比較の対象にはならない。

（……けど、憑依された状態でこんなに力を使ったら……！）

刀と剣で烈しく打ち合いながらも、俺の心を焦りと恐怖の入り混じった感情がかすめてゆく。
だって、目前に迫った先輩の顔を見れば、事態が緊迫していることぐらいはすぐにわかる。
あきらかに尋常でない、顔色。唇。ぱさぱさの髪。

「完全な星を持っていてこの程度の力か？」

碧の眼が酷薄に笑う。
狂気に取り付かれたようなすさまじい攻撃の嵐の中でも、あまりに冷え切って、見ているこちらの胸が痛くなるほどの悲しい――そう、哀しい碧の瞳。

「うっせ……星師は、星師を傷つけちゃいけねーんだよ！」

俺は咄嗟に身を退いた。
後ろ足で一歩下がり、間合いを取るようにして刀を構える。

汗が眼に入って酷く染みる。
かるく頭を振ってそれを振るい落としながら、ふと異常に気がついた。
――どうして誰も現れない？
白昼堂々、場所がいくら裏庭とはいえ、生徒が凶器を持ってチャンバラをやってるんだぞ！？
（もしかして、最初の魔方陣に何か……）
俺は思い当たったが、時すでに遅しだ。
先輩が短剣を振りかざして助走をつけたのを、舌打ちしながら迎え撃った。
「ちくしょう、深紅、はやく来……っ！？」
しかし、体重を移そうと僅かに足の位置を移動しようとした瞬間、異常に気がつく。
手足が――動かない。
無数の細かな蔓を持つ植物がアスファルトの割れ目から伸び、俺の手足に絡みついているのだ。
「なっ……なんだ、これ！」
「馬鹿にするなよ？　高村くん」
身動きを封じられた俺の耳元を甘やかな声がくすぐる。
ぞ、と仰け反った瞬間、息も止まる程の重い衝撃が右肩を貫いた。
「――――ッ！！」
灼熱の温度の後に、信じられないほどの激痛がやってくる。

俺は声にならない悲鳴を上げた。
腕がしびれ、たちまちの内にその感覚を失う。
手のひらから刀が滑り落ち、先輩がそれを革靴の足もとで思い切り踏みにじった。

「弱いな……」
「う、ぁあッ！」

囁きと共に、先輩が躊躇なく俺の肩から剣を抜く。
痛みのあまり全身がびくりと痙攣する。傷口からぼたぼたと鮮血が滴り、制服を汚した。
ワイシャツのの白い布地を血が染めてゆく速度に比例して、右肩から広がるすさまじい熱と、激痛があった。

「……毒……か……！？」

意識が白く霞がかかっていく。俺は必死で頭を振った。
血濡れた短剣を手にしてほほ笑んでいる先輩を、唇を噛んで睨みつけた。

「そう。なかなか効くだろ？　人の血肉を糧に成長する、寄生植物の種を撒いたんだ。この間も撒いたけど、どうやら効かなかったみたいだから。もう一度」
「……あんた……狂ってるよ……」

空いた左手で右肩の傷を押さえながら、俺はぜいぜいと言葉を紡ぐ。

「もうやめろ、こんなこと……！　こんなことをして、何になるんだ！」

「だから、何度も言っただろう？　君を殺して、あの忌々しい姫君を殺して。僕はアンを守るんだ。そしてもう二度と、彼女を離さない。苦しめたりしないって誓ったのさ」

「違う！！」

俺は必死に首を振った。叫ぶ。

「俺を殺したって、状況は何も変わりはしない！　むしろあんたが、やり場のない苦しみにどんどん追いつめられていくだけだ！」

「わかってないなあ……本当に」

ハル先輩は嘲笑し、指をぱちんと打ち鳴らした。

途端に俺を捕縛していた植物が消えうせて、俺はどさりとアスファルトの上に投げ出される。

かつかつと足音を立てて、眼の前に先輩の皮靴のつま先が近づいてくる。

「高村君。僕は、苦しんでなんかいないんだよ」

ハル先輩の声は、まるで夢を見ているかのように、遠く幻想的に響いた。

白刃が眼前にひらめき、視線を上げた先には、美しくほほ笑んでいる先輩の顔があった。

「アンの幸福が、僕の幸福。彼女が僕の傍で生きていてくれることこそがね」

「……ちがう……」

俺は眉を潜めて、そう喘いだ。

痛い。それに、熱い。

額から脳天が燃えるように熱くて、眼をあけていられない。
だが俺は毒に朦朧とする意識を敢えて痛みに集中させてこらえ、苦いものの込み上げる喉から必死で言葉を絞り出した。
怒りが――悲しみが。
もう、爆発しそうだった。

「……死んで……る、んだよ……！」
「何？」

怪訝そうな先輩の声に、何とか顔を上げて彼を見据えた。
肩の傷口に左手をめり込ませる。
ずぶりと、嫌な感触が痛みをさらに燃え立たせた。

「――アンナさんはもう、死んでしまっているんだよ……っ！」

叫ぶと同時に左手を傷から引き抜き、たっぷりと滴る血潮を先輩めがけて浴びせかける。
眼つぶしだ。

「現実を見ろ！　アンナさんはこんなことは望まない！　あの人は、実の兄が死んだ妹のためにその手を血に汚すなんてことを、絶対に許したりはしない！！」
「く……そっ！」

ハル先輩は俺の血糊をもろに喰らい、目元を手で押さえてよろめいた。
その瞬間をねらって突進し、体当たりを喰らわせて先輩を転ばせると、俺は地面に転がっていた刀を拾い上げた。
同時に全力疾走を開始する。

「畜生が……オーア！」

血のりで眼が開かない先輩は、しかし、耳だけで俺の動きを察知したらしかった。

よく通る声を張り上げて己の召喚獣を命令を下す。

しかしこの頃には俺は眷属の元に辿りついていた。

翼を反らせ、嘴を大きく開いて迎え撃ったグリフィンの腹に、刀の柄で打突を喰らわすと、眷属から引きはがした。

「眷属！　大丈夫か、眷属！！」

『……星の子……』

この時には眷属は、下肢の動きが完全に不自由になっていた。

前脚だけで体を起こし、ふらつきながら俺を見上げる。

『構うな……！　そなたはそなたの戦いに、集中しろ……！』

「何言ってんだ馬鹿野郎、助けてくれた奴を巻き込めるか！！」

怒号を発して、なんとか自由になる片手で、下手ながらも治癒の術を施そうとした俺だったが――

「――もう一度、言ってみろ！！」

先輩の吠え声とともに背に凄まじい衝撃が走った。固く重いもので殴られた――いや、蹴られたのだ。

肩の傷が、腹の傷が、もうどこもかしこも痛い。

意識が一瞬まっ白になった。

四肢に力が入らず、せめてもと、眷属に覆いかぶさるようにしてうずくまる。

「僕が愚かだと……アンが、死んだなどと……よくも、よくも！！」

狂ったように叫びながら、先輩は何度も何度も俺の背中を蹴りあげる。その度に呼吸ができず、文字通り血反吐を吐きながら俺は堪えた。

腹の傷がいい加減、開きそうだ。

体の下で眷属が喚くのを他人事のように聞いた。

『どかぬか、星の子！！　私は主様より頼まれて、そなたを守りに来たのじゃ、そなたに守られては本末転倒もいいところ……！』

「どかねえ、よ」

へへ、と俺は小さく笑い、先輩に蹴りあげられる律動のなか、眷属の蒼い澄んだ瞳を見詰めた。

「俺は動物には、優しいんだ」

『……！』

返す言葉を失い、おろおろする眷属の顔が――次の瞬間、見えなくなった。

「うわぁあぁぁ！」

先輩が、叫びながら一際強く、背骨を蹴った。

それが利いた。

痛みが臨界点に達したというか……そろそろ、キツイ。

マジで殺されるかもな、と俺は薄れゆく意識のなかで考えた。

それはまずい、何よりも、先輩にとって。

先輩がその手を血に染めれば染める程、アンナさんが悲しい顔をするんだ。

それは見たくない。
アンナさんは、太陽みたいに、ひまわりみたいに笑っている方が似合うんだ。

（――俺はまだまだ、弱い……！！）

く、と唇を噛みしめて眷属の柔らかな体を守るように抱きしめた俺は、ふと、この身を包む風を感じた。
それは、竜巻のように烈しく周囲の建物を軋ませて俺の体を揺らしたが、それでも何か、とても柔らかな風だった。
重い物が二度、なにかにぶつかるような音がして、直後地面が上下に揺れる。
眷属が驚愕したように呟いた声が、朦朧とする俺の耳朶を打った。

『……主様……！』
「え……」

のろのろと薄眼を開きながら俺は、そういえば先輩の攻撃が止んだことに気がついた。
ゆっくりと、首を巡らせてふり返る。漆黒の毛並みが視界を覆った。

「鎮守……神」
『お前は本当に変わっているな、星持ちよ』

瞠目する俺の肩に、鎮守神の尾が伸びてきてそっと触れた。
見た目よりずっと柔らかく、なめらかなその毛束が傷口を撫でると、不思議なことに痛みがすうっと引いていく。
濃い土の香りが鼻孔をついた――なにか懐かしい、野山の香り。

『星を持つ身で我ら魔物にそれほど心を砕く者を、我は知らぬ』
「お前、なんでここに……！　ババアの家から出るなって、あれほど――」
「――蒼路！！」

今度は女の声がした。
はっと視線を探らせると、華奢な腕がハル先輩の首を背後から捕えた所だった。
やっと来たのか――でもちょっと、タイミングが悪すぎる！

「深紅！！」

怒り

「おせぇぞっ」

俺が叫ぶと深紅も負けじと叫び返した。

「馬鹿者、結界が張られていたのよ！　壊すの大変だったんだから！」

「結界だって？」

「そう、この人が張ったのよ！　お前、気が付いていなかったの？」

凛と声を張り上げながらも深紅はハル先輩の胸に銀針を打ちこむ。先輩は悲鳴すらあげずにがくりと頭を落とし、そのまま深紅の腕からすり抜けるとアスファルトの上にうつぶせに倒れ込んだ。

「深紅っ！？　何してんだよ！」

とっさに怪我も毒のことも忘れて前へ飛び出した俺に対し、深紅はそれ以上の大喝でもって答えた。

「――麻酔針だ、馬鹿者が！！　状況を見極めよ！」

びりびりと、肌に響くような声。

ひっと俺は息を呑んだ。

ま、また怒ってるよコイツ！　何で！？

『……星持ち……』

とたんに竦んだ俺を鎮守神がふり返り、哀れみの視線を向けてきた。
ついでに言えば、俺の腕の中に横たわったままの眷属も、なぜか首を左右に振って同情のまなざしだ。
が、そうこうしている内に深紅は先輩の体に何やら術を施し終え、それから俺の方へとつかつか足音を立てて近づいてきた。

「言いたいことは山のようにあるが」

やがて深紅は鎮守神の前で立ち止った。
ああ、と俺は腕の中の眷属をきつく抱きしめながら縮みあがった。
怖い！
妖怪よりも魔物よりも、俺から言わせれば怒った深紅の方が百万倍も怖い！

「まず何よりも、蒼路。こちらへ来い」

大きな眼に剣呑さも露わに俺を睨みつけ、深紅は両腕を組んだ。
今や彼女は怒りの水煙を全身から淡く立ち昇らせていた。
ゆらゆらと揺れるその煙が、薄衣を一枚通したかのように彼女の全身像をかすませて見せる。
俺より背が低く、華奢な体をしている癖に、こういう時の深紅の威圧感はどうしたことか。
完全に上に立つ者の風格だ。

「……はい」

俺は真っ青になりながらも立ち上がった。
腕の中の眷属は何か言いたげに尻尾を振っている鎮守神に預け、

深紅の目前までゆっくりと歩み寄ると、そこに片膝をついた。
そしてビンタの一発ぐらいは喰らうのだろうなと覚悟を決め、すうと頭を垂れた。
毒のせいか、身体じゅうが異様に熱を持っている。
しかし、先刻から量に出血しているせいか手足は恐ろしく冷えていた。
左肩を刺し貫かれた痛みそのものは鎮守神が何かをしてくれたらしくかなり和らいでいたが、それでも完全に消えてはいない。
そっと傷口に右手を当てると、深紅が細く深いため息を吐きだすのが聞こえた。そしてその後すぐに響いた重い声。

「毎度毎度のことながら……その満身創痍はどうしたことだ」
「……申し訳もございません」

俺は殊勝に謝った。同時に体を固くする。
絶対に殴られるであろうと予期してのことだったが、まったく驚いたことに、深紅はそうしなかった。
代わりに短くこう言った。

「顔を上げよ」
「……」

言われたとおりに顔を上げると、あたたかな光が皮膚にふれた。
紅い光。
深紅がいつの間にか眼の前に膝を折っており、俺の肩の傷に手をかざしていたのだ。

「……深紅？」

俺は驚きに瞬いた——怒られないことに対しての驚き、ではない。

無論それもかなりあるが、この時の俺は、深紅の美しい顔があきらかに悲しげに歪んでいる事に対して驚いていた。
どうしたんだと思った。
気丈で、いつも強く前だけを見据えている深紅。
この人がこんな顔をするなんて、記憶の限り、7年前のあの時だけだった。

「どうかしたのか？」

俺は尋ねた。ごく当たり前の質問だったと思う。
だが深紅は眼をみはり、まじまじと俺を見つめるという行動に出た。
……まるで俺が驚くべき発言をしたかのように。

「な、なんだよ」

困惑してどもると、深紅は何故かやれやれと首を振った。
そして自嘲するかのように小さく笑った。

「……お前の傍にいるということは、楽ではないな」
「は？」
「再会してからずっと、心の休まる暇もないわ」

そして彼女は治癒の術を唱え終えた。立ち上がり、俺の背後に目線を向ける。
――その視線を追って俺は急に焦りを覚えた。
そういえば、魔物に対して冷酷無比との評判高いこの深紅が、鎮守神と眷属を放っておくわけがなかった！

「み、深紅、やめろ！」

俺は深紅の腕に取りすがっていた。
すると彼女は俺に目線を戻し、不思議そうに小首を傾げた。

「……何を？」

「あいつらは――鎮守神と眷属は、悪いことはしてない！　むしろ俺を助けに来てくれて、そもそも、訳あって今は魔物になっちまってるけど、元々はエライ神様なわけで！　だから手を出さないでくれ。頼む。殺すな！」

まくしたてる間じゅうずっと深紅は無表情だったが、俺が話を終えると、やがて小さく息をついた。
今日何度目のため息だよ！　と内心俺が突っ込んだところ、彼女は何故か頷いた。

「――大丈夫。わかってる」

「え？」

俺は瞬きをした。深紅の言葉遣いが、普段通りに戻っている。
――ということは、怒りが解けたということか？
考えている間にも、深紅は長い髪をなびかせながら鎮守神の前に進み出た。
伸びた背筋で、顎を上げ、まるで舞を舞うかのように胸の前で両手を打つ。
俺ははっとする。
柏手――神に対して感謝や喜びを表す、あるいは、邪気を祓うための作法。

『……』

空を裂く柏手に反応し、手負いの眷属の体を尾で撫でていた鎮守神は、うっそりと首を曲げてこちらを見た。
深紅も、いつも以上に固い無表情でもって、その巨大な狼を見上げる。
そして言った。
「礼を、言う」

俺は仰天した。
この深紅が――魔物を憎しみの対象としてしか見ていない筈の深紅が！
今や黒妖犬と化した鎮守神に、礼を言った！

『……ほう？』

驚愕のあまり口をぱくぱくさせている俺を尻目に、しかし、鎮守神は余裕すら感じさせる動作で大きな口を裂いた。
どうやら笑っているらしい。

『星持ちの姫よ。魔物を憎むそなたが我に、なんの礼を述べるというのだ』
「それはひとえに、我が朋（とも）、蒼路を救ってもらったが故」

深紅は迷いなく答えた。
きっぱりとした言い方に喉元が熱くなる。
信じられなくて、思わずその言葉を胸の内で繰り返した。

（――朋？）

『そなたには我を殺す義務があろう、姫よ』

鎮守神はゆっくりと身を屈め、深紅の顔の前にぬうっと鼻面を突きだした。
鋭い牙の合間から、ぬらりと光る赤い舌が見える。
はっと身を硬くした俺だったが、しかし、深紅は微動だにもしなかった。
ただ射るように鎮守神を見据え、落ち着いて言葉を紡いだ。

「是。しかしながら、朋がそれを望んでいない以上、私にはお前を殺すことはできぬ」
『義務は朋よりも軽いものと？』
「愚問だろう」

深紅はふ、と笑みを漏らした。
そして言った。

「かつて同じ選択をした我らの仲間を――お前は知っているのではないのか。鎮守神」

謎めいたこの深紅の言葉を俺は全く理解できなかったが、鎮守神にはどうやら思い当たるふしがあるようだった。
紅葉の色の瞳を大きく見開き、それから細めて。
彼はやがて瞑目した。
その巨大なあぎとも閉じられて、俺はようやく肩の力を抜く。

「とにかく、そういうわけで」

わずかな沈黙が流れたあと、俺の元へと戻ってきて、深紅は言った。

「お前の手前、鎮守神とその眷属に手は出さない。約束するわ」
「深紅……サンキュ」

俺は心から礼を言った。
が、次の瞬間深紅にぎゅっと耳朶を引っ張られて飛び上がっていた。

「痛えっ！」
「礼は後。いまはとりあえず、お前の流した血の洗浄をして頂戴。昼間だっていうのに、大層汚してくれたわね」
「俺のせいじゃねえよー」

耳元を押さえて俺は呻いたが、言われて見てみれば、確かに周りのアスファルトは血まみれだった。
そして麻酔を打たれたものの、どうやら意識はまだあるらしく、アスファルトに転がったまま眼だけで俺達を殺しそうに睨みつけているハル先輩が。
こんな状況、誰かに見つかったら即警察沙汰だと思うのだが、そこはさすがに深紅、抜け目がなかった。

「先輩の結界を解除した後、私の方でもう一度結界を張ったから。あんたが洗浄を終えるまでは誰にも見つかる心配は無いわ」

そして深紅は先輩の元まで歩いて行き、立ち止ると、なんとあろうことかその体をローファーの足もとで蹴飛ばしたのだった！

「――ええっ！？」
『なんと』
『……哀れな……』

俺はもちろん、鎮守神、眷属までもが揃って驚きに声を漏らしたのを尻目に、深紅は今度は先輩を殴った。グーで！

よくよく見れば、その背中からは再び怒りの証、水煙がにじみ出ている。

ああ成程、と俺は悟った。

――怒ってたのは、俺に対してじゃなかったんだ。

先輩に対して、だったんだ。

「――お悔やみ申し上げます……ハル先輩」

『呟いている場合ではないのではないか、星持ちよ』

思わず制服の袖で涙をぬぐった俺に、鎮守神が突っ込んだ。

が、時既に遅し。

深紅は燃えさかる怒りを今度は言葉にして、ハル先輩に浴びせかけたのだった。

「この――愚か者でシスコンかつ情けない半人前の腹黒半星が！三度目はないぞ！」

俺は黙って血の洗浄作業に取り掛かった。

鎮守神も眷属の治療を再開し、ただ先輩を罵倒する深紅の声だけが結界のなかに響き渡った。

「良いか、今度このような真似をすれば、私がお前を殺してやる。嘘ではないぞ。朋を傷つけられたこの恨み――私は決して忘れ得ぬ！！」

……アーメン。ハル先輩。

しかし――そのあと、俺たちは異常に気がついた。

ハル先輩の様子がおかしいのだ。

否、もともと性格に二面性があるし、厭味ったらしいし、変わった人には違いないのだが、俺がここで言いたいのはそういうことではなくてだな。

つまり、いきなりもんどり打って、死ぬほど苦しみ始めたのだ。

俺たちは彼を暴れないようにと拘束したのだが、動かない手足をイモムシのようにばたつかせ、全身をのけぞらせて苦しげな悲鳴を何度も何度も上げて。

痙攣しながら白眼を剥き、口からは血の混じった泡を吹いた。

「せ……先輩ッ!?　どうしたんだよ、おい!!」

当然ながら動転し、その身にすがりつこうとした俺を深紅が止めた。

何だよ!　と噛みつくと逆に怒鳴り返された。

「落ちつきなさい!」

「ああ!?　これが落ち着いていられるかよっ、この人いちおう依頼人だぜ!?」

「だからこそ、でしょう!　バカ!」

叱咤とともに強く腕を掴まれる。

深紅のまっすぐな黒曜の瞳と瞳が交わり、俺ははっとした。そこには――彼女の眼の中には、俺と同じように不安と心配の色が確か

に浮かんでいたからだ。
……そうだ、先輩は、俺だけの依頼人じゃない。
俺は思った。
動揺が少しだけ冷めて我に返る。
軽く息を吸い込むと深紅が言った。

「蒼路。これは予期していたことだわ――キヨ様の御屋敷へ、運び込むわよ」
「……先輩の、限界か……」

深紅の言葉には答えずに、俺は逆に小さく問いかけをした。
ハル先輩を見つめる。
全身を横倒しにして、獣のような吠え声を上げながら苦しんでいる。
その肌は全身土気色に染まり、もはや生者の色をしていない。
なのにじわじわと体の内側から染みだし、先輩の全身をぬめるように覆って行く、暗い緑の瘴気があった。
――アンナさんだ。
先輩が意識を失えばアンナさんは先輩の体を乗っ取りやすくなる。
だから恐らく今、先輩は必死で意識を失うまいと戦っているのだろう。
己の身体を喰らおうとする妹の霊と、精神が壊れるぎりぎりのラインで激しく攻防を繰り広げているのだろう。

「……っ……お、あぁあっ！！」
「先輩……」

悶える先輩の姿を前に、俺は唇を噛んだ。ちくしょう。
わかっていたことだ。
このままアンナさんに憑依され続ければ、ハル先輩の肉体が持た

ないと。
俺たちがもたもたしていればしている程、先輩の命は確実に削られる。
わかっていたのに――今だって、苦しむ先輩を前にして、痛いほどそのことはよく理解しているのに。それでもためらってしまうのは。
アンナさんを殺さなければ、先輩が助からないから。
けれど悪霊と化して先輩を苦しめている彼女を――俺は友人として好きになってしまったから。

「蒼路」

深紅がいま一度、俺の名を呼んだ。
責めるような強い音ではなく、むしろ逆に俺をいたわっているかのような柔らかさのある、静かで穏やかな声色だった。

「屋敷に、先輩を運びましょう。このままではどちらにしろ――この人は助からない」

俺はすぐには答えられず、しばらく黙ってハル先輩を見つめた。
きつくきつく唇を噛んで、右手を拳に握りかためながら。
どちらにしろ――俺たちがアンナさんを祓おうと、祓うまいと。
このままでは確実にこの人は死ぬ。

「……わかった」

やがて俺は、低くひくく、呟いた。

「行こう」

＊＊＊

屋敷ではまるで俺たちの来訪を予期したかのように、ババアが庭先に立って待っていた。

鎮守神の背に乗っていた俺たちは空から屋敷へと飛び降りて、そのあと漆黒の狼が庭先へ降りてくるのを見守った。

巨大な狼は突風を巻き起こしながら地面に四肢を付き、しなやかに身を屈めると、背中にしょっていたハル先輩を下ろした。

「この者が遥か。アンナから聞いてはいたが、見えるのは初めてじゃの」

小股で近づいてきたババアは、苦悶しているハル先輩の様子を見ながらそう呟いた。

はじめは何の表情も浮かべていなかったしわくちゃの顔が、みるみる厳しく引き締まり、それから俺達を見た。

「状況説明を」

「はい」

問いかけに対して答えたのは深紅だった

よく通る、明朗な声で持って彼女は言葉を紡ぐ。

「本日正午過ぎ、学校にてこの者が蒼路を襲いました。

蒼路は結界のなかに取り込まれ、戦いの際に右肩を負傷。応急処置は済んでおりますが、解毒はできておりません。

また、蒼路を救うためにそこな黒妖犬と眷属が屋敷を抜け出して参りました。眷属の方が下肢を負傷しています。

伊勢遥は私が麻酔を打ち拘束しましたが、直後に様子がおかしくなり、このように苦しみ出しました。――以上です」

「ふむ。成程な」

ババアは満足そうに頷くと、ハル先輩の頭の脇あたりに片膝をついてしゃがみ込んだ。

小さく、なめし皮のような質感の手のひらがふいに宙に掲げられる。と、音もなく白い袴に身を包んだ二人の男たちが顕現した。

俺と深紅は軽く息を呑む。ババアの式神だ。

壮年の男の身かけをしたその式神たちは、呻くハル先輩の体を抱え上げると、屋敷の奥へと運び始めた。

同時にババアは立ち上がった。

「蒼路、深紅」

名を呼ばれ、俺たちは同時に返事をすると膝を折った。

凛々しい深紅の声と沈んだ俺の声が不調和に響き合う。

ババアはその音にちらと俺を見やったが、すぐに眼を閉じていた。

「――これはあくまで、そなた等の受けた依頼、そなた等の仕事じゃ。私は介入はせん。最低限の手助けはするが、それはそなた等のためでなく私自身のためと覚えておけ」

「わかっております」

「……」

深紅が優雅に一礼する横で、俺は答えに詰まっていた。

当惑しきっていたのだ。

これが俺たちの仕事であり、自分たちで完遂しなければ一人前の星師として認められない重要な任務であること、それは無論わかっている。

わかってはいるが――俺は自信を失いかけていた。

（……怖いんだよな？）

自分で自分に問いかけた。ほとんど責めるように。

そうだ、俺は怖い。

アンナさんを祓うことが。ハル先輩が苦しむことが。

そして双子のどちらもが、これ以上悲しい想いをすることが――

本当に嫌で、本当に怖い。

俺の役目はハル先輩を助けることなんだ。既に死んだアンナさんを救う事じゃない。

今生きて、苦しんでいる生身のハル先輩を助けること。

ああ、わかっている。わかっている。

けど、頭では理解していても――どうしてもどちらかを選ぶことができないんだよ！

「……蒼路？」

ババアの怪訝そうな声が耳に届いたが、俺は顔を上げられずに俯いた。

胸元を手で探る。ワイシャツごしに、固く小さな感覚が指にぶつかった。

これは、アンナさんがくれたペンダント。

彼女が俺に、輝くような笑顔で渡してくれた、あの夏の森の色をした宝石。

俺は見た。

さっき、苦しみに悶えるハル先輩の首元から、全く同じ石が顔をのぞかせていたのを。

（あげる。きっとあんたを守ってくれる）

ペンダントをくれた時の、まったく明るいアンナさんの声と笑顔

を思い出して、俺は溜まらず両手で顔を覆った。
あの人を。
自分が消滅するかもしれない恐怖の中ですら、他人を思いやってくれるあの優しい人を、俺は殺さなければいけないのか。
それが――星師の仕事だっていうのか？
本当に？

「……深紅。先に行って休んでいなさい」

ババアの声がとても遠くに聞こえた。
深紅の答える声はしなかった。あるいは俺が聞きとれなかっただけなのかもしれないが。
全身が石になったような気がした。
重く冷たく沈みこんで、このまま凍りついてしまいそうな。
さわさわと、軽く土を踏む音が聞こえ、やがてババアの草履の足もとが視界の端にちらと映った。

「……蒼路よ」
「……はい」

俺は投げやりに答えた。
怒られることは予期していた。
どうせまた甘いとか、毎日怪我ばかりして心構えがなっていないとか、そんな風に怒鳴られるのだろうと。
――だが違った。

「犬が、そなたを心配しておるぞ」
「……え？」

意表をつかれ、俺はゆるゆると顔を上げた。

すると感じた、ふわりと鼻腔をつく大地の香り。
俺は僅かに眼を見開いた。
影が――酷く巨大な影が、俺を包みこみ、夏の日差しから遮ってくれていた。

「鎮守神……？」

いつの間にか漆黒の巨体がすぐ傍に控えていたのだ。
緋色のまなざしが俺に据えられている。静かで深く、底知れない瞳をしていた。
彼は口を開いた。

『そなたでも、迷うことがあるのか。星持ちよ』
「……お前に俺の何がわかる」

思わずぶっきらぼうな口を利いていたが、鎮守神は気にせずに言葉を続けた。

『そなたと同じ眼をしていた人間を知っているのだ』
「え？」
『そなたと同じ場所に星を持っていた。女だったが、そなたと同じように真に変な人間で、異形を人と同じ程に愛していた。よせと言うのに我ら異形に心を砕いた』
「鎮守神？」

彼が何を話し始めたのかわからなくて、俺は思わずババアを見た。
が、気がつけば彼女はもういなかった。
屋敷の庭先に取り残されたは俺と巨大な漆黒の獣、それからその眷属だけ。

『その者は言っていた。道を、選ばねばならぬ時、二つの内どちらか片一方のみしか選べない時。そういう時は、自分のためにならない方を選ぶのだ、と』

俺は落雷に打たれたような気がした。

脳天から足もとまでをも突き抜ける、白く静かな稲妻。

それは衝撃というやつだった。

早い話、鎮守神の言葉に俺は思い知らされたのだ。

自分が悩んでいるのは双子のためなんかじゃない。

ただ自分の――自己満足のためだったのだ、と。

「……俺は……」

俺は鎮守神から眼を反らせずに彼を見上げた。

熱い。

夏の熱気を、彼が遮ってくれているはずなのに、全身が熱くて、眼頭に何かこみあげるものがあった。

「……そうだよ、俺は、自分のために、アンナさんを祓いたくない……！　好きだからだ。あの人に友情を感じてしまったから、幸せになって欲しいと思ってしまうんだよ……！」

『されどそなたには、あの男を守る義務がある』

「そうだ――でも、ハル先輩は、アンナさんがいなければ幸せになれない。あの人は、自分のせいで妹が死んだのだとずっと自分を責めている……だから俺たちは、あの人から二度も妹を取り上げることだけは、してはいけないんだ！」

『ならば、そなたのすべきことは明確ではないか。星持ちよ』

次第に震えを増し、動揺を露わにする俺の声とは反比例して、鎮守神はどこまでも静かで落ち着いた声をしていた。

緋色の眼が細くなる。

『どちらも見捨てたくないのなら、見捨てなければ良いだけのこと』

俺ははっと息を吸い込んだ。

見返した先にある緋色の瞳は、初めて会った時からずっと、俺を見透かして誰かを思い出すような色をしていた。

切なさをはらんだ懐かしさ――そしてそれらの源泉となる遠い想い。

「お前……」

俺は思わず手を伸ばしていた。

神に触れるなどと、あまりにも畏れ多い、しかし、彼は拒まなかった。

なめらかな漆黒の脇腹に顔を埋める。

見た目よりもほんの少しだけ固く感じるその体毛は、先日よりもずっと健やかな艶を帯びて――懐かしいような大地の匂いがした。

「……どうして、俺を、助けてくれるんだ……」

『勘違いをするでないぞ？』

鎮守神が体を震わせてかすかに笑ったのが伝わって来た。

それからふわりと背中を包む感触。尾だ。

鎮守神は俺を抱きしめるかのようにその体毛で包みこんで、やがて厳かに呟いた。

『我はな、あの男に無理やり封印を解かれて立腹しているのだ。だがそなたにあの男を救ってもらわねば復讐することもできんではないか。故にこれはお前のためではない。我はただ、我の目的のため

にだけ動いているのだ』
「……そか」
俺も小さくほほ笑んだ。
鎮守神から身を離して、いま一度その眼を覗き込む。
そして言った。
「ありがとう」
――確かに、迷うなんていちばん俺らしくない事だった。

（アンが死んだなどと……よくも、よくも！！）

焼き付いたのは、アンナさんと同じ色をした碧の瞳。
迸るような悲しみと切なさに気も狂わんばかりになって、それでも大切な人を守ろうと必死になっている、心優しい人のまなざし。

（ハルも、本当は優しい子なのよ）

アンナさんの声が耳によみがえった。
双子の兄について話す時、いつも満面の笑顔を浮かべる妹。
あの人の存在が今までどれほどハル先輩を支えてきたことだろう。
俺は熱にうずく肩の傷を押さえて瞑目した。

――わかるよ。アンナさん。

この世ではいつも、誰かが誰かの事を想って。
そしてその人のために何かしてあげたいと願っているんだ。

（あたし、ハルが大好きなのよ）

うん、大丈夫。
俺さ。

ちゃんと――わかってるよ。

＊＊＊

屋敷に上がった俺は、傷を手当するより着替えるより何よりもはやく、まずハル先輩の後を追った。
彼は屋敷の最奥、北の対と呼ばれる離れに運び込まれていた。
ババアの弟子である俺は、その北の対というのが魔物を調伏する際にのみ使用する特別な空間だと知っていた。
だからこそ急いだのだ。

「蒼路？」

母屋から渡り廊下を進み、高熱にふらつきながら北の対に赴くと、白い袴に身を包んだババアの式神がふたり、薙刀を手に入口を守護していた。
今しも離れの中から出てきたババアが俺の姿を認めて声をあげる。
答えるのがおっくうで俺は黙って彼女の目前まで歩を進めた。

「……お前、怪我の解毒は済んだのか」

厳しい口調で尋ねられて、ただ首を横に振った。
息が弾み、体が熱い。
額から流れ落ちる汗が眼に入ったのを無造作に手で拭いながら俺は口を開いた。

「先に、先輩に会いたい」

ゆっくりと、一語一語を区切るようにしてそう伝える。
ババアは物々しく俺を見上げて黒い鋭い眼を光らせた。

「危険な、状態じゃぞ。ハルにとっても、お前にとっても」
「……わかってる。ただ、もう時間がないだろうから――」

そこで言葉を切って、息を吸った。
そう、俺は認めなければいけない。
ハル先輩にもアンナさんにも、残された時間は少ないと。
それは絶望的な事実だが、だからこそ俺はここで迷ってはいけないのだ。

「――後悔を、したくない。させたくないんだ」

俺の言葉を聞いたババアは、やがてゆっくりと、頷いた。
小さな片手が宙に挙げられ、式神が無言で脇に退いた。
おかげでぽっかりと開いた北の対の入り口、そのわずかな空間に、白く半透明の膜のようなものが張り巡らされているのが見えた。
結界だ。
淡く光る表面には、朱色の漢字に似た文様が施されている。

「入るが良い。ただし――その犬と一緒に」
「……へ？」

予想外の言葉と共に背後を指差されて、前へ足を踏み出そうとしていた俺は意表を突かれた。
一呼吸を置いてふりかえり、緩慢にまばたきをする。
するとそこには――澄ました顔でお座りの体制を取っている鎮守神の姿があった。
奇妙なことに平生はゾウよりもゆうに大きい巨体が、いまは中型犬と同じくらいの大きさにまで縮んでいる。

「おま……」

お前、ここで何してるんだよと、言い差して俺はやめた。

だってそんなことを言っても無意味だ。
我は我の意思によってのみ行動するのだと、彼はさっき言っていたではないか。
代わりに何か知らんが口許が勝手にほころんでしまう。
熱があるせいだろうかと思いながら膝を折り、鎮守神と目線を合わせた。

「……ついてきてくれんのか？　犬っころ」
『お前は危なっかしいからな』

鎮守神は軽妙に答えながら尾を振った。

『貴重な星持ちの血がこれ以上むだに流れるのは、いち魔物として、絶対に見過ごせん』
「……さーんきゅ」

そして俺は、最強の随身（ずいしん）とともに北の対の内へと入って行くことになったのだ。

＊＊＊

闇――だった。
真夏の昼下がりだというのに、北の対のなかは漆黒の闇で満たされていた。
それは異常なことだった。
ババアの屋敷は典型的な武家屋敷、屋外に面した壁などはほとんどない。
いつもあちらこちらから風が通り、庭先からあふれるような光の降り注ぐ、異形たちの笑い声あふれる心地よい家なのだ。
それに、周囲に沈殿してゆくようなこの重い空気は。

「……寒い」

俺は呟いた。

そう、ここは恐ろしく寒かった。

体が発熱しているだけに、皮膚にふれる屋内の空気が凍り付きそうなほど冷えているのが際立ってよくわかる。

信じられない事に息が白い。

体の内と外の温度差があまりに激しく、俺は吐き気すら覚えた。

俺の足もとにいるはずの鎮守神が低く声を出すのが聴こえた。

『ひどい妖気だな。とても人間、それも仮にも星を持つ者が発する気配とは思えぬ』

「ああ……」

俺は堪え切れず立ち止った。

右肩の下、先輩に刺し貫かれた肩の下に、何かがうごめいているような奇妙な感触がし始めていた。

……たぶん、除去されていない種が成長しているのだろう。

次第に吐き気も強くなり、手で口許を覆ってうつむいた。

『気を失うなよ、星持ち』

「……っせ。余計な御世話だ」

鎮守神に言い返しながら喉元にこみあげてくる苦いものを懸命に飲み下した——そのとき、ふと。

俺は、冷え切った闇の先から響いてくる、かすかな音を捕えていた。

「……歌？」

風のかすかに揺らぐような――雨の清(さや)かに滴るような、それはほそく柔らかな旋律だった。
鎮守神もむ、と喉を鳴らして耳をそばだてる（……気配がした）。

『女の声ぞ』
「……女……？」

なにか懐かしく、心の奥底のとても幼くやさしい部分を撫でるような旋律だった。
誘われるようにして数歩歩みを進めた俺は、その歌が英語で歌われているものだと気がついた。
少し低く、甘い声で語られる異国の歌――

「――アンナさん……？」

名を、呼ばわった瞬間――眼前の闇が、開けた。
まるで閃光が奔ったかのようだった。
稲妻が音もなく地を張ったかのように、視界を塗りつぶす漆(うるし)の闇を蹴散らして、俺たちの視線の先、この屋根の下に居るひとの姿を映し出した。
闇が裂けたのは、わずかな刹那。
だがそれでもじゅうぶんだった。

「……アンナさん！」

闇のなかに、闇の先に居たのは彼女。
そして彼女がその腕(かいな)で？き抱いた兄だった。

（――だれ……）

再び俺たちの視界は重い闇に塗りこめられる。
けれどさっきまでと違うのは、彼女の姿が――そう、アンナさんの姿が、ちらちらと揺れる碧の燐光に包まれて顕れたことだった。

（そこに居るのはだれ……？）

アンナさんの声を聴いて、俺は先ほどまでの歌を彼女が歌っていたのだと悟った。
俺の知るアンナさんの声とは全然ちがう、頼りなくて行き場のない、迷子の上げるような声。

「アンナさん、俺だよ、蒼路だ！」
（……お前も、あたし達を引き裂こうとしてるの……？）
「……何言ってるんだ？」

俺は違和感を覚えた。
話が噛み合わない、というよりは、アンナさんの言う言葉が理解できない。

（……そう……あたしからハルを奪いに来たのね……）
「アンナさん！　何言ってるんだよ、あなたはお兄さんを助けたいんだろう！？」
『――おかしいぞ、星持ち』

困惑する俺の足もとで鎮守神が言った。
アンナさんの放つ燐光のおかげで彼の姿が見える。
彼は強い警戒を露わに、低く身を伏せて牙を剥いていた。

『あの女が顕れているということは……兄の方はもう』

「――ハル先輩」

はっと俺は瞳を凍り付かせた。

碧の燐光に身を包んだアンナさんの、もはや輪郭が消えうせて、眼から光の失われた虚ろな顔。

その膝の上に崩れるようにして横たわっているのは、俺と同じ高校の制服を着た青年だった。

その腕はアンナさんの腕とからみ合い、蛸のような唇は、今しもアンナさんによって口づけを受けようとしている。

「馬……っ鹿ヤロウ！！」

俺はとっさに――床を蹴っていた。

が、タイミング悪く右肩周辺に激痛が走り、着地にもろに失敗する。

痛みに声無く身を仰け反らせ、つんのめるようにして床に転げると、俺は爪を立てて肩の皮膚をかきむしった。

痛い、熱いあつい痛い！！

『星持ち！？』

「……いまごろ、萌芽か……ずいぶん時間がかかったな……」

鉤爪と床のこすれる音をたてながら鎮守神が飛んでくるのと同時に、俺の耳に届いたのは、今度は男性の声だった。

手のひらで刺すように肩を押さえながら、俺は苦痛にゆがんだ顔を上げた。

碧の燐光。だがアンナさんは消えていた。

いまその光に包まれているのは、生身の人間の体。

「……先輩……ッ」

そう、ハル先輩が、起き上がって俺を見ていた。
げっそりとこけた頬に落ちくぼんだ眼窩が黒い影のように映る顔で、やつれた肩をぜいぜいと荒い息に上下させている。
その姿を見て安堵すると同時に、俺はまた堪え切れない激痛に喘いだ。
肩を押さえる指の間から、ぬるぬると這い出る細い糸のようなものがあった。これが恐らくは寄生植物なのだろう。
悶える俺の姿を喰らい顔で見つめながら、ハル先輩がごくりと喉を動かした。

「……アン……？」
（なあに、ハル）

兄の声に導かれるようにして、妹の姿が再び降るようにして顕れた。
彼女は兄に背後から抱きつくようにして、そのままおぼろな手足をずぶずぶと兄の肉体に沈みこませてゆく。
やめろ、と俺は声にならない声で叫んだ。やめてくれ。

「もう、二度と離れないでくれ……僕の傍にいてくれ、アン」
（それはあたしのセリフだわ……ハル）

冷たく無機質なアンナさんの声が闇の中によく通った。

（あたしは一度、独りで死んだ。とてもとても、寂しかったわ……だから、今度は一緒に行きましょう）
『……怨霊めが……！』

鎮守神が、低い唸り声を上げて俺の傍で立ち上がった。

ふいに凄まじい程の妖気――いや、神気だ――を爆発させて、本来の巨大な姿に立ち返る。

鎮守神、と俺が必死で伸ばした手に、彼は答えるようにまなざしをくれた。

アンナさんの声が、ハル先輩のそれと重なって響く。

（今度は、ふたりで、一緒に……！）

双子の手のひらがしっかりと重なり合い、絡み合う。

闇がどろりと粘度を濃くした感覚があり、碧色の暗い輝きが北の対を内側から侵食するように広がってゆく――。

『……星持ちの望まぬことは……させぬ』

俺は、動けなかった。

もう駄目だと本気で思った。

碧の闇が頬に触れてくる。触れた先から根こそぎ体温を持って行かれるような感覚に、抗う事も出来ずに眼を閉じた。

――だが、其れを。

その凄まじいまでの双子の執念、双子の闇とも呼べるものを。

『我は二度と……同じ過ちは繰り返さぬ！』

この鎮守神は――　一瞬で砕いた。

声、聲

足もとを衝撃が突き抜けた。
地の奥底から大地が唸り、雷鳴のような轟きと共に一度大きく揺らめいた。
闇と光が交錯しながら視界を駆け抜け、絡み合うように明滅する。
俺はとても眼を開けていられなくなり、まぶたを下ろした。
風が――土の匂いを、森の匂いをはらんだそれが――竜巻の如く巻き起こって髪を、服を乱してゆく。
俺は血の気が失せてゆくのを感じた。全身がざっと鳥肌立つ。
これが――神気。
脆弱（ぜいじゃく）な魔物など触れるまでもなく消滅せしめるであろう、凄まじいほどに高貴な気配。
美しいのに、同時に恐ろしいものだ。
それが鎮守神を中心に迸り、世界を大きく揺るがしている。

「これが……神……」

俺はからからに乾いた喉で茫然とそう呟いた。
大地が、鎮守神に共鳴している。
そのことがはっきりとわかる。
山を守る神にとっては母体ともいえるべき山――それが、彼の感情に呼応して吼（ほ）えているのだ。

『……命はいつか尽きるもの……』

鎮守神が口を開いた。
体の中心に直接響くような太く毅い声音だ。

俺はうすく眼を開こうと試みて、成功した。
そうして始めて、先ほどまで体を取り囲んでいた風の障壁が弱まっていることに気づく。
闇は――掻き消えていた。

『人の命は、ことさら短い』

彼の声に導かれるようにして俺も双子の姿を目で追った。
彼らは――彼らも、神気に気押されて微動だにもできないようだった。
指先さえ動かせぬまま、見開かれた碧の双眸を持つ男女が二人、驚愕と畏怖の色をいっぱいに湛えてこちらを見つめている。

『されどそなた等は決して』

鎮守神が風を纏いながら宙を跳んだ。耳元で風が唸る。
俺は微動だにもできなかった。
ただ打たれたような心持で、彼の姿を――その声が紡ぐ想いを、聴いていた。

『――決して、苦しむために生まれてきたわけではない！』

はっと息を呑んだ。
鎮守神が、双子を……呑む。
巨大なあぎとを開いて彼らの闇を喰らう。
その後はふたたび世界が眩(くる)めいた。
碧色の閃光が爆発し、凄まじい衝撃が空間を揺さぶって、俺はふたたび眼を閉じた。
頭をどこかに激しくぶつけて意識が急に遠ざかる。

「……が、み……！」

呟きは、風の唸りに捉えられて?き消える。
今にも意識を失いそうな状況の中で、けれど俺は、遠く彼方からかすかに響いてきた音を捉えていた。

（――……醒）

地揺れと風の只中にあるにも関わらず、俺の心に直接触れてくる、それは特別な声だった。

（――緋醒（ひざめ）か。良い名だな）

女性の、声。
ほほ笑みを含んでやわらかな、温かい人の言葉が、俺の脳裏にひとつの画像までをも映し出した。

（……お前は、何と言う名前なのだ?）

それは秋深い、紅葉に真っ赤に染まった山の中。
錦（にしき）の様にはらはらと舞い散る落ち葉の向こうに、景色の紅とあざやかな対比をなす漆黒の狼と、その脇腹によりかかって座る着物姿の女性が見えた。

（わたしは、八宵（やよい））

彼女は言った。
ぬばたまの黒髪を無造作に束ねて、ちいさく白い顔には、声と同じくあたたかな笑顔を浮かべた妙齢の女性。

（お前の友人の、八宵だよ……）

彼女がほほ笑みながら髪を掻きあげた拍子、俺ははっきりと見た。
その右手。ほっそりとした骨格の浮かぶ甲の上。
俺とまったく同じ場所に浮かんだ――星型の大きな痣を。

＊＊＊

ごめんなさいと、繰り返しくりかえし謝る声がする。

ごめんなさい、ごめんなさい。
あたしはあんたに何をしたの、助けてほしいと希(ねが)ったのに。
ごめんなさい、蒼路。
ごめんなさい。
でもあたし――

『もうあんたに声が届かない――……！』

＊＊＊

「――アンナさんッ！」

自分で自分の叫び声に飛び起きた。
拍子に汗が額から、背中から、零れおちて我に返る。
甘い香りが鼻をついた。これは、紫檀(したん)だ。
薄ぼんやりと明るいのは、すぐ脇に置かれている行燈のおかげだ。

「ここ……は」

一呼吸ついて、俺はやっと、自分が北の対ではない場所にいるの

だと気がついた。
左手の下にやわらかな感触がすると思ったら、布団だった。
――俺、寝てたんだ。

『気がついたか』
「え……」

耳朶を打った低い声音に顔を上げると、行燈の光が届かない部屋の隅に、闇に溶け込む毛色の狼がうずくまっているのが見えた。
鎮守神、と口の中で呟くと同時に俺は咳き込んだ。ひどく喉が渇いていた。

『……』

そんな俺の様子を見て、鎮守神は無言でのそりと身を起こした。
少し開かれていた障子の隙間にするりと身を滑り込ませると、そのまま部屋の外へと出て行く。
俺は彼の姿を眼で追っている内に気がついた――日が、暮れている。
どうやらかなり長く眠ってしまっていたようだ。

「マジかよ……」

寝てる場合じゃないじゃんか、と独りごちながら俺は身にかかっていた布団を跳ね飛ばして起き上がった。
が、途端に眼が眩み、俺は手足をもつれさせて畳の上にころがる。
何だろう、手足がうまく動かない。
特に右手の感覚が全くなく、重い棒が肩からぶら下がっているような違和感しかしない。

「っだよ……これ！！」

俺は苛立って声を上げた。
何で動かないんだ、俺の体！
俺は、今ここでのうのうと寝ているわけにはいかないんだよ。
ハル先輩が――それに、夢の瀬で捉えたあの泣き声。
アンナさんが。
今も苦しみながら、二人で泣いているっていうのに。

「時間が、ない……！」
「――蒼路」

苛立ちに、拳を畳の上に思い切り叩きつけた瞬間だった。
障子が大きく横に開き、廊下に膝を折った来訪者の姿が闇に浮かび上がる。
名にふさわしい暗紅色の着物を着て、浅縹（あさはなだ）の帯を締めている。
きっちりと結い上げられた髪型のために、額の星印が際立った。

「深紅……」
「動いては、だめよ。まだ麻酔が効いているわ」

深紅は静かにそう言うと、手にした盆と共に部屋の中に入って来た。
後ろ手に障子をぴたりと締めてしまうと、彼女は盆を畳の上に置いて、いまだに半ば倒れた体勢でいた俺を助け起こした。
金刺繍のされた袖が肌に触れたひょうし、甘い香りが匂い立つ。
体の自由が効かないぶん、俺はされるがままになって、恥ずかしさとも照れともつかない感情に声を荒げた。

「……や、やめろよ！」

「怪我人が何を言っているの？」

涼しい顔で答える深紅に俺は必死に首を振った。

ちがう、そういう意味じゃない。

焦りともどかしさのために思わず叫んでいた。

「そうじゃなくて――俺は、こんなことしてる場合じゃねえんだよっ！」

叫びざま深紅を見る。

「先輩が……アンナさんが！　苦しんでる、早く何とかしないと、本当に二人とも――」

「――ええ。二人ともこのままでは死ぬわ」

彼女は何の表情も浮かべない顔でそう答えた。

冷静な様子に俺の苛立ちはさらに募る。

わかってるなら何故止める、そう、思い切り言い返してやろうと思った瞬間だった。

「けれどそれが……お前まで死んでいい理由にはならないでしょう」

深紅の顔が――ゆがんだ。

柳眉をきつく寄せて、唇を噛みしめて。

俺ははっと息をとめた……冗談ではなく、泣かれるかと思ったのだ。

けれど彼女はそうしなかった。

俺を揺らぐ瞳でじっと見つめてから俯くと、黙って布団へと誘導した。

そんな顔をされては俺も逆らえず、しぶしぶ布団の中へと戻るし

かない。

「……」

微妙な沈黙が流れた。

深紅が捧げ持ってきた盆の上から水差しを取り、俺に差しだしてくる。

俺は黙って自由の効く左手でそれを受け取った。

切り子の水差しはよく冷えていて、中の水は清流のように乾いた喉を潤してゆく。

「……っは……」

一しきり喉を鳴らしてそれを飲むと、俺は大きく深呼吸した。

焦りに逸っていた気持ちがすこし落ち着いてくる。

ふたたび伸ばされた深紅の手に水差しを手渡すと、口許を手でぬぐいながら彼女の様子を窺い見た。

きちんと背筋を伸ばして正座する、端整な姿。

けれどどうしてだろう。

その長い睫毛も、優美な口許も、いつもより翳りを帯びたように見えた。

声、聲　2

「……あの、さ」

俺は慎重に、というかややビビりながら、口を開いた。
深紅に怒られるのはゴメンだし、泣かれるなんてもっての外だが、前述したとおりに俺はいま黙って寝ているわけにはいかないのだった。

「あの、先輩と……アンナさんは？」

深紅が返事をしないのをいいことに俺は思いきって尋ねた。
昼過ぎに北の対を訪れたあとから今まで、俺の中には何時間も空白の時間が在る。
鎮守神があの凄まじい力を見せた後、双子はどうなったのか。
そして今、どうなっているのか。
確認しない事には気が済まなかった。
――しかし俺の質問に対して、深紅はまず深いため息を吐きだすことで答えた。

「……まったくお前は……」

はじめ剣呑な、次いで呆れたような視線を深紅は投げかけてくる。
ともすればそれだけで竦みそうになる心を俺は必死で堪え、彼女の次の言葉を待った。

「いつもいつも、人の事ばかり考えて。自分の身を省みない。だか

らかしら、お前が鈍感なのは」
「えー……と？」
どうにも要領を得ない。
首をかしげてしまった俺に対し、深紅はもういちど息を吐くと、行燈に油を追加しながらこう言った。
「安心おし。鎮守神が、一時的にハル先輩の体を侵していた瘴気を祓った。いまは体調が落ち着いて眠っているわ」
「……それじゃ、アンナさんは？」
俺は尋ね返す。
双子の片方だけが無事と聞いてもまったく安堵できなかったのだ。
すると深紅は顔を上げた。
冴え冴えと落ち着いた黒曜の瞳が俺を見据え、嫌な予感が胸に走る。
「蒼路。わかっているかもしれないけれど――彼女とはもう、触れ合うこと叶わぬ」
ずきん、と、鋭い痛みが脳天から爪先を刺し貫く。
俺はすぐには答えられず、黙って拳を強く握りしめた。
呼吸ができなくなる。
喉に、なにか硬くて張り詰めたものがつかえているようだ。
「兄に長い間憑依していた結果、彼女はもう、本当に悪霊になってしまったの。……それも、兄が生きていることを恨む怨霊にちかい存在へと変化してきている」
「……見（まみ）えたのか？」
「ええ」

深紅の答えは短かった。
しかし、その声音の強さに、俺は自分が眠っているあいだに何かが起きていたことを悟る。

「そんな……違う、アンナさんは……っ」

アンナさんは、そんな人じゃない。
俺は言おうとした。でも、喉からはやはり声が出せなかった。
代わりに俯いて、左手で布団をぎゅっと握りしめた。
深紅のしずかな声が暗い視界の向こうから響く。

「……お前、真(しん)にはわかっているのでしょう？」

迷いのない声が、甘さに引きずられそうになる心を現実へと引っ張り上げる。
俺はかすかに顎を引いた。
そうだ——わかって、いたことだ。
最初からわかっていた。アンナさんはもう死んでいる人なんだと。
本来ならばとっくにこの世を去って、成仏しているべき魂なのだと。
それなのに、今まで何をぐずぐずしていたのだろう。
俺の役目はこれ以上アンナさんを苦しめることじゃない。
彼女をハル先輩の体から解き放って——成仏させること。
そして双子をふたりとも、自由にすることだ。

「……ああ。わかってる」

苦しい、重い塊をなんとか呑み下して、俺はようやくそう言った。
ゆっくりと顔を上げると、深紅が先ほどと変わらずに俺を見据え

ていた。
その瞳の輝きは、勇気だ。
いつだって変わらない彼女の信念。
この眼がずっと昔から俺を強くしてくれた。

「わかってる……ありがとう」

深紅の眼を見据えながら俺はそう言い、ひとつきっぱりと頷いた。
ようやく、決意が固まった。
アンナさんも、ハル先輩も、どちらもこれ以上傷つけたりはしない。
見据える闇がどれほど深く、果てのないものに思えても――どんな場所にも光は射すと、俺は信じる。
俺は俺の星をもって、双子を闇から解き放って見せる！

＊＊＊

「……肩の傷は、まだ痛む？」

長い沈黙が流れた。
それを破ったのは深紅だった。
深く瞑目していた俺は、突然声をかけられて反応が遅れる。
何を言われたのかわからなくて顔を上げると、彼女が自分の肩をとんとんと手で叩き、それから俺に向けて首をかしげる仕草をした。

「え、肩？　ああ」

慌てて自分の右肩を見下ろして、そこに意識を集中しながら俺はつぶやく。

「……そういえば、痛くない。全然。なんでだ？」
「私が治療したからよ、もちろん。バカ。大変だったのよ、萌芽した種子が筋肉すれすれまで根を張っていて。あと少しで神経に傷がついていたかもしれないんだから」
睨みつけられて、俺はうっと軽く身を仰け反らせた。
毎度のことながら、我ながら深紅にはほんと弱いと思う。
「……すまん。ありがとう」
戦々恐々しながら頭を下げると、深紅はなぜかほほ笑んだ。
眉を少し下げて、困ったような顔で。
俺はとまどった。
――なんで、こんな顔をするんだろう。
さっきも泣きそうな顔を見せた。それに昼間も、俺がハル先輩と一戦交えたあとで、彼女はこんな顔をした。
心細そうで、寂しげな、けっして良い表情ではない。
――俺のせいか……？
俺は思案した。
が、いくら考えをめぐらせてもその理由が思い当たらない。
大体、深紅の幼馴染でありながら俺は意外に深紅のことは知らないのだった。
気が強くて頭の良い容赦のない美人、とかいうことはわかっていても、それはしょせん表向きの彼女。
苛酷な運命を担ったその心がふだん何を想い、何を考えているのか――そんなことは俺には全然わからないのだ。

……わかりたいとは、焼けつくように思っているけれども。

「……蒼路は……」

やにわに、深紅が口を開いた。

俺は遠慮がちに顔を上げる。が、深紅は俺を見ていなかった。

伏し目がちに俯いて、その手を膝の上で所在なさげに組み合わせている。

「蒼路は、いつもそうね。いつも独りで考えて、行動して。無茶ばかりする。毎日怪我をして満身創痍なのに、笑うから……日毎わたしの足もとはおぼつかなくなってゆくわ」

「……みこう？」

俺は珍しい事態になっていることに気がついた。

深紅が、心の内を、喋っている。

それは——とても稀なことだった。

聡明で誇り高い深紅。

人にも厳しいが、誰よりも自分に厳しい彼女は、己の心を他人にさらけ出すことを恐らく弱さとみなしている。

彼女が弱音を吐いたり涙を見せたことは、俺の記憶の限りではただの一度だけ。

——そう、彼女の親父さんが亡くなった時だけだった。

「お前の事が、わからなくなりそう。わかっていると思っていたのに」

深紅は言葉を続ける。

静かな空気を、その声はやわらかく揺らし、俺の心に大きな波紋を広げてゆく。

「幼馴染なのに、こんなに遠いと思わなかった……」

遠くなんか――ない。

俺はここにいる。ずっとお前の傍に居る、そのために強くなったんだから。

そう思っている、そう言いたい。

なのに何故だ――声が出ない。

情けない俺を尻目に深紅の瞳はいよいよ潤んできた。

ど……どうしよう！

「お前はわかっていないでしょう？　お前が怪我をするたびに、私を置いてどこかへ行ってしまう度に、私がどんな気持ちになるか。だからバカだって言っているのに、お前は懲りてくれない。私の声など届かないのだわ、お前には。お前は、自分の信じるものしか信じない。だったら――だったら、私がお前の傍にいる意味は何よ？」

「それ、は」

違う、と動揺しまくりながらも俺は口をさしはさもうとした。

けれどできなかった。

深紅が――顔を上げたからだ。

濡れた黒い瞳で、今しもそこから一粒の涙をこぼしながら俺を見つめる。

白い手が伸ばされて俺の手のひらに触れた。

驚くほどやわらかで、そして冷たい手だった。

「蒼路」

酷くか細く、頼りなげな声色に、俺は動けなくなった。

こちらを訴えるように見上げてくる瞳は涙にぬれている。

今や喉は完全にその動きを停止して、ただ心臓だけが異常なほど速く脈打っていた。

「――お願いだから、自分だけで無茶をするのはもうやめて」

彼女は言った。そしてその言葉で俺は気がついた。

深紅は……俺を、心配してくれていたのだと。

思い付きで突っ走り、いつも一人で無茶ばかりをする俺を案じ、見守ってくれていたのだと。

あのビンタもいわれのない大喝も、つまりはそういうことだったのだ。

「私が何も知らない間にお前が怪我をするなんて、耐えられないわよ……！」

なのに俺はそんな彼女をどれほどないがしろにしてきただろう。

考えてみれば、今回の依頼は俺と深紅が二人で引き受けた依頼だ。

なのに俺は自分ばかりが気を張って身勝手に行動していた。

深紅がそれによって何を思うかなどと、考えもしないで。

「――深紅……」

ぽろぽろと涙をこぼし、俺の手にすがる彼女に、俺は弱り果てて息を吐いた。顔が熱い。

心臓がばくばくして、触れられている手からそれが伝わるんじゃないかと思う。

でも、そんなことはとりあえず脇に置いて、俺には言わなければいけない事があった。

「あの、さ、深紅。……――ごめん」

声がふるえたのは、鉄の意思で無視した。
俺の手を取っている深紅の手を、恐る恐る握り返して、俺は再度繰り返した。

「……ごめん。俺が、悪かった」

だから頼む。
泣かないでくれ、そんな風に。
お前に泣かれると――俺、どうしていいかわからなくなるから。

「泣くなよ……」

夢見

つないだ手がふるえている。
華奢な手のひら、普段のその気丈さからすれば、信じられないほどにやわらかく細い指。
着物に包まれたなよやかな肩の線に、脳裏をよぎる記憶があった。

――蒼路

六年前のあの雨の日。
俺たちの里が魔物に襲われて滅んだ、悪夢の日。
深紅の親父さんも、俺の親父も、みんなあの日にいなくなってしまった。

――怖いよ、蒼路……！

この、ひとは。
この華奢な肩には過ぎる重荷を背負って生きている。
五辻の後継として、呪われた姫君として。
ああ――俺はほんとうにバカだな。
彼女を守るために星師になると決めてここにいるのに。
結局なにもできずにまた泣かせてしまったんだ。

「深紅……」

心底弱り果てた俺が今ひとたび肺の奥から熱いためいきを吐きだし、深紅の手を強く握りしめた――その、刹那。

――眼が回った。

「エ……？」

ぐらりと体が傾ぎ、訳がわからぬままに俺は布団に倒れ伏した。
耳の奥でざあっと血の気が引く音が聞こえる。
視界がまっくらになって手足が冷たく縮こまった。

「そ――蒼路っ！」

深紅の、悲鳴にちかい声がすぐ耳元で聞こえる。

「いやよ、蒼路、蒼路！！」
「み……」

深紅、と、言いたいのに言葉にならない。
だから未だつないだままだった手に力をこめた。
意識が急速に闇に呑まれてゆく――貧血だろうか。
障子が勢いよく開かれる音がして、誰かが部屋に飛び込んできたのがわかった。

『何事だ、姫君！』

鎮守神の声だった。
俺は布団につっぷした状態で怠慢に瞬きをする。
動きたいが、もはや一歩も動けない。
意思に反して閉ざされ始めた意識の向こうで深紅と鎮守神の声が交錯した。

「蒼路……蒼路、しっかりして！」

『これは――大丈夫だ、血が足りていないだけだ』

深紅の甘い香りが近づいたと思ったら、直後、背に触れてくるやわらかで温かな感触がした。土の香りが匂い立つ。

鎮守神の前肢（あし）だろうか、と思ったすぐ後、深紅の金切り声が耳をつんざいた。

「蒼路に触らないで、魔物！」

『何を言う、触らねば容体もわからぬであろうが。少しは落ち着け、姫君よ』

「うるさい――お前に……お前に何がわかるっていうのよ！？」

冷静な鎮守神の声が逆鱗に触れたように、深紅はさらに叫んだ。

「わかるわけがないわ、お前なんかには、絶対にわからない！　蒼路があたしにとってどれほど大事な存在か、蒼路が、ここにいるということが、どれほど幸福なことなのか――……！」

『――わかっている！』

鎮守神が怒鳴った。

それに虚を突かれたように深紅が息を飲む。

『わかるのだ……姫よ』

声を和らげて、いま一度彼は言う。

『そなたの気持ちは、ようわかる』

「……なに、を」

『この者は――蒼路は。なんだか無性にあたたかい。離れがたくなる、際限ない光の子供よ』

大地の香りが俺を包む。
それはまるで、あたたかな落ち葉に潜り込んだかのような、懐かしく優しいぬくもり。
なんとか気絶しないようにと頑張っていた意識がその温かさに急に挫けた。
俺は眼を閉じる。
とろけそうな眠りに背中から落ちてゆく。

『我々は同志なのだ、姫。……同じ者に心惹かれた』
「……ではお前は、言えるの？　蒼路を守ると？　そのために、蒼路のためにここにいるのだと？」
『一目で、わかったのだ』

まぶたの裏側で最後に聞こえた二人の声は、なんだか心切なくなるほどに優しい音をしていた。

『蒼路を見た瞬間――この者のために我は現世に蘇ったのだと』
「……導かれて……焦がれて」
『そうだ。だから愛しい。だから……傍に、居たいのだ』

理由なんかない。
大切な人は、ただ大切なだけ。
だから傷ついてほしくないだけなんだ。

いつだって、誰だって――きっとそうだろう。

＊＊＊

ふたたび夢を、見た。

ひどく美しい――そう、美しすぎて、なんだか悲しくなるぐらいの――薔薇園に俺は立っていて。
はしゃいだ声を上げてそこを駆け抜ける、二人の子供を見つめていた。

（早く早く、ハル！　ママがバタークッキー焼いたんだよ！）
（待ってよ、アン！）
（早くしないとハルのも全部食べちゃうぞー！）

金の髪が太陽にきらめく。
碧の瞳が生き生きと互いの姿を眼に映し込む。
良く似たセーターと靴を履いて、泥に汚れた手をしっかりと握り合った彼らは、笑顔満面でとても仲睦まじそうに見えた。
甘い薔薇の香りがむせかえるようだ。
彼らは俺の前を通りすぎると、白い壁にレンガ色の屋根をした家に入って行った。
笑い声が家の中から聞こえてくる。
けれど、どうしてだろう。
こんなに幸福な情景なのに、俺の胸はひどく切なくて、泣きそうだった――。

（半星ってなに？）

情景が切り替わった。
さっきまでとは季節が変わっていた。冬だ。
金の髪をした子供達は、今は家の中でそれぞれ、楽器を練習しているところだった。

（あたしたちもアストリアになるんでしょ？　パパとママと、おじいちゃんとおばあちゃんと同じように）

大人びた物言いをする女の子は、ヴァイオリンを顎にはさんでいた。

まだ小さいから、楽器もちいさい。

そのすぐそばでは男の子の方が足に挟む楽器――そうだ、チェロ――を、同じように練習している。

（おばさんが言ってた。ぼくたちの使命は、星をつかって悪い怪物をやっつけることだって）

（そうだよね、ハル。がんばろうね！）

（がんばろうね、アン）

そうして笑いあう二人の子供を、心配そうに見つめているのはきれいな女の人だった。

子供達が外国人風の見かけをしているのに反してその人の髪は黒く、肌もアイボリーの色をしている。

ソファに物憂げに腰かけて子供達を見つめる瞳は、なんだか例えようもなく暗かった。

（どうしてなの……）

やがて子供達が会話に飽き、再び楽器をさらい始めた時、彼女はぽつりと呟いた。

俯いた拍子に長い髪がさらりと零れおちて、白い首筋が露になる。

そこには――五芒の星が刻まれていた。

（どうして、あたしの子供なのに、半星なんかに生まれたの……！）

重い呟きは、ほとんど憎しみとも言える響きを伴っていた。

だが子供達はそれに気が付かない。

二人で夢中で楽器を弾いて、やがては同じ曲を弾きはじめた。
たどたどしい旋律を耳で追う内に俺はふと首を傾げる。
この曲。
聴いたことがある。

（夏のー）

女の子が歌い始める。

（夏の名残りの薔薇……）

旋律が急速になめらかさを帯びた。
それだけじゃない。音も変わった。
低く豊かな——明らかに以前よりも上達した響き。
それを発しているのは、さっきまでの子供じゃない。
もう大人になりかけた青年の背中。
雨のざあざあ打ちつける窓際で……妹から遠く離れて。
けっして振り向かずに彼はチェロを奏でていた。

（どういうこと？）

妹は部屋の戸口に立っていた。
俺はそのすぐ脇に居たので、彼女の背がどれほど伸びたのかを目の当たりにする。
すんなりと伸びた手足に、高い背。
金の髪はすこし色が濃くなった。碧の眼はそのままだ。

（ねえ、答えなさいよハル——どういうこと、アストリアをやめるって！）

激情を隠さずに叩きつけられる声は、雨に振り込められた部屋の中で際立ってよく響いた。
だがそんな声を出しても俺にはわかった。
彼女が、ものすごく悲しんでいることが。

（どうもこうも。そのままだよ。僕はもう星は捨てる）

兄が背中で言った。
雨の庭に眼を向けたまま。
振り向いてくれない事に焦れたのか、妹はさらに声を荒げる。

（捨てられるわけがないじゃない！　これは――この星は、あたしたちの運命よ！　背負って生まれたものなのよ、ハル！）
（……煩いな。静かにしてくれよ、君がいると気が散るんだ）

興奮している妹と比較して、兄の声はどこまでも柔らかく、残酷な程に落ち付いていた。
ぎりり、という音がして俺は顔を上げた。
妹の方が強く歯ぎしりをして拳を握りしめたのだった。

（……いつから）
（何？）
（いつからそんな風になったのよ、あんたはッ！）

迸るような怒号と共に部屋の窓ガラスが砕け散った。
俺は思わず腕で顔を覆ったが、銀に輝く破片は俺の肉体に触れることなくすりぬけてゆく。
そこで初めて、これが夢なのだとわかった。
夢――いや。
思念、想い出、回想？

この兄と妹の――遠い日の姿。

（……何をするんだ！）

（黙れ！　一人で冷静ぶってるんじゃないッ、ひきょう者！　あたし達が、あたし達が星を捨てられるわけないでしょう！　そんなの、ただ逃げているだけよ！）

（……黙れ）

（黙るもんですか、いくらでも言ってやるわ――ハル。あんたは世界一の卑怯者よ！　半星だから、血を見るのが嫌いだからって、自分の背負ったものと向き合わずにただ逃げているだけ！）

（黙れよ！！）

兄の絶叫と共に轟音がとどろいて、世界が一気に暗転した。

（……ふっ……）

冴え冴えと明るい満月が、天窓から大きく覗いている。

俺は今度はどこかの屋根裏部屋に居た。

窓から見える景色は色あざやかで、日本のそれとは明らかに違う。

大きな時計塔に石造りの橋――西洋の街並みだった。

（……馬鹿、ハルの大馬鹿野郎……！）

すすり泣く声に首をめぐらせれば、部屋の隅の寝台で金の頭がふるえていた。妹の方だ。

だがさっきの場面からはまた時間が経っているらしい。

奇妙なことに、月光が照らすその彫りの深い顔立ちはげっそりと痩せて、さっきまでの逆るような生命力の残滓すら感じられなかった。

明らかに彼女は病気で――そしてとても孤独だった。

（誕生日、なのに、今日はあたしたちの……）

涙にぬれた声に、どうして誰も居ないんだろう、と俺は胸を突かれるように思った。

どうして彼女の兄はここにいないんだろう。

そして父は。母は。

あの痩せこけた手足がこんなに切なく伸ばされているのに――どうして誰もそれを掴もうとしてあげないんだ。

（おめでとうって……言えないじゃない……！）

ついにたまらなくなって俺は彼女の方へ歩み寄った。

ベッドの上に投げ出された手に手を伸ばす。

青く筋の浮いたその指先に触れた瞬間、眼に、碧色の光が差し込んできた。

それは――

（……おめでとう……ハル）

――森の輝きを秘めたペンダント。

（……ごめん、アン）

彼女の声に応えるようにして、俺の耳には兄の声が届いた。

そして伸ばした手先が溶ける。

また場面が切り替わった。

ぐるぐると回るようにして、俺は時空を超えてゆく。

（傍に居られなくて――本当にごめん）

兄はあの薔薇園に居た。
太陽の光を弾いてきらめく植物たちの緑、むせかえるような薔薇の香り。
柔らかな芝生の上に膝を突いて彼は泣いていた。
右手がきつく胸元のペンダントを握りしめている。
ぽたぽたと透明な滴が際限なく庭を濡らし、不思議な事に、彼の涙に濡れた大地はそのまま――新たな植物を芽吹かせた。
みるみるうちに若葉が芽生え、茎が伸び、蔓を這わせて、それらはやがて彼の体に絡みついた。
捕えるように、しがみつくように。
どこまでも伸びてその姿を覆い隠してゆく。
知らなかったんだ、と彼は慟哭にむせび泣いた。

（星が僕らを喰うだなんて、知らなかったんだよ――……！！）

それから後は、混乱したように画像の断片が飛び交った。
激昂した様子で両親と言い争う兄。
白い部屋でベッドに横たわりながら一輪の薔薇を手にした妹。
浮かぶ笑顔、それに反して、ベッドに突っ伏して泣き叫ぶは兄。
ぼたぼたと降る血の雨のなか、巨大な翼を広げたグリフィンに乗って、彼は無表情に魔物の心臓を素手でえぐった。

（助けて）
（大好きだよ、嘘じゃないんだ）
（気にしないで。あんたのせいじゃない）
（助けて、誰か、どうか彼女を！）
（もういいから……やめて、ハル！）
（誰かアンを助けてくれよ！　どうして誰も――）

『――誰も、助けてくれなかったんだ……！！』

身を切るようなその叫びを――俺は確かに、この耳で聴いた。

山へと

――……

なにか、固いものが割れる音に、眼を醒ました。
同時にざわりと全身を走った違和感に眼を開ける。
と、頬にぽたりとつめたい滴が落ちてきた。

（――路……）

碧の燐光が眼前で燃えていた。
否、それは、燃えているというにはあまりにも弱々しく痛ましい焔。
今にも消えそうなほど小さく細い鬼火だった。
風もないのに明滅をくりかえすその焔の下から時折、蝋のごとく白い顔が覗く。
涙はその碧の眼から滴り落ちていた。

（蒼路……）
「ハル……先輩？」

俺ははっと眼を見開いた。
そう、彼が、俺の上に覆いかぶさっていた。
けれどその口から発せられる声は先輩のものではなく、また、白い顔も彼の顔ではなかった。

（蒼路）
「……アンナさん」

俺は驚愕に思わず手を伸ばした。
燐光にふれる――手が、冷たく焼けた。どこまでも冷えて、体温を持って行かれる。
先刻の夢はもしかしたらこのひとの思念だったのだろうか。
そう考えながら俺は碧の眼を見据えた。

「……どうしてここに来たの」

俺に会いに来たの？
何を言いたいの、もうぼろぼろのその魂を、さらに傷つけるような真似をしてまで？

（――て……星が……）
「え？」

か細い声に雑音が混じって聞き取れない。
聴き返す内にアンナさんの顔がハル先輩の顔と入れ替わった。
骨格が軟体動物のように蠢き、女のものから男のものへと変化する。
だが燐光が最後の足掻きのように弱々しく閃くと、またそれはアンナさんの顔に取って代わった。

（たすけて……このままじゃ、星が……）
「星が？」
（……暴走してしまう――……！）

それが限界だったようだ。
燐光はついに消えた。
支えを失った先輩の体が、俺の体の上に容赦なく倒れ込む。

ぐっ、と俺が思わず声を挙げたのもつかの間、次に気がついた時には、先輩は目の前から消え去っていた。

「なっ！？」

驚愕に声を上げた直後――今度は轟音とともに屋敷が揺れた。

「！？」

どんっという爆発音とともに衝撃が室内を走る。

障子が音もなく吹き飛んで、生ぬるい外気が室内にごうと流れ込んできた。

思わず腕で顔を覆いながらも俺は、闇の向こうで強烈な気配が空へと駆けあがってゆくの感じた。

これは――双子の気配。

「結界が、破られた……！？」

先輩の運び込まれた北の対にはババアが結界を張っていたはず。

だが今感じた双子の気配は明らかに屋敷の外へと飛び出して行った。ということは、つまり結界が破られたのだ。

俺はとっさに体の自由を確認していた――右肩に突き抜けるような痛みが走る。

麻酔が切れているのを確認してから部屋の外に飛び出した。

「深紅！　どこだ！？」

白木の廊下が月光に照り輝いている。

庭の池も銀色の光を反射していた、が。

そんな幻想的な光景をぶちこわす異常が屋敷に発生していた。

庭の松が――苔が、竹が、天へ向かって伸びている。
猛烈な勢いで成長したそれらは、やがてぎょろりと光る眼を持った。

「げっ……」

思わず声を漏らした俺に、すぐ軒先の下の苔が気付いた。
大きくふくらみ、水草のような葉と長い根っこでもって立ち上がった――まずい！

『翔焔（しょうえん）！』

俺はとっさに手で印を組んで吠えた。
月光に輝く庭をバックに飛びかかってきたそのバケモノに、焔のつぶてを叩きつける。
が、この術、俺にも使えるほど簡単な代わり、威力が低い。
焔のつぶてはバケモノ苔を庭に押し返しただけで、その身を焼くまでには至らなかった。
そうこうしている内に今度は松の木が地面から根を引き抜いて歩き出した。
俺目がけて。

「……マジかよ！」

眼を剥きながら、仕方なく俺は右手を掲げた。
右肩の傷がきしむように痛む、が、仕方がない。
俺はいまのところ肉弾戦以外は能のない星師なのだ。
痣に左手を沿わせて刀を取りだそうとしたところ――

『――砕破（さいは）！！』

鋭利な声が響き渡った。
同時に視界を紅い光が駆ける。
どぐっと耳にこたえる嫌な音がして、上空から何かばらばらと堅い破片のようなものが降って来た。

「うわっ、なんだよコレっ！」

眼にも口にも入ったそれを吐きだしながら叫ぶ。
と、甘い香りが鼻をついた。
俺はまばたきして顔を上げる。

「安心おし、ただの松の木よ」

脇に青藍を従えた深紅が目の前に立っていた。
俺は膝を伸ばして立ち上がる。
彼女はもはや涙の跡かたもなく、いつもどおりぴんと背筋を伸ばして、自分だけの力でそこにしっかりと立っていた。

「……サンキュ。助かった」
「怪我はないわね？」
「ああ。それよりも――何が起きている？」

低く問う合間にも庭先からは次々と植物の化け物が生まれてゆく。
これはおそらく、双子の力のために生まれた魔物たちだろう。
ババアの結界を破って彼らが外に出た今、その力は星と相まって多くの魔を引き寄せ、生みだしていくのだ。

「ラン」

深紅がみじかく青藍を呼び、その頭を撫でた。
青藍は答える代わりに庭先を一瞥すると、月光をバックに空中を駆け上がる。
みごとな角が天に向けて掲げられ、美しく締まった四肢は泳ぐように宙を掻く。
青味を帯びた体が月明かりを吸収し、オパールのように輝いて——大きな角が一振りされると、無数の銀の雨が天から降った。
浄化の雨。
それに触れた魔物たちは悲鳴すらあげる間もなく溶解してゆく。
俺たちはその光景を横目にふたたび走りだしていた。

「詳しいことは道すがら説明するけれど、とりあえず、私たちは双子を追わなければいけないわ」

深紅が滑るように先を走りながら言う。
次々と襲い来る魔物の魔手はことごとく青藍が打ち払ってゆく。
俺は少し緊張を緩めて問うた。

「……ってことはやっぱりさっきのは、双子が結界を突破した音だったのか？」
「そうよ。キヨ様の結界が見事なまでに木端微塵。双子に空間師の力があることを忘れていたわ……私たちの失態よ」
「……あのさ、深紅」

俺は言っていいのか迷いながらも口を開いた。
深紅がちらりと肩越しにふり返ってこちらを見る。

「何？」
「さっき……双子が」
「双子が何？」

「俺の所に、来た」
「……何ですって!?」

かなり驚いた様子で深紅は走るのをやめた。
と、それとほぼ時を同じくして、再び大地が鳴動した。

「……また、今度は何だ……!?」

バランスを崩した深紅の体を抱きとめながら俺は床に片膝を折る。
度重なる揺れに屋敷がきしみ、軒先からぱらぱらと埃が降ってきた。
今度の揺れは長かった。
大地の奥底から何かが突き上げてくるように――重い響きが耳朶を打つ。
腕の中で、深紅がはっとしたように眼を見開いたのがわかった。

「……街が……」
「え?」
「……街が、吼えている……!」
「――」

俺も理解した。
君見丘が――すなわち山が、叫び声を上げているのだ。
そしてこの感覚を、この山の主を、俺は既に知っていた。
突風が起きる。猛々しい咆哮が闇を裂いた。
鎮守神、と俺はその声の主を呼んだ。

「怒っているのか……!」
「蒼路、あれ――!」

深紅が叫んだ。
細い指が屋敷の彼方、闇空の一点に向けられている。
俺もそちらに眼を向けて――そして信じられない光景を、見た。

「な……」

碧色の、火柱。
山の裾野の森の中から巨大なそれが天を突くように放たれている。
めらめらと燃える焔は強力で、全てを呑みこむかのように猛々しくうねっていた。

「あそこに、居るのか」

俺はかすれた声を絞り出した。
深紅がかすかに頷いた。

「双子が、あそこに……！」

行かなければ、と迸るように俺は思った。
行かなければ。
今、すぐに。

「――あの山へと……！」

山へと　2

星が、急に痛みを訴えた。
凄まじい程の羽音と鳴き声が耳を突く。
屋敷の周囲を取り巻く闇が不気味にうごめき、赤や青の光を明滅させている。

「……っ！」

急激に下がった気温に怖気（おぞけ）が走り、思わず体を震わせていた。
これは魔の気配。
思い当たって空を見上げれば、破られた結界の綻びから待ち焦がれたかのように黒いものが――妖気が流れ込んで来るのが見えた。
ばきんっと結界の残滓がさらに砕けて飛び散る音が響き渡る。
同時に屋敷の上空に姿を現したのは夥しい数の魔物たち。
俺は眼を剥いていた。

「……マジかよ！？」

――脳裏に蘇るは六年前のあの雨の日。
闇から飛来する魔物の大群を、里の外れから茫然と見つめていた俺と深紅。
そこまで考えてはっと俺は彼女を見た。
深紅は、黒耀の瞳にすさまじい怒りと憎悪を燃えたぎらせて天を睥睨していた。

「深紅」
「……嫌なことを思い出すな」

口調が変わっていた。
同時に豊かな黒髪がばちばちと呪力をはらんで翻る。
俺はとっさに彼女の腕を掴んでいた。

「ちょ、深紅、落ちつけ……ッ」

金糸の刺繍の施された布地に触れた瞬間、ものすごい呪力に手が弾かれる。ばちっ！　と放電するような音が響いた。
深紅がぱっと俺を見て叫ぶ。

「ちょ、馬鹿、何をしているのよ！」
「何って、お前を止めてんだろうが！　すぐにカッとするの止めろよ！」
「何を言っているの！？」
「……だからっ！　この状況をお前一人で打破するのは無謀だって言ってんだよ！　自分の体のこと考えろ！」
「バカにしないでっ」
「してねえよ、逆だ！」
『――星持ち、姫君！　何をしている、前を見よ！！』

言い争っている俺たちに、屋根の上から鎮守神の怒声が飛んできた。
言われたとおりにしてみれば、成る程、今しも先頭の魔物が屋敷の庭先に降り立ったところ。
蛇の体に蝙蝠の羽を持つ気味の悪い魔物が一匹、煙のように大量の魔蟲を引き連れて俺と深紅の方にその頭を振りかぶった。

「……いけない！　蒼路、息を止めて！」

深紅が叫び、俺は咄嗟に口許を袖で覆った。
視線の先で蛇の姿の魔物が首を大きく仰け反り、大きく息を吐く。
闇の中でも白く霞がかった呼気が庭じゅうに大きく撒きちらされた――毒だ、と俺は悟った。だがその刹那。

『しゃらくさいわ！！』

鎮守神が天に飛翔した。
彼が轟くような雄叫びを上げただけで、毒蛇の太い胴体が木端微塵に吹き飛ぶ。肉片が飛び散った。
同時に大気に広がった毒の息も、ハエの如くそこいらじゅうを飛び交っていた魔蟲たちも、一掃される。
漆黒の毛並みを月光にきらめかせながら彼は付き従う二頭の眷属に命じた。

『吟（ぎん）、織（おり）！』
『はっ』

二頭の狼は明朗に声を上げて鎮守神の目前に進み出る。
俺がようやく眷属の名前を知ることができたなあ、などと思っていると、鎮守神は厳しい声で彼らにこう命じた。

『今夜この屋敷に一片たりとも闇を引き入れること許さぬ！　そなたら二匹で守護を務めよ！！』
『畏まりまして！』
『確かに、承りました！』

眷属――ギンとオリは答えると、そのまま二匹で屋敷の上空、はるか高みへと駆け上がって行った。
銀の毛並みは月光を受けてまばゆく清らに光っている。

二頭で舞を舞うように螺旋を描きながら飛びあがって行った彼らは、天のある一点に辿りつくと動きを止めて、それから甲高い声を上げ始めた。
細く高い、まるで鳴弦のような鳴き声。
屋敷の周囲に群がっている魔物達がその響きに恐れをなしたかのようにじわじわと後退し始めた。
深紅が俺の脇で呟く。

「腐っても神狼ね……それなりの破邪の力を持っているようだわ」

忌々しげな物言いに俺はさすがに呆れて声を上げた。

「腐ってもって、お前もう少し言葉選べよ!!　あいつらすげえ良い奴なんだぜ!?」
「お前は魔物に甘いのよ」
「お前は容赦なさすぎるんだよ!」

ふたたび二人で喚いている間にも、神狼たちの鳴き声は細く張り詰めるようにずっと続いていた。
そしてある瞬間、急に自分たちを取り巻く大気が硬く、それでいて清浄なものに変化したのを感じ取り、俺と深紅は口をつぐんだ。
天を見上げる。
ギンとオリが二頭で向かい合い、再び舞うような不思議な動作を見せていた。
魔物達は今や屋敷からかなり離れた場所まで身を退いている。
その闇を纏った姿が、薄く紗を通したかのように霞んで見えることに俺は気がついた。

「結界が……修復されている?」

呟いた時、ふっと呼吸が楽になった。
同時に辺りを色濃く取り巻いていたあの冷たい魔の気配が、闇が。
ぷつりと感じられなくなる。

「……見事なものじゃ」

そう、感嘆に声を漏らしたのは俺の横にいる深紅――ではなく。
いつのまにやら俺たちの背後に出現していた、ババアであった。

「うわあ！！」
「……き、喜代さま！？」

いつも通り叫んで飛び退った俺と、さすがにポーカーフェイスを崩して驚いた深紅。
ババアは俺たちの反応を無表情で一瞥してから口を開いた。

「なんじゃ、お前たち。仲良う驚いて」
「そりゃ驚くだろ！！　今までどこにいたんだよ、この非常時にっ！」
「やかましい！」

思わず突っ込むと怒鳴り返された。ええっ！？
ババアはぎろりと俺を睨みつけ、深紅はそっちのけで説教を始めた。

「そもそもこれはお前達が招いた失態ではないか、馬鹿者がっ！
私の庭をめちゃくちゃにしておいて責任を人になすりつけるでない、未熟者！」
「別になすりつけてなんかねぇだろ！　ただどこに居たのかって聞いたまでで！」

「わしに頼ろうという態度が見え見えなんじゃ、この甘ったれ！」
「んなことカケラも思ってねぇよ！」
「顔に出ておるわ、阿呆！」
「あああぁあ馬鹿だのアホだの未熟者だの、どー考えても言いすぎだろッ！？」
「……あのう、喜代様。それから蒼路」
舌戦を繰り広げる俺とババアの間に割って入ったのは、深紅の涼やかで落ちついた声だった。
俺とババアは即座に彼女の方を向いた。
「何じゃ、深紅」
「何だよ！」
重なった俺たち老若の声に深紅は落ちついた様子で答える。
「……お気持ちは分かりますが、今は言い争っている場合ではないかと。一刻も早く我らは山に向わねばなりません」
『姫の言うとおりだ』
深紅に同意する声は低く豊かに、俺たちの立っている軒先のすぐ近くから響いた。
庭を埋め尽くすようにして鎮守神は俺たちの目前に立っていた。
『我が山が吼えている。双子の力が暴走を始めているのだ。キヨ、このままでは街全体が危ないぞ』
「れ。お前、ババアのこと知ってんのか？」
俺は思わず鎮守神に突っ込んだ。
昨日の今日で彼がババアを呼び捨てで呼ぶわけはない、と思った

からそうしたのだが、彼は尾を軽く振ってこう答えただけだった。

『少しな』

「……ふうん？」

さまざまな疑問が頭をかすめていったが、確かに今は時間がない。俺はひとつ息を吸い込むと、思考をきっかり切り替えて、ババアの方に向き直った。

「ババア――師匠」

「なんじゃ、馬鹿弟子」

返ってくる罵声は無視して俺は彼女の足もとに膝を折った。

どちらにせよ、俺たちだけではこの屋敷を脱出できない。

「俺は深紅、鎮守神と共に山へ向かいます。つきましてはなにとぞ後援をお頼み申し上げたい」

「……フン」

ババアは相当厭味ったらしく鼻を鳴らしたが、断りはしなかった。黙って天に視線を向けると、山から迸る碧色の火柱を見つめていた。

その僅かな沈黙の間に、俺は深紅を見、鎮守神を見、屋敷のはるか上空に控えている眷属たちを見やった。

そして今胸に荒れ狂っている様々な感情の名を確認する。

愛しさ、懐かしさ、哀しみ、切なさ。

けれどそれらよりもっとずっと強いものは――誇り。

俺が己の星に眼を落とした時、ババアがようやく口を開いた。

「……良いじゃろう」

彼女は俺を見た。

「そなたらを屋敷から無事に出してやる。――だがな」

「……何ですか？」

嫌な予感に顔をひきつらせる俺に、ババアは静かな声でこう言った。

「必ず、帰って来るのだぞ。蒼路。深紅とその犬とともに」

「――」

俺ははっと眼を見開いた。

ババアの小さい眼と視線が真っ向からぶつかる。

「お前は自覚せねばならぬ。お前が人を、魔物を愛して止まないのと同じように――……お前も、周囲から愛されて止まぬということをな」

「バ……」

ババア、と、俺は呼ぼうとした。

けれど言葉にはならなかった。

驚きとも、喜びともつかない奇妙な感覚が、身体じゅうを走り抜けてもどかしい。

「さ。わかったらさっさと身支度をするのじゃ。――鎮守神、これらを頼む」

『うむ』

ババアは鎮守神に命じると背を向けて行ってしまった。

俺はその小さな背を見つめて何とも言えない感情が胸に満ちてゆくのを感じる。
ぼうっと見送っていると、深紅が俺の腕にそっと手を置いて声をかけてきた。

「……さ。蒼路」
「……ん」

俺はちいさく頷くと、鎮守神に向き直り、その広い背に飛び乗った。
……なんか変な気分になってしまったが。
俺はとにかく前に進まねばならない。
この夜を、走り抜けなければいけない。
優しい人たちのやさしさには、帰って来てから存分に答えよう。

「――行こう」

＊＊＊

「頼むぞ、珠枝(たまえだ)！」

齢八十八とはとても思えぬ、よく通るババアの声。
それに答えて俺たちの先鋒を務めるのは金色の毛並みに九本の尾を持つ大妖、九尾の妖弧。

『グズの蒼路の手助けをしなきゃいけないなんてねぇ。あたしも見下げられたもんだね、まったく！』

ぶつくさ言いながら光の如き速さで空を滑空する彼女の後ろに俺たちは続いた。

珠枝はババアの召喚獣。
その見かけどおりスーパーウルトラ強くて性格の悪い妖弧で、俺は修行と称されては何度殺されかけたかわからない。
だがその実力は俺の知りうる召喚獣の中でも最強。
げんに今、屋敷の結界を何事もないかのようにすりぬけた珠枝は、そのままうぞうぞと結界の周囲に群がっていた魔物たちの中に突っ込んで行くと、面倒くさそうに数本の尾で宙を煽いだ。
――それだけ。
それだけ、である。珠枝がしたのは。
だのに。

「……恐ろしい……相変わらず恐ろしい獣だ……っ！」

ひいい、と俺は自分で自分を抱いていた。
何が起きたのかと言うと、あれほど大量に蠢いていた魔物達の姿が一瞬で金の灰となって崩れ去ったのだ。
それはあたかも風に砂が飛んでいくかのような、あまりにも静かでゆるやかな変化で、だからこそ俺は恐怖を覚える。

『ほら、これでいいんだろう？』

面倒くさそうにこちらをふり返った珠枝に、俺はがくがくと首を縦に振って答えた。
途端に鎮守神が猛然と滑空を開始する。
うわ、と俺はバランスを崩し、深紅ですら小さく恐怖の声を上げた。

「ちょ、鎮守神……もっと静かに飛べよっ！」
『そんなことを言っている余裕はない！　しっかりつかまっていろ、星持ち、姫！』

風を切りながら朗々とした声で鎮守神は叫ぶ。
そしてそのまま凄まじいスピードで山の裾野めがけて飛び始めた。
これでは山に辿りつくまでに死ぬな、と思ったのは、恐らく俺だけではなかったに違いない。

「もう、だから魔物は嫌なのよ――……ッ！！」

深紅の悲鳴が、闇空に尾を引いて響きわたった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7753u/

星師

2011年11月20日20時03分発行